平成30年度

研　究　集　録

川越市教育委員会委嘱学校研究
川越市教育委員会指定学校研究

川越市教育委員会

あ　い　さ　つ

川越市教育委員会教育長
新保　正俊

平成３０年度学校研究の成果を、ここに「研究集録」として刊行することになりました。川越市教育委員会委嘱学校研究の１８校、小中連携教育研究指定校の３校、研究指定校の１校、指定学校研究の６校が、全職員の協力のもと真摯に研究に取り組まれたことに、心から敬意と謝意を表します。

グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会が急速に変化する中、学校教育においては、子ども達が自らの人生を切り拓いていくために、基礎的な知識・技能を確実に習得し、それらを活用して、考え、判断し、表現することによる問題解決力や、豊かな人間性などを育てていくことが求められています。

川越市と川越市教育委員会では、第二次教育振興基本計画の基本理念を「生きる力と学びを育む川越市の教育」として、次代を担いたくましく生きる児童生徒の育成のため、様々な取組を推進しております。また、各学校においては、確かな学力や自立する力の育成、豊かな心と健やかな体の育成を推進し、特色ある学校づくりに取り組んでいただいているところです。

こうした中、研究校では、自校の実態や課題を的確に把握した上で研究主題を設定し、教員の資質向上や指導方法の工夫、学習環境の整備等、教育活動をより深化・充実させる実践を重ねてこられました。

それぞれの学校の研究成果は、主体的に学習活動に取り組む児童生徒の姿、わかる・できる楽しさや喜びを実感する児童生徒の姿、他者と協働して課題を解決しようとする児童生徒の姿など、子ども達が学びを深める姿となって表れております。特に、委嘱学校研究２年次の９校につきましては、学校の特色を生かした研究の成果を発表され、他校に多くの示唆を与えていただきました。

各学校におかれましては、教育活動をより活性化するための具体的な手立てとして、本集録にまとめられた研究内容や成果を、積極的に活用していただきたいと思います。そして、子ども達が、夢や志をもって自己実現を成す力を育成するため、各学校の教育活動を一層推進していただくことを期待しています。

結びに、研究に携わってこられた各学校及び地域・保護者の皆様の御尽力と、御指導いただいた関係の皆様に心より感謝申し上げ、あいさつといたします。

研究主題

「体育好きな泉っ子の育成」
～運動の楽しさを実感できる授業づくり～

川越市立泉小学校

研究のポイント
○体育好きな児童を増やすには、どんな授業をしたらよいかを研究のスタートとする。
○運動の楽しさを児童に味わわせる授業を研究する。
（４つの楽しさ…動く楽しさ　分かる楽しさ　伸びる楽しさ　関わり合う楽しさ）
○研究を体育科の授業だけに特化して行う。

１　研究の概要

（１）研究のねらい

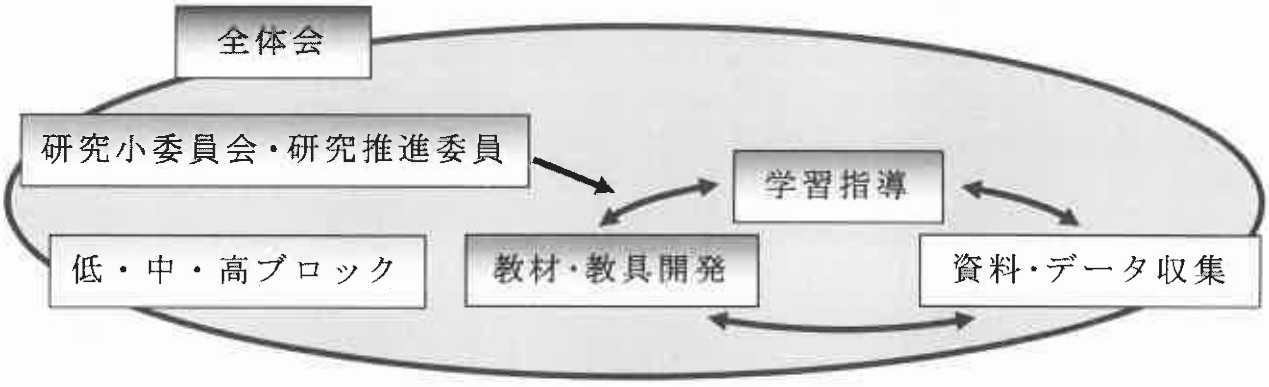
本校は、平成２９・３０年度の２年間にわたり、川越市教育委員会及び川越市教育研究会の委嘱を受け、研究テーマ「体育好きな泉っ子の育成　～運動の楽しさを実感できる授業づくり～」を掲げ、研究に取り組んでいる。本校の過去３年間の研究内容を振り返ると、「特別支援教育の視点を生かし、コミュニケーション能力を高める授業づくりの工夫」を掲げ、研究に取り組んだ。「豊かな関わり合いを通して、泉っ子が輝いてほしい」という教師の願いによる研究であった。本年度の研究内容を決定するにあたっては、こうした教師の願いをもとに、本校における重要課題の一つである体力向上を切り口として研究に取り組むこととした。具体的には、体育科の授業研究会を研究の中核に据え、「運動の楽しさ」を追求する中、指導の工夫・改善に関する研究を進め、運動の楽しさを実感し、体育好きな児童を育て、生涯にわたって運動に親しむ資質をどの子にも育むことをねらいとしている。

（２）研究主題設定理由

本校の児童は、明るく素直な子が多い。また、外で遊ぶ子も多い。しかし、運動をする児童と運動をしない児童の二極化や、体育が「あまり好きではない」「好きではない」と感じている児童も見られる。また、生涯スポーツの観点から、これまでの小学校期における体育科の役割は、生涯スポーツへつなぐ準備段階として考えられていた。しかし、これからの学校期における体育科は、準備と生涯スポーツ即実践の二重機能を備え、自発的・自主的なスポーツの意味・価値を伝えていく役割を担っている。本校における児童の実態、そして、生涯スポーツの観点から、小学校期に「体育好きな子ども」育成することで、将来にスポーツの選択肢を残し、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てることができると思われる。

そこで、本研究では、授業改善に特化した研究を進め、子どもたちが「運動の楽しさ」を実感できる授業を実践していくことで、体育が好きな子どもの育成に繋がると考え、本研究主題を設定した。

（３）研究組織



２　研究の内容

（１）研究の仮説と仮説にせまる手立て

目指す児童像　運動の楽しさを味わい、生涯にわたって運動に親しめる児童

低学年：友達と仲良く、力いっぱい運動を楽しむ子
中学年：友達と協力し合い、運動を楽しむ子
高学年：友達と高め合い、運動を楽しむ子

＜研究仮説＞

仮説１
運動の特性や魅力を味わわせる学習過程を展開すれば、運動の楽しさを実感させることができるであろう。

仮説２
児童の実態に応じた教材教具・場を工夫すれば、運動の楽しさを実感させることができるであろう。

仮説①にせまるための手立て
① 児童の実態の徹底調査
② 学習過程の工夫
（学習過程の明確化）
③ 学習規律の徹底
④ めあて学習の工夫
（学習カード）
⑤ 児童同士の学び合いの工夫

仮説②にせまるための手立て
① 技能分析
② 児童が楽しめる場や教材教具の工夫
③ 単元の徹底的な教材研究
④ 運動量を確保するための場の工夫
⑤ 指導と評価の一体化

（２）本校における運動の楽しさの分析

<table>
<tr><td>【動く楽しさ】
自ら体を動かそうという気持ちになったり、力いっぱい運動することができたりしたと感じること。</td><td rowspan="3">【伸びる楽しさ】
運動ができた、技能が向上した、体力を高めることができたと感じること。</td></tr>
<tr><td>【関わり合う楽しさ】
集団内でお互いに教え合ったり、励まし合ったりすることができたと感じること。</td></tr>
<tr><td>【分かる楽しさ】
課題意識を持ち、課題の解決に向けて運動したり考えたりする中で、新たに感じたり、分かったりしたことがあったと感じること。</td></tr>
</table>

（３）専門部の取組

○学習指導部

1　学習指導案の形式の検討と提案

・埼玉県の体育必携を参考にし、指導案の形式を決め、どの学年でも共通して使えるようにした。

・全ての児童に『運動の楽しさ』を実感させるための工夫や、どの教師でも、どんな場面でも同じような指導ができる手立てを学習過程と本時の展開で記載した。

・運動の特性に合わせて、その運動に合った『運動の楽しさ』がわかるように示した。

2　学習カードの検討と提案

・学習カードの中に学習計画を盛り込んだ。

・「泉小の運動の４つの楽しさ」をカードに明記した。

・全学年で学習カードの形式を統一した。

3　「関わり合う楽しさ」を実感させるための掲示物

・関わり合う楽しさを実感させるために、友達に対する具体的な声かけを示した掲示物を用意し、それを見て誉めたり、励まし合ったり、教え合ったりできるようにした。

○教材・教具開発部

低学年…「マット遊び」学習の展開を物語性にして、児童の意欲を喚起した。１時間の学習で身に付けさせたい動きを、サーカスの技「たまのり」「くうちゅうブランコ」「火のわくぐり」「つなわたり」に置き換えて表現した。

中学年…「走り高跳び」めあてにあった方法（斜めゴム・２本ゴム・リズム）を選べるようにし、思いきり跳び越しができるようにさせた。またゴムをバーの代わりにしたことでバーにあたる抵抗感を少なくすることができた。

高学年…０号ボールを用意し、片手でつかんでパスをしたりシュートをしたり、ドリブルをしたりできるようにさせた。また、シュートを決めると段ボールのゴールに当たり、音が鳴るよう工夫した。また、ダンボール以外のところは鈴をつけ、音が鳴るようにした。

○資料・データ収集部

本校児童が体育科の授業に対してどのようなイメージをもっているのか、また領域別の興味・関心はどのようなものなのかを調べるため、アンケート調査を行った。６月に１回、１１月に１回アンケートを２回行い、結果の比較を行った。

3　実践事例

低学年ブロック　**「みんなでそろってくるりんぱっ！～泉っ子大サーカス～」**

（器械・器具を使っての運動遊び）

中学年ブロック　**「リズムに合わせてHighジャンプ！」**　**（走・跳の運動）**

高学年ブロック**「バン！バン！ハンドボール！Ⅱ」**　**（ボール運動）**

4　研究の成果と課題

○教師の体育科指導に対する心構えが変容し、体育好きな児童を育てるための授業改善に教師が意識的に取り組むようになった。

○指導案の書式を統一したことで、「楽しさ４観点」を実感させる手立てが明確となり、指導の充実を図ることができた。

●運動に積極的に取り組む児童とそうでない児童の二極化に対応するため、全運動領域における特性や魅力を味わわせる学習過程を研究し、児童一人一人が意欲的に取り組める授業研究を進める。

研究主題

「“自分事”として捉え、話し合い、よりよい生き方を考える道徳科指導」

川越市立月越小学校

研究のポイント
○「問題解決型」の授業展開
○「新グループ学習」を用いた少人数での話合い

1　研究の概要

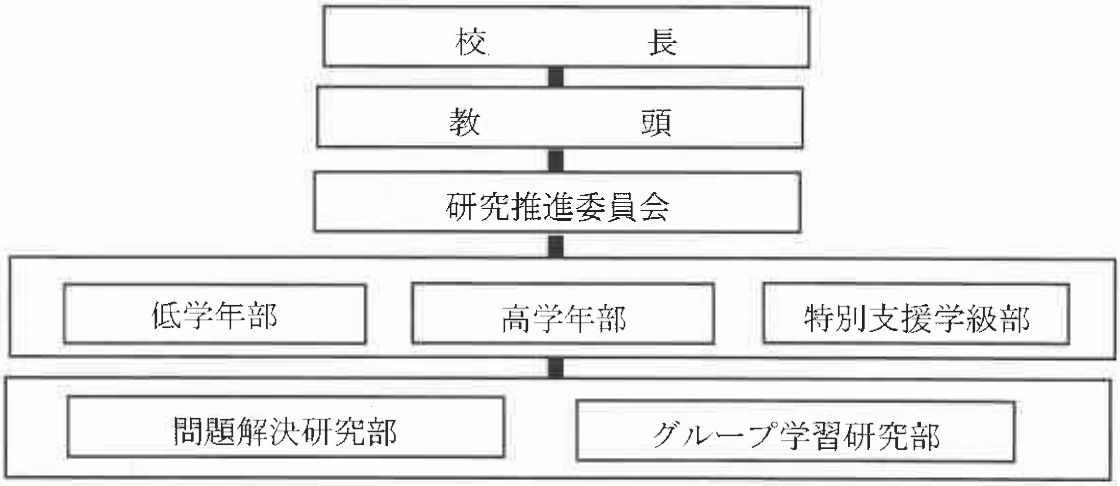
（1）研究のねらい

よりよい行動を選択・判断できる児童を育成したいという願いのもと、従来の道徳の時間の授業を追いかけるのではなく、全職員一丸となって新しい道徳科としての授業を創造していくことを研究のねらいとした。

（2）研究主題設定理由

本校の児童の実態をふまえ、実際の生活場面における問題場面と資料における道徳上の問題場面との関連性をもたせ、道徳的問題を解決していくにはどのような考え方がよいのかを全員が諒解できる解決策、大切にすべき価値を見いだす力をつけていくことが大事であると考えた。そこで、学校研究の研究対象を問題解決型の道徳科の授業の在り方に絞り、児童の道徳性の向上を目指すこととした。

（3）研究組織



2　研究の内容

仮説１
　問題解決型の授業を展開すれば、“自分事”として考えることができる。
仮説２
　小グループでの話合いを充実させれば、よりよい生き方を見いだすことができる。

（1）仮説１に迫るための手だて

①導入の工夫

ア　場面絵の活用

場面絵を提示し、「何をしているのかな？」など問いかけながら場面に引き込む。

イ　問題場面の設定

教材を加工し、より切実感のある問題場面を作り出す。

情況設定をしっかりと押させる。

ウ　問題場面の難しさに共感

行動選択を迫られている主人公の置かれた立場が、難しいものであることに共感させる。

②グループ課題の設定

生き方の選択が表れるグループ課題にする。

〈グループ課題の例〉

ア「ＡとＢ、どちらがいいだろうか。」

イ「～してもよいだろうか、それともよくないだろうか。」

ウ「○○（主人公）は、どうするのがいいのだろうか。」

エ「自分だったらどうするだろうか。」

本気で議論したくなるようなグループ課題を設定することで“自分事”となる。

③練り上げ

ア　児童のみで構成されるグループ学習だけでは不十分な点を教師とともに考え、吟味する。グループ学習で「諒解」された意見を、理由に注目しながら分類し、共通点と相違点を見つけ、より価値の高いものを見つけていく。同時に、人間の弱さにも共感させる。

イ　「とどめの発問」より深く考えさせるための、最後の発問。

〈とどめの発問の例〉

○「手伝いに来てくれた子が男の子だったら手伝いを頼むの？」

○「友達は謝らなくていいと言った場合、それでも自分は謝りにいくの？」

④振り返り

ア　授業の最後の振り返り

学習を通して考えたこと、思ったことなどを低学年はワークシートに、高学年はノートに記述。また、「学び方」「新たな気付き」「実践意欲の高まり」を３段階で自己評価。

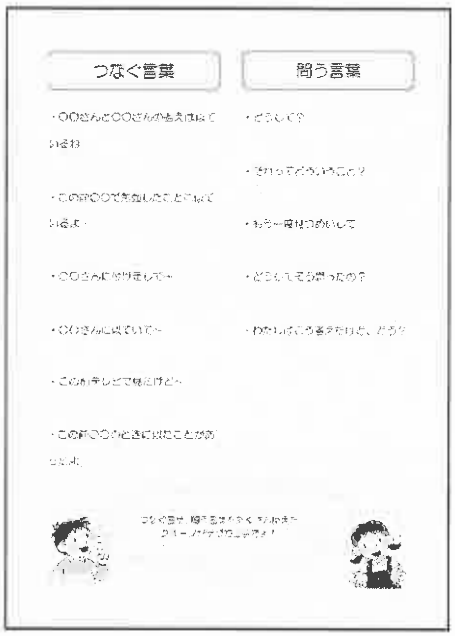
イ　道徳タイム

月１回、業前活動で「道徳タイム」を設定。日常生活の中で生かされているかを振り返り、気付きをワークシートやノートに記述。

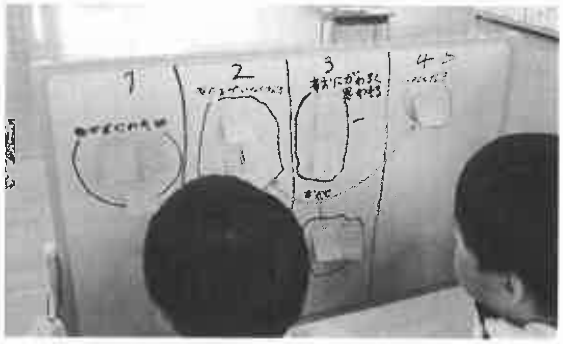
（２）仮説２に迫るための手だて

「新グループ学習」を成立させるための５つの原則（１相互協力関係、２対面的積極的相互作用の向上、３個人の責任の明確化、４社会的スキルの獲得、５グループ改善の手続き）を実践するための提案。

①「問う言葉」「つなぐ言葉」の提示



②移動型ホワイトボードの活用

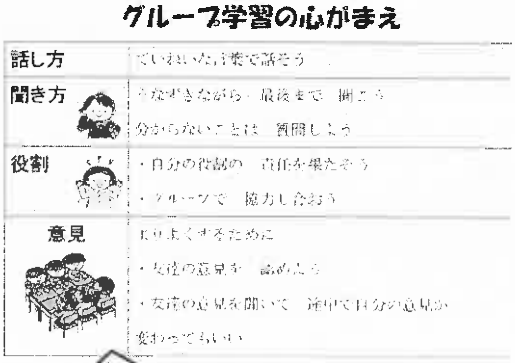


付箋紙に自分の考えを書き、グループ全員の考えをホワイトボードに貼って、意見を整理、比較、検討する。

③個人の責任の明確化

輪番制で一人一役を担当し、個人の責任を果たす。

④社会的スキルの獲得

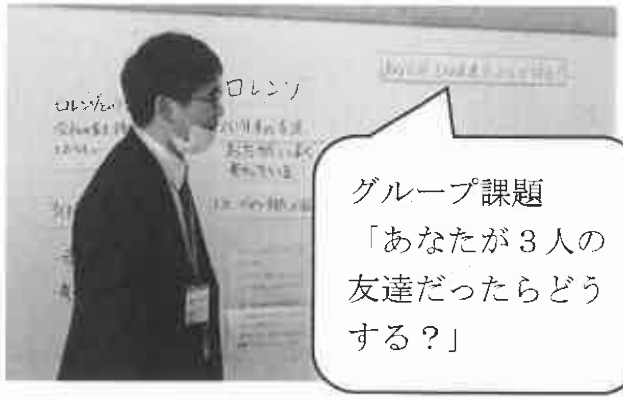


話合いは、諒解（グループ全員が納得するよりよい考え）を作るためのもので、誰の意見が正しいかを吟味することではない、ということを示す。

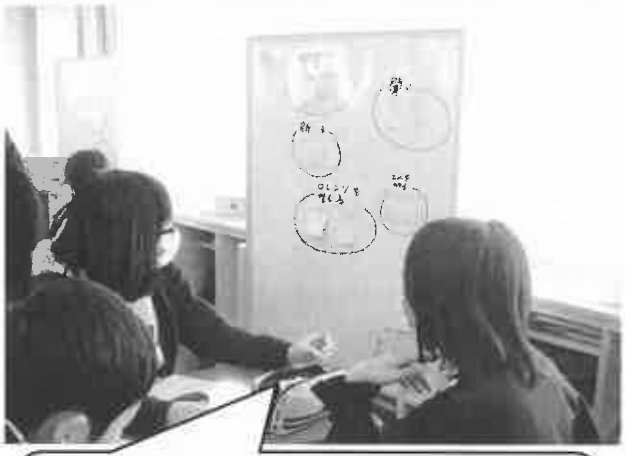
3　実践事例

第６学年　主題名：真の友情（Ｂ１０　友情、信頼）「ロレンゾの友達」

場面絵を示し、３人がどのような情況にあるのかを整理する。



グループ課題「あなたが３人の友達だったらどうする？」



移動型ホワイトボードを使って、出し合った意見を見比べ、「諒解」をつくる。

各グループから出された課題を理由に沿って分類し、より価値の高いものはどれかを吟味する。その後、とどめの発問「ところで、３人はロレンゾが本当に盗みをしたと思っているの？」

授業後の児童のノートより

刑事の話に耳を傾けながらも、友達を信頼したいと思った。お互いに信頼できる友達関係を築いていきたい。

4　研究の成果と課題

（１）成果

自分なりの考えを持つことにより、友達との意見の比較ができ、視野を広げたり、自分の考えを深めたりすることができるようになった。自分の意見をもつからこそ、人の意見を聞いてみたくなるという傾聴の態度が出てきている。

（２）課題

グループでの「諒解」を作ることをゴールとしているが、ゴールにたどり着くために、議論が妥協になってしまうことがあった。グループ学習に与えられた時間の使い方を工夫させることで改善を図っていきたい。

研究主題

「学習したことを活用し、主体的に学習に取り組む児童の育成
～国語科「読むこと」の領域を中心とした指導の工夫～」

川越市立今成小学校

○　「読むこと」の領域を中心とした指導の工夫をする。
○　既習事項や学習の見通しを掲示し、わかりやすい課題を設定する。
○　自分の考えが表現でき、指導事項が反映される言語活動の設定と考えを広める場の工夫をする。
○　話合いの形態や方法を工夫する。

1　研究の概要

(1)　研究のねらい

国語科の授業において、学習したことを活用して、主体的に学習に取り組む児童の育成を図る。

(2)　研究主題設定理由

本校では、平成２７年度まで体育科の委嘱学校研究に取り組み、「自ら夢中で取り組む児童の育成」と「仲間と豊かに関わりあえる授業の創造」に取り組んできた。平成２８年度からは、入間地区学力調査の結果などを踏まえ、本校児童の課題である国語科の学力の育成に取り組むこととなった。平成２７年度までの体育科学校研究で培った、自ら夢中で取り組む「主体的な姿勢」を国語科学校研究でも継承し、平成２８年度は研究主題を「国語科における基礎的・基本的内容の確実な定着を図り、主体的に活動する児童の育成」とした。研究一年目は「学びの土台づくり」に取り組み、基礎的・基本的な内容の定着を図るための環境づくりと授業改善を行った。平成２９年度からは、研究一年目で培った学びの土台を生かし、研究主題を「学習したことを活用し、主体的に学習に取り組む児童の育成」とし、自ら学ぶ姿勢を育む児童の育成に取り組むこととした。

①　目指す児童像

【全体像】　自ら学ぶ姿勢をもち、考えを伝え合い認め合う子
【低学年】　自分の考えをもち、進んで表現できる子
【中学年】　自分の考えの理由を明らかにし、相手を意識して表現できる子
【高学年】　自分と他者の考えを比較して、根拠や理由を示しながら表現できる子

②　本校における指導の重点

ア　国語科における基礎的・基本的な学力を身に付ける。
　（ア）　視点を明確にして読む指導を行い、読解のための技能を高める。
　（イ）　指導事項に応じた単元を貫く言語活動を取り入れ、習熟を深め活用力を高める。

イ　自身の知識を深め、様々な考えを共有し合える場の整備を行う。
　（ア）　図書室の有効活用や並行読書を積極的に取り入れることで、知識や言葉の幅を広める。
　（イ）　児童の良い考えや思いを広め、達成感や成就感を味わえるような学習環境づくりを推進する。

(3)　研究組織

研究推進委員会
校長－教頭－委員長・研究主任－委員（学年１）

授業研究部
１年・２年・３年・４年・５年・６年・教務部

言語充実部
１年・２年・３年・４年・５年・６年・教務部

調査環境部
１年・２年・３年・４年・５年・６年・教務部

2　研究の内容

(1)　研究仮説

基礎的・基本的な内容の確実な定着を図り、学習したことを活用する場や、考えを深め合う活動を意図的に設ければ、主体的に活動する児童が育つであろう。

(2)　仮説に対する手立て

知識・理解

【全ての児童が参加できるわかりやすい授業】

①　既習事項や学習の見通しを教室に掲示
②　学校図書館との連携
③　児童にとってわかりやすい課題の設定
④　学習内容の振り返りや自己評価ができるワークシートの活用

活用・表現

【学習したことを活用する活動】

①　学習したことを活用できる、言語活動の設定
②　自分の表現したことを広め、認め合える場の設定

協働・交流

【自分の考えを深めるための交流活動】

①　話合いの形態の工夫
②　交流したことを広める場の設定
③　グループ学習における課題とゴールの明確化

研究の取組

主体的に学ぶ児童の育成

授業研究部
- 言語活動の工夫
- 授業計画の作成
- ワークシートの考案

本校における指導の重点
①国語科における基礎的・基本的な学力を身に付けさせる
- 視点を明確にした読む指導
- 指導事項に応じた言語活動の設定

②自身の知識を深め、様々な考えを共有し合える場の整備を行う
- 達成感や成就感を味わえる学習環境づくりの推進
- 図書室の有効活用や並行読書

主体的な学習

言語充実部
- スキルタイムの精査・計画
- 自主学習の推進

調査環境部
- 国語アンケートの調査と考察
- 国語科掲示物の作成

研究仮説
基礎的・基本的な内容の確実な定着を図り、学習したことを活用する場や、考えを深めあう活動を意図的に設ければ、主体的に活動する児童が育つであろう。

研究主題「学習したことを活用し、主体的に学習に取り組む児童の育成」
～国語科「読むこと」の領域を中心とした指導の工夫～

3　実践事例

(1)　授業研究部

研究主題に迫る国語科授業の充実と改善を行う。

①　既習事項や学習の見通しの掲示
・わかりやすい課題の設定

学習計画をホワイトボードにて毎時間掲示した。

②　自分の考えが表現でき、指導事項が反映される言語活動の設定・考えを広める場の工夫

１時間ずつ積み重ね、リーフレットづくりを行った。
（ワークシートの表紙）

③　話合いの形態や方法の工夫

学年の実態に応じて話合いの形態・人数を変えた。

(2)　言語充実部

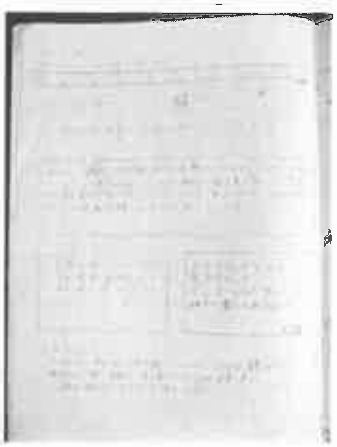
スキルタイムの計画と自主学習の推進を行う。

①スキルタイム（本校で金曜日の業前に取り組んでいる学習タイム）の内容の精査

入間地区学力調査と埼玉県学力・学習状況調査の考察から、「読むこと」と「漢字」の習熟に着目した内容に統一した。

②自主学習の推進

自主学習のメニュー作成や保護者への協力を呼びかけ、自主学習の定着を図った。



[自主学習メニューの作成と配布]

[保護者からコメントをもらう活動]

(3)　調査環境部

児童の意識・実態調査及びその分析と言語環境整備を行う。

①児童の「主体性」に関する調査と「国語科」に関する意識調査を実施

②言語環境の整備

「文ちゃん人形」「司会進行表」「声のものさし」を作成

4　研究の成果と課題

(1)　成果

・単元名の工夫や、魅力的な言語活動の設定等により、昨年度に比べて、主体的に授業に取り組む児童が増え、国語の学習に対する意欲の高まりを実感することができた。

・入間地区学力調査の結果から、「読むこと」の領域で伸びが見られた。

・話合い活動を積極的に取り入れ、相手に意見を述べたり、質問をしたりする活動を重ねる中で、児童が自分から仲間と関わり合い、考えを深める機会が増えた。

(2)　課題

・児童のこれまでの学習経験や実態を踏まえて、より多くの児童が興味・関心をもち、指導事項の系統性を意識した言語活動を設定する必要がある。

・児童は設定した言語活動に進んで取り組むことはできたが、単元を通して身に付けた力を活用するための機会や方法をさらに増やし意識化できるよう、より工夫していきたい。

・児童がさらに主体的に取り組むための指導方法等について、全教員で共有化を図り、研究成果を生かした、読むことにおける学習指導を継続することである。

研究主題

「豊かな人間関係を築き、自分たちの生活をよりよくしようとする児童の育成」
～「読むこと」（説明文）の取組を通して～

川越市立芳野小学校

研究のポイント

○国語科の研究を通して、学習意欲と読解力を身に付けさせ、一人一人の学力向上を目指す。
○学校と家庭が一体となった研究に取り組み、児童だけでなく、地域も芳野小は国語の研究を熱心に取り組んでいると分かる研究を目指す。
○２年間の研究が芳野小の国語科のスタンダードとなるような研究を目指す。

1　研究の概要

（１）研究のねらい

本校では、埼玉県学力・学習状況調査や全国学力・学習状況調査の結果から、読解力に大きな課題があることが分かった。また、自分の考えを相手に伝えることが苦手だと感じている児童も多数いることがアンケート調査から分かった。このことから、国語科の説明文の授業を中核に、主体的・対話的で深い学びを通して、学習の基盤である読解力を身に付けさせ、一人一人の学力向上と学習意欲の向上を目指した研究に取り組むこととした。

（２）研究主題設定理由

新学習指導要領で求められている主体的・対話的で深い学びの授業実現に向け、学び合い、教え合いを活性化するだけでなく、読む力や話す・聞く力はもちろんのこと、思考力や表現力など総合的な学力を高めながら豊かな人間関係を築くことが児童同士の深い学びに繋がると考える。また、読解力をしっかり身に付けることにより、全ての教科で学力向上に繋がり、将来の生活をより豊かにする。そこで、国語科の説明文の読み取りを通して、児童一人一人に確かな学力を身に付けさせたいと考え、本主題を設定した。

めざす児童像　**「自ら考え、自信をもって行動する子」**

「豊かな人間関係」＝学び合い	「生活をよくする」＝確かな読み取り
《低学年》 ・友達の話をよく聞き、進んで考える子	《低学年》 ・順序を考えて読み取れる子
《中学年》 ・友達の考えのよさに気づき、進んで解決する子	《中学年》 ・事実と意見との関係を考えて、文章を読み取れる子
《高学年》 ・友達の考えを取り入れ、自分の考えを深めようとする子	《高学年》 ・文章の内容を的確に捉え、自分の考えを明確にしながら読み取れる子

（３）研究組織と取組

研究推進委員会
・校長、教頭、教務主任、研究主任、副主任、各専門部長

各専門部

【授業研究部】
・授業全般
・学習指導案　等
・今月の詩
・音読発表会

【調査環境部】
・アンケート
・考察（学力の伸び）
・掲示物　等

【すいすい部】
・視写
・詩の暗唱
・家庭との連携
（家読、家庭通信）

各学年・ブロック
・授業実践・学年会・ブロック会議

２　研究の内容

・研究の視点

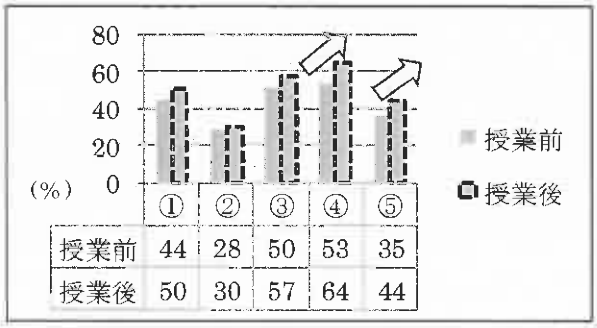
〈視点１〉各学年における指導事項を踏まえ、**自ら考える場と学び合いの場**を取り入れた学習過程を明確にし、指導する。
〈視点２〉**音読、視写、語彙力の向上、読書量の増加などの指導**を通して、基礎基本の習得を目指す。
〈視点３〉「読むこと」に関する**日常的な言語環境や学習環境**を整える。

３　実践事例

（１）アンケートの取組

各学級における国語科全般や読むことに関する意欲面を見届けるために、説明の学習をする前と後にアンケートを実施し、各学級の実態把握をするとともに、個の変容の把握に努めた。

【説明文　学習前と学習後での児童の意識の変化】



	①	②	③	④	⑤
授業前	44	28	50	53	35
授業後	50	30	57	64	44

（平成３０年度２学期の調査結果）

〈アンケート項目〉※（　）内は回答内容
1 国語の授業は好きですか。（好き）
2 説明文の学習は好きですか。（好き）
3 １人で読んで解決しようとしていますか。（よくしている）
4 自分の言葉で書こうとしていますか。（よくしている）
5 授業に関連した本を進んで読もうとしていますか。（よくしている）

説明文の学習の前後に実施した児童アンケートの結果、学習前と学習後の伸びが、表の①・②で「好き」と回答した児童の割合、及び表③～⑤のそれぞれの項目で、「よくしている」と回答した児童の割合で伸びが見られた。特に④、⑤については、１０％近く伸びた。

リーフレット作りなどの言語活動を全学年の「読むこと」の単元計画に位置づけ、並行読書と合わせて意欲を高めながら実践してきた成果が表れたものと考える。

昨年度は、説明文の重点指導項目である①内容の理解②構造の理解③読解技能の理解を意識しながら、問答中心の授業から主体的な言語活動中心の授業になるよう、授業実践に取り組んだ。特に読むことと書くことを関連づけた指導、**「単元を貫く言語活動」**を中心に授業実践を積み重ねてきた。

本年度は、更に書く活動を充実させ、まとめに条件作文を取り入れたり、授業の振り返りを位置付けたりして読解力を身に付けさせてきた。

【６年「町の幸福論」】―コミュニティデザインを考える―

授業のまとめは、
１５０字程度の条件
作文でまとめる。

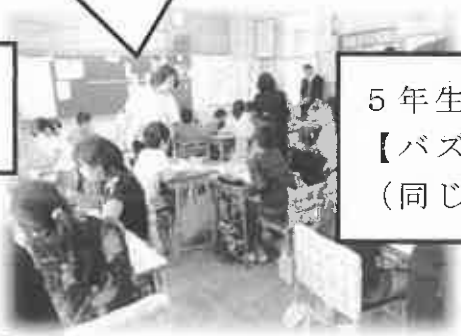
全国学力・学習状況調査のＢ問題
を意識し、活用する力を高める。

１０月３０日　研究発表の様子

書く活動の充実とともに、主体的・対話的で深い学びの授業実現を目指し、共有化の場面では、「知識構成型ジグソー法」や「バズセッション」を積極的に取り入れた。

１年生　「いろいろなふね」
【ペア学習の様子】

４年生「くらしの中の和と洋」
【ジグソー法の様子】
エキスパート活動→ジグソー活動



５年生「和の文化を受けつぐ」
【バズセッションの様子】
（同じ範囲を読み取る集団）

４年生【分科会の様子】

（３）音読発表会の取組

日頃の音読練習の成果と相手を意識しながら読むことで音読の楽しさを知ることを目的とし、業前活動の時間に学年ごとに発表した。

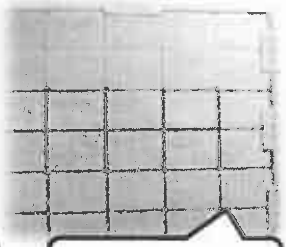
平成３０年度　各学年の発表内容

１年「いろいろなふね」
２年「空にぐうんと手をのばせ」
３年「とる」
４年「わっしょいわっしょい」
５年「雨にも負けず」
６年「生きる」

（４）暗唱の取組

様々な日本語の表現に触れ、親しんで欲しいとの願いから、詩や古文、百人一首などの暗唱に取り組んだ。平成３１年１月末現在で述べ１１７９人が合格した。

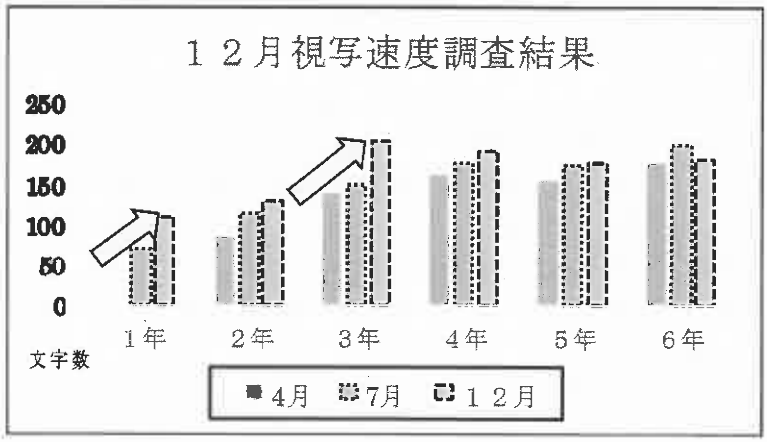
全校児童の前で表彰



暗唱一覧

（５）視写の取組

読解力を付けるために、全校で毎週木曜日のモジュールの時間を活用して、１５分間程度、文章や詩などの視写に取り組んだ。また、視写速度調査を毎学期実施し、個の伸びを見た。



４　研究の成果と課題（成果○課題▲）

○１単位時間の学習過程を統一し、明確にしたことにより、児童は見通しを持って授業に取り組むことができ、学習意欲の向上に繋がった。

○読む・書くの言語活動を中核に据えた授業を実践していくことで、伸び悩んでいる児童の学力の向上がみられた。

○音読・暗唱・視写に全校で取り組んだことで、児童に集中力、語彙力が身についてきた。音読、暗唱、読書に学校と家庭が連携して取り組むことができた。

○読書コーナーなどの読書環境を整えることで、自主的に読書する姿が見られ、読書量が増えた。

▲今後も児童の実態把握に努め、個に応じた支援の仕方を工夫していく。

▲言語活動に焦点を当てた指導法を研究し、授業改善していくことで更に一人一人の学力向上に努めていく。

▲一人一人が身に付けた読みの力や語彙力を日常生活に生かしていけるよう支援していく。

研究主題

「すべての児童が安心して過ごしやすい学級づくり」

～ユニバーサルデザインと児童理解を生かした算数科の授業を通して～

川越市立古谷小学校

研究のポイント

○ユニバーサルデザインの視点と児童理解を生かして、
「落ち着いた環境」「わかりやすい授業」「明るく元気な心」を視点とした
算数科の授業を通して、すべての児童が安心して過ごしやすい学級づくりを図る。

1　研究の概要

（1）　研究のねらい

本校の教育目標「心豊かでたくましい児童の育成」を掲げ、「心を込めて　考える子　仲良くする子　がんばる子」の具現化を図るため、以下のねらいで学校研究に取り組んだ。

① ユニバーサルデザインと児童理解を生かした算数科の授業実践を通して、基礎的な学力を身につけ、意欲的に学習に取り組む子の育成を図る。

② 自ら活動に見通しをもち、活き活きと学校生活に取り組む子の育成を図り、すべての児童が安心して過ごしやすい学級経営を目指す。

（2）　研究主題設定理由

平成２８年度より特別支援教育の視点に立った学校研究を実施してきた。１年間の研究を通して、改めて通常学級においても特別支援教育の視点の必要性を感じ、各ブロックの研究授業や専門部の取組により、「ユニバーサルデザイン」と「児童理解」をより意識した指導・支援にあたることができた。様々な教科での研究授業を行ってきたため、教科を絞っての取組や指導・支援の視点を絞って取組を進めることによって、さらに研究が深まると考えられた。よって平成２９年度より教科を「算数科」とし、より「ユニバーサルデザイン」と「児童理解」を生かした学校研究を深め、積極的な特別支援教育の実践を図った。

（3）　研究組織

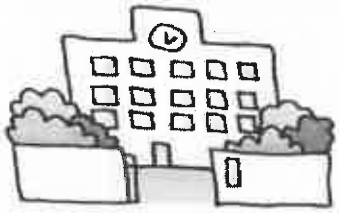
校長 ― 教頭 ― 研究推進委員長
― 研究主任 ― 研究副主任
― 各学年推進委員　１年　２年　３年　４年　５年　６年　５・６・７組

学年・ブロック部
・特別支援学級
・低学年
・中学年
・高学年

全　体　会

専　門　部　◎部長　○副部長

授業研究部（授業づくり等）	ユニバーサルデザイン部（環境整備・SST 等）	児童理解部（資料統計アンケート等）



2　研究の内容

学校教育目標

〈心をこめて〉考える子・仲よくする子・がんばる子

研究主題

「すべての児童が安心して過ごしやすい学級づくり」

～ユニバーサルデザインと児童理解を生かした算数科の授業を通して～

目指す児童像

「自ら活動に見通しをもち、活き活きと学校生活に取り組む子」

特別支援学級

「わかる楽しさ」
「できた喜び」
を味わい
意欲的に
学習に取り組む子

高学年

自力解決したことを学び合いに生かし、主体的に学習意欲を高められる子

中学年

自分の考えをもち、筋道を立てて発表でき、進んで学習に取り組む子

低学年

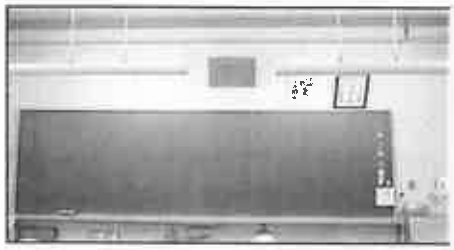
「できた！」「わかった！」と楽しく学習に取り組む子

研究の仮説と仮説に対する具体的な手立て

ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくり１２のポイントを生かして、それぞれの視点を中心に具体的な手立てを実施した。

仮説１	仮説２	仮説３
【情緒面からの視点】 落ち着いた環境	**【学習面からの視点】 わかりやすい授業**	**【学級経営面からの視点】 明るく元気な心**
ユニバーサルデザインを生かした教室や学校の環境を整えれば、児童の心理的な安定を図ることができ、安心して学校生活を送ることができるであろう。	児童理解を生かした声かけや指導法を基に学習環境及び教材教具の工夫・整備をした授業を行えば、児童の基礎・基本的な学力が身につき、意欲的に学習に取り組むことができるであろう。	児童理解を生かした学級経営をすれば、一人一人の違いを認め合える学級となり、すべての児童にとって安心できる学級となるであろう。
・場の構造化（教室環境１） ・刺激への配慮（教室環境２） ・生活の見通し	・ルールの確立　・授業の見通し ・授業の組み立て　・板書の工夫 ・集中、注目のさせ方・指示の出し方 ・参加の促進　・個人差への配慮	・学級モラルの作成

3　実践事例



（１）研究部の取組

①ユニバーサルデザイン部

ア　教室環境の整備

（刺激の軽減と生活の見通し）

・教室前面の掲示物の整理　・目隠しカーテン

・机、椅子の脚にテニスボール　・お手紙などの指定ボックス

・決められた収納場所　・１日の予定

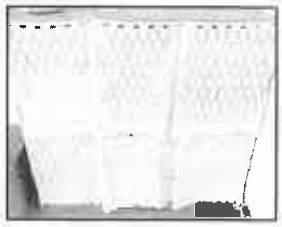
イ　校内掲示物の整備

（学校・学習環境を学びの場に）

（興味・関心や知識を高める掲示物）

・おもしろ算数コーナーの設置

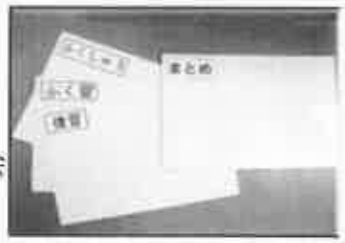
・階段掲示物　・学校研究のあゆみ



ウ　ソーシャルスキルトレーニング
（ロールプレイ・ゲームを通した対人関係や集団行動の学び）
・ハートタイムでのソーシャルスキルトレーニングの実施

エ　教材・教具の開発
（教材一覧表を作り、教員にもユニバーサルデザイン）
（視覚化でわかりやすい教材作り）
・学年、学期別教材一覧表　・算数教具の整理

②授業研究部
ア　算数の学習の流れ
（問題解決学習の流れの共有化と重点の焦点化）
・教師用、児童用の算数の学習の流れを作成
・話し合いカード　・復習ボード
・授業の振り返り３段階古谷小オリジナルマーク
・ノート名人　・１２のポイントに沿った指導案・研究協議会



③児童理解部
ア　アンケートの実施・調査・分析
（児童理解を深める）
・算数アンケート　・ソーシャルスキル尺度

（２）学年・ブロック部会の取組
全学年において、研究授業を実施した。専門部会で取り組んだ１２のポイントの具体的な手立てを生かした。また、ソーシャルスキル尺度を行ったことで、配慮を要する児童に寄り添った指導・支援を行うことができた。

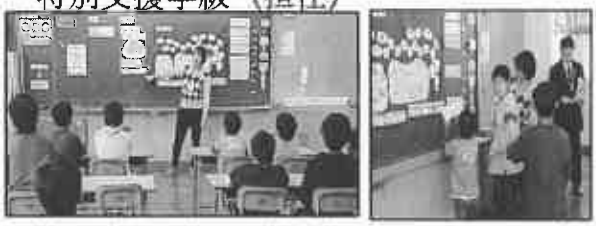
【１学期】
・特別支援学級（担任）

・第２学年（担任）

・第４学年（ＴＴ学習）

・第５学年（習熟度別コース）

【２学期】委嘱研究発表１１月２０日（火）
・特別支援学級（担任）



・第１学年（担任）

・第３学年（ＴＴ学習）

・第６学年（習熟度別コース）

（３）講義・講演会の実施

【第１回】

日時　　８月２１日（火）

指導者　川越市立高階小学校長　山田　勇先生

演題　　「ユニバーサルデザインと児童理解を生かした一人一人を大切にする算数科の指導や支援」

【第２回】

日時　　１１月２０日（火）

講演者　社会福祉法人埼玉医療福祉会
光の家療育センター施設長　鈴木　郁子先生

演題　　「個を生かした集団作り―発達障害の切り口から―」

４　研究の成果と課題

（１）成果

① 教職員のスキル向上と学び
② 教職員の共通理解
③ 学年やブロックでの取組
④ 学級や学校の環境整備
⑤ ユニバーサルデザインの視点を生かした指導・支援
⑥ 発達段階に応じた指導・支援
⑦ 授業のパターン化
⑧ 特別支援的な視点を生かした指導・支援
⑨ ソーシャルスキル尺度を生かした児童理解

成果としては、以上の９つの項目が多く挙げられ、学校全体で教職員の共通理解を図ることができた。また、ユニバーサルデザインの視点やソーシャルスキル尺度を生かした授業実践により、児童理解を深めることができた。そして、個に応じた手立ての工夫や学級・学校環境を整えることで、落ち着いて学習ができる児童が増えた。学校生活にも安心して明るく元気に過ごすことができる児童が増えてきた。

（２）課題

① 取組の継続や徹底
② 他教科への活用
③ 学力向上へのつながり

課題としては、３つの項目が挙げられた。学校研究を通して、算数の学習の流れも定着し、児童も安心して学習に取り組めるようになってきている。だからこそ、今後も継続的に取組を実践し、学力向上へのつながりや算数科だけでなく、他教科にわたっての指導や支援、学校生活を通しての支援や手立てを行うことが大切である。

研究主題

「児童一人一人が楽しく、わかる、できる　算数科の授業づくり」
～自分の考えをもち、伝え合う児童をめざして～

川越市高階北小学校

研究のポイント

○ 学ぶ意欲の向上
○ 自分の考えをもたせる工夫
○ 伝え合う力を伸ばす工夫

1　研究の概要

（1）研究のねらい

本校の算数科における児童の実態として、「各学力調査において、埼玉県や川越市の平均よりも本校の平均が、下回っている領域が多い。」「個人の学習意欲や学力差が激しい。」「計算はできるが、活用問題（文章問題等）が苦手。」というところがあげられた。そこで、①全ての児童が意欲的に学習できる環境を整えること。②自力解決の時、自分の考えをもたせること。③考えを伝え合い、学び合う力を育てること。以上３つをねらいとして、児童が主体となる授業の実践を目指した研究に取り組むこととした。

（2）研究主題設定理由

児童の実態に幅があるため、個に応じた指導・支援をきめ細かく行うことが不可欠である。

上記にも述べたように、算数科における児童の学力に差がある。そこで、児童の学習意欲をより向上させ、学力をつけさせたいという思いから、研究主題を「児童一人一人が楽しく、わかる、できる算数科の授業づくり」と設定した。学習意欲の向上には、授業の中で児童が達成感を味わうことが必要であり、その達成感を味わうためには、自力解決の中で児童自身が自分の考えをもつことが必要であると考えた。そして考えを伝え合い、学び合うことで共に伸びていくことができるであろうと考え、副題を「自分の考えをもち、伝え合う児童をめざして」と設定した。

2　研究の内容

（1）目指す児童像（特別支援学級も含む）

本年度は、副題の後半部分の「伝え合う」に重点を置き、発達段階に応じて各ブロックに分けて、学年間の接続も意識し、６年間での成長を見据えて目指す児童像を設定した。

	十分満足できる	概ね満足できる	支援を要する
低学年	相手の考えを聞き、質問、意見が言える（ペアやグループ学習）	自分の考えを相手に言える（ペア学習）	友達や先生の考えを聞き、自分の考えをもつ
中学年	自分の考えと比較して、質問、意見が言える（ペアやグループ学習）	相手の考えを聞き、質問、意見が言える（ペアやグループ学習）	
高学年	自分の考えと友達の考えをもとに、よりよい考えや新しい見方を見い出す（ペアやグループ学習）	自分の考えと比較して、質問、意見が言える（ペアやグループ学習）	

（２）　仮説と手立て（本年度は、重点の変更に伴い、仮説２を変更した。）

【仮説１】一人一人に応じた指導をすることによって、基礎学力を向上させることができるであろう。

〈手立て〉
ア、算数コーナーやヒントカードの充実
イ、ぐんぐんタイムの充実
ウ、習熟度別（コース別）学習
エ、小集団指導の充実
オ、児童の実態に応じた支援計画の作成
カ、見通しを持った授業の展開
キ、ノート指導、振り返りの時間の確保

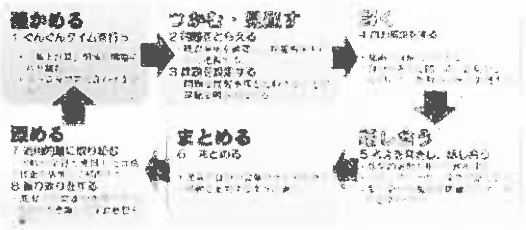
【仮説２】話し合う活動を充実させることで、自分の考えを深めたり高めたりする児童になるであろう。

〈手立て〉
ア、数学的表現を用いて自分の考えを書く
イ、『い・ち・に・わ・よ』カードの活用
ウ、算数コーナーの充実
エ、話型（発表の仕方カード）の活用
オ、ペア・グループ・全体での話し合う活動の充実
カ、練り上げ構想シートの作成

（３）　専門部の取組

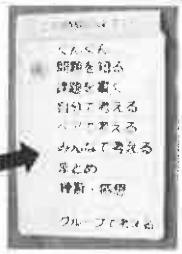
授業研究部

①算数系統表の作成
②算数用語系統表の作成
③練り上げ構想シートの作成
④『い・ち・に・わ・よ』カードの作成
⑤ぐんぐんタイムの作成
⑥授業の流れの統一の作成



環境整備部

①教材教具系統表の作成
②発表用ホワイトボードの作成
③授業で活用する掲示物の作成



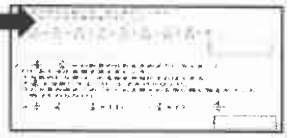
④たかぴかノートの作成
⑤校内環境の整備

長さを→
意識して

←九九を
意識して

調査研究部

①アンケートの作成と分析
②「つまずきの多く見られた問題の傾向」の作成
③復習プリントの作成



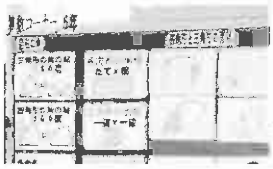
（４）　ユニバーサルデザインの視点に立った授業づくり

【焦点化】
・小集団指導などの個別の支援計画などを盛り込んだ授業の組立
・コース別に課題を変えるなど課題設定の工夫
・授業の流れを振り返ることができる板書計画の作成

【視覚化】
・ホワイトボードを活用した授業の見通しの明確化
・実物を提示するなどの問題提示の工夫
・児童の学習を支える算数コーナーの充実やデジタル教科書を活用した授業の展開

【共有化】
・ペアやグループ学習、練り上げの時間の確保
・『い・ち・に・わ・よ』カードによる話合いの視点の明確化

3　実践事例

通常学級の展開例	
手立て	内容
【仮説１】について ア、算数コーナーやヒントカードの充実 	算数コーナーに自力解決に繋がる既習事項を掲示したり、ヒントカードによる手助けをしたりすることで、自分で「できた喜び」を感じることを目指す。 既習事項を掲示した算数コーナー
イ、ぐんぐんタイムの充実 	ぐんぐんタイム（かけ算、わり算の穴埋めプリント）で基礎的な計算を行い、本時の学習がスムーズにできることを目指す。 ・「数と計算」領域の問題に取り組む。 ・３～５分で答え合わせまで行う。
ウ、習熟度別（コース別）学習 	児童の実態に応じた習熟度別学習を行うことで、一人一人が「わかる」「できる」という達成感を味わい、意欲的に学ぼうとする姿勢と学習の定着を身につけることを目指す。 コース別に問題や課題を変えて、個々の学力向上を目指す。
【仮説２】について イ、『い・ち・に・わ・よ』カードの活用 	「い」つでも・「ち」がいは・「に」ているところは・「わ」け・「よ」さ」の視点を明確にした話し合うことができるように、「い・ち・に・わ・よ」カードを提示する。 本時では、「に」(にているところ)を提示し、いくつかの三角形の求積方法で「÷２をしているところ」や「既習の公式をつかっている」などの共通点を見いだす。
オ、ペア・グループ・全体での話し合う活動の充実 	ペア・グループや全体の前で、数学的表現を用いて自分の考えを伝え合うことを通して新しい気づきや深い学びにつなげていくことを目指す。 自分の考えと比較して、質問、意見が言えるような話合いを行う。

特別支援学級の展開例	
手立て	内容
【仮説１】について エ、小集団指導の充実 	特別支援学級全体で、課題別小集団グループ編成をすることで個のニーズに合った指導を目指す。 児童の実態や生活体験を考慮し、２つにグループを分け、小集団指導の活動を行い、理解を促す。

オ、児童のニーズに合わせた教材・教具の工夫

個に応じて、どちらが多いか自分で考えさせるよう教材・教具を工夫した。場を構造化し、自力解決へと導く。

５つのテーブルの上に容器の形が違ったものを用意し、比べさせる。

【仮説２】について

ウ、具体的・体験的な活動

具体的・体験的な活動を通して、各自で考える時間を確保し、達成感を味わわせる。

水のかさを比べる際、見た目で判断してしまいがちなので、個に応じて、どちらが多いか操作を通して自分で考えさせるよう教材・教具を工夫した。

エ、話型（発表の仕方カード）の活用

分かったことを、予めワークシートに書き、ワークシートを読み上げることで安心して発表できるようにする。

ワークシートの中に話型を取り入れ、発表をスムーズにできるようにする。

４　研究の成果と課題

（１）成果

・ぐんぐんタイムの取組により、計算力がアップした。
・各学級に算数コーナーを設置したことで、自力解決時のヒントにつながった。
・習熟度別学習や小集団指導に取り組んだことで、きめ細やかな指導が行え、自分の考えを持つことができ児童に達成感を味わわせることができた。
・ペア・グループ学習では話し合う活動を充実させたことで、自分の考えと比較して、質問、意見が言えるような児童が増えた。
・全体での話合いでは、『い・ち・に・わ・よ』カードにより、話合いや練り上げの視点が明確になり、話し合う活動が充実し、伝える力がついてきた。
・練り上げ構想シートを作成することで、教師側の練り上げの視点が明確になった。

（２）課題

・児童が、自分の課題に合ったコースを選択するための工夫をする。
・小集団指導や個に応じた指導（ヒントカード、算数コーナー）のさらなる充実を図っていく。
・練り上げ構想シートの活用の仕方について、今後も学校全体で研究していく。
・児童のつまずきや想定していなかった考え方を話合いの中で生かし、児童同士で意見の吟味ができるように、意図、ねらいに合った練り上げの工夫をする。

※各学年の指導案などについては、本校ホームページの学校研究を参照してください。

研究主題

「主体的・対話的な学びによる授業改善」

川越市立霞ケ関小学校

研究のポイント

昨年度までの研究を引き継ぎ、さらに発展させる。

○　主体的・対話的で深い学びの視点から授業改善を行うことにより、学びに向かう力、生きて働く知識・技能の習得、未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等の育成を図る。

○　一定の成果を上げてきている本校の学習過程（KasumiStyle）を、他教科や他領域へと応用していく。

1　研究の概要

(1)　研究のねらい

算数の授業を中心として、主体的・対話的で深い学びの視点から授業を改善していくこととした。また、KasumiStyle を広げていく手がかりとして、理科や特別支援教育へ応用していく研究をすすめる。

(2)　研究主題設定理由

本校は２５・２６年度に、研究主題「わかる喜び、できる楽しさを味わい、自ら学ぶ子の育成」、副題に「学びあい、高めあう理科・生活科の授業を通して」として、委嘱学校研究に取り組み、研究の過程において、学習したことや自分の考えを表現する（アウトプット）の重要性が浮かび上がった。

２７・２８年度は、研究主題「学び合い、高め合う授業の創造」、副題に「アクティブ・ラーニングを取り入れた算数学習」として委嘱学校研究に取り組んだ。その成果として、①「課題設定の工夫」、「ふりかえり」が主体的な学びに効果的であること。②「対話的な学び」を取り入れることで、思考のアウトプットや学び直しが必要となり、それが深い学びにつながること。③KasumiStyle（本校の算数授業の学習過程）が、課題や発達段階、コース別などによってどんな学習過程をとれば良いのか。が次第に明らかになってきた。

また、次期学習指導要領では、授業改善の視点（主体的・対話的な深い学びの視点）からの学習過程の改善が重要視された。

そこで、平成２９年度・３０年度は、今までの研究を引き継ぎ、「主体的・対話的な深い学びの視点」から算数科・理科・特別支援教育の授業を改善することを柱として研究を進めた。

(3)　研究組織

校長→研究推進委員会→授業部・記録部・調査部・環境部

専門部長会

2　研究の内容

(1)　研究主題　「主体的・対話的な学びによる授業改善」

(2)　目指す児童像

	主体的な学び	対話的な学び	深い学び
低学年	・課題に対し多様に思考する児童 ・目を輝かせて、生き生きと活動する児童	・友だちの意見をしっかりと聞く児童 ・自分の考えとその理由をしっかりと発表できる児童	・自分の考えを見直し修正できる児童 ・学んだことを整理して友だちに話せる児童
中学年	・既習事項を生かして課題を解決できる児童 ・自ら課題を見つけ、粘り強く取り組む児童	・自分の考えと比較しながら友達の考えを聞くことができる児童 ・資料や教師から、適切な情報を受け取ることができる児童	・自分の考えの根拠を示したり、さらに他者の考えを取り入れたりすることによって、その考えの妥当性・合理性を吟味して、よりよい考えを生み出せる児童 ・学んだことを別の場面で生かすことができる児童
高学年	・意欲を持って自力解決に向かえる児童 ・解決したことから新たな課題を生み出すことができる児童 ・自らの学びをふりかえり、次への意欲を持つ児童	・自分たちの意見をまとめ結論を導き出せる児童 ・対話を通してよりよい考えを創り出せる児童 ・自分たちの考えや調べた情報を適切な方法で発信できる児童	・教科の特質に応じた「見方・考え方」を働かせて、より深い理解に到達できる児童 ・学んだことを応用・深化させて活用できる児童

仮説　「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善を行うことによって、質の高い学びが実現し、学習内容を深く理解し、資質・能力が身につくであろう。

＜研究の視点＞

◆問題解決的な学習過程(KasumiStyle)　◆適切な課題設定

◆視点を明確にした対話的活動　◆ふりかえりによる学びの手ごたえ

低学年	中学年・特別支援学級	高学年
KasumiStyle をつかむ	KasumiStyle を広げる	KasumiStyle を極める
主体的・対話的な学習を進める「KasumiStyle」の学習過程を、1～2年生の間に、どのようにして身に付けていくか、その手立てとして、どんな取組をすれば良いかを中心に研究を進めた。	算数の学習過程を中心に研究を進めてきた「KasumiStyle」の方法論を他教科にも適応し、主体的・対話的な学習を広げていく。今年度は特に「理科」「特別支援教育」において、教科や児童の特性との親和性をとりながら研究を進めた。	適切な課題設定を行い、話合いやまとめの視点を明確にすることにより、「自力解決」から「集団解決」を経て「まとめ」まで、児童の力で学習過程を進めていく。

(3) KasumiStyle（児童の実態や課題に合わせた学習過程）

Kasumi Style	A ①	A ②	B	C	D	E
展開の指針（理科）	教師との対話の中で解決する力をつける	適用問題で自力解決の力をつける	自力解決の力を持つ			学び合いを充実させる
課題をつかむ	全体	全体	全体	全体	全体	全体
見通す（予想）	全体	全体	全体	全体	全体	全体
自力解決（計画）	**グループや全体で協力して問題を解決 ↓ ↑ 児童の実態に合った問題を解決**	グループや全体で協力して問題を解決	**個人**	**個人**	**個人**	個人
集団解決（実験）（観察）（考察）		全体に発表 全体で練り上げ	グループで発表 練り上げ1 全体に発表 全体で練り上げ2	グループで発表 練り上げ1 全体に発表 グループで練り上げ2	全体に発表（練り上げ1） グループで練り上げ2	**グループで発表 ↓ 練り上げ1 ↓ まとめ**
まとめ	全体	全体	全体	全体	全体	全体で確認
適用問題	全体	個人	個人	個人	個人	個人
振り返り	全体	個人	個人	個人	個人	個人

3　実践事例

(1)　学年・教科　　第３学年　理科

(2)　単元名　　電気で明かりをつけよう

(3)　研究主題との関わり＜おもな手立て＞

◆主体的な学習をうながす課題設定

・身の回りにあるものを「導体」と「不導体」に分ける活動に、主体的に取り組ませる。

◆視点を明確にした対話的活動

・「これは電気が通る」「通らない」だけではなく、根拠を明確にさせることによって「対話的活動」→「深い学び」につなげていく。

◆課題と対応した適用問題

・単純に導体不導体を分ける問題と、さらに導体の特徴を求める問題を設定する。

◆主体的な学習をうながす「ふりかえり」

(4)　本時の学習指導（４・５／６）

①　目標

・電気を通すものと通さないものを考え、自分の考えを表現することができる。【科学的な思考・表現】

・回路の一部にいろいろなものを入れた結果を比較して考察し、自分の考えを表現することができる。【科学的な思考・表現】

・電気を通すものと通さないものがあることを理解する。【知識・理解】

② 展開

	KasumiStyle	B	学習活動
第一次	課題をつかむ	全体	はなれたどう線の間に、何をはさむと明かりがつくのだろう
	見通す（予想）	全体	T：何だとつくかな。　C：クリップ、銀紙、はさみ、下敷きは通さない
	自力解決（計画）	個人	C：何を調べようかな。家にあるものも持ってこよう。
	集団解決（予想・計画）	グループで予想 全体に発表 グループで実験の計画	●電気を通すものと通さないものをホワイトボードにまとめる 話し合いの視点　どうして電気が通ると思うかの理由も考える ●班の考えを伝える・聞く。 ●具体的な実験の計画や役割分担を決める。
第一次	集団解決（実験・考察）	グループで実験 グループで考察	●実験を行い、ホワイトボードにまとめていく。 話し合いの視点　電気を通すものの共通する特徴
	まとめ	全体で考察 まとめ	
	適用問題	個人	電気を通すものの特徴を問う適用問題
	振り返り	個人	C：自らの学びを振り返る。

4　研究の成果と課題

(1)　成果

◎主体的・対話的な学びの視点による授業改善を進めることにより、問題解決的な学習の過程を共通理解し、全教師が実践できるようになった。

◎主体的・対話的な学びの視点に立った学習過程（KasumiStyle）を、低学年の児童に効果的に身につけさせる手立ての開発が進んだ。

◎KasumiStyle を理科や特別支援教育に広げるために必要なこと（学習過程の見直しや特別な配慮が必要な児童への対応　等）が次第に明らかになりつつある。

◎本校が KasumiStyle の究極の形ととらえた、「児童が自らの力で、自力解決からまとめまで学習を進める」授業を作り上げるための手立ての開発が進んだ。

◎校庭や廊下、教室の算数コーナーなど校舎内外の環境が整い、児童の算数・理科の学習に向かう力の高まりが見られた。

◎学校研究の取組により、児童の学力の向上が見られた。（入間学力テスト、H27 年度対入間平均－4.6 ポイント→H28＋0.5 ポイント→H29＋0.8 ポイント→H30＋3.2 ポイント）

(2)　課題

▲児童の学力向上のために、さらに継続した取組が必要である。

▲Kasumi Style をさらに洗練させ、また、他の教科でも主体的・対話的な学びを広げていく必要がある。

研究主題

「主体的・対話的で深い学びの実現」

～生徒が生き生きと学び、地域に期待される学校を目指して～

川越市立寺尾中学校

研究のポイント

Ｐ３ Challenge 寺尾　「チーム寺尾の底力」３つのＰ（誇り、情熱、期待）の向上
『これからの時代に必要となる資質・能力の育成』

○自立した人間として他者と協働しながら創造的に生きていくために必要な資質・能力
○何事にも主体的に取り組もうとする意欲や、多様性を尊重する態度、他者と協働するためのリーダーシップやチームワーク、コミュニケーションの能力、豊かな感性

↓

すべての教職員が家庭・地域と連携し、学校教育活動においてこれらの資質を培う

○５つのプロジェクトチームによる研究と取組
○授業の工夫改善を目指した「一人一研究」の継続・・・全教員が研究授業を実施

1　研究の概要

(1)　研究のねらい

これまでに本校で実践してきた教育活動を、研究主題の視点に立ってさらに発展させ、学校教育目標の具現化を図る。

(2) 研究主題設定理由

これまでのプロジェクトチームを中心とした取組により、生徒の自尊感情の醸成や家庭学習の定着において、一定の成果をみることができた。しかし、校内アンケートの結果によると、全校で約３割の生徒が自分の授業態度に何らかの課題があると感じていることがわかった。また、家庭学習の「質」に関して、生徒間に開きが見られることは事実である。また、進んで「あいさつ」のできる生徒が少ないことも本校の課題の１つであると考える。そして、本校の伝統である「洗心無言清掃」についても、現在の清掃をさらに深化・発展させていくためには手段を講じる必要がある。生徒の学力を向上させ、これまでに研修を重ねている「アクティブ・ラーニング」等の手法を取り入れた授業についての研究を行い、地域に愛され信頼され期待される学校を目指して、全職員が、チーム寺尾　～Ｐ３ Challenge 寺尾～　として取り組む。

(3) 研究組織

学校教育目標

研究推進委員会
校長（指導）、教頭・教務主任（指導、渉外）、各学年主任、研究主任、各学年研修担当

プロジェクト

・学力Ⅰ	てらりんぴっくの実施・家庭学習ノートの啓発活動
・学力Ⅱ	学力向上・授業改善・評価等
・豊かな心	あいさつ運動の推進・社会性の向上に向けた取組
・清掃	洗心無言清掃の取組・外部講師の招聘
・家庭地域連携	地域清掃の実施・地域ボランティアの検討

各教科等部会

2　研究の内容

（1）これからの時代に必要となる資質・能力の育成

（2）５つのプロジェクトチーム（学力Ⅰ、学力Ⅱ、豊かな心、清掃、家庭地域連携）による研究と取組

（3）授業の工夫改善を目指した「１人１研究」の継続

3　実践事例

（1）学力Ⅰ　プロジェクト

目標　基礎学力の定着をめざす

主な取組

①てらりんぴっく（基礎学力テスト）の実施

成果　全校で合格・満点を目指そうという意識が高まっている。

課題　合格者・教科数を増やすこと。今年度は英語（英単語）を試行した。

②家庭学習ノートの取組

成果　毎日出すことに重点を置き、多くの生徒が１日も欠かさず、毎日家庭学習ノートを提出している。

課題　提出率百％に近づける。内容の充実が課題である。

（2）学力Ⅱ　プロジェクト

目標　主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善

主な取組

①授業改善のための具体的な方策の提示・・・校内リーフレット作成。校内研修での提案。

②実態調査と分析・・・アンケートの実施。アンケート及び学力調査結果分析。

③環境整備・・・目標・課題・見通し・まとめ・振り返りなどの掲示物を各教室に常備。

成果　主体的・対話的で深い学びの実現に向け、どの教職員も自身の授業を見直し、改善できた。

課題　授業改善を学力向上につなげるため、発表力・記述力のさらなる向上が課題である。

（3）清掃　プロジェクト

目標　洗心無言清掃の深化・発展

主な取組

①生徒主体の活動・・・清掃ガイダンス・全校清掃班長会議

②異年齢集団での清掃・・・交流清掃・小学生清掃体験・縦割清掃

③洗心無言清掃の周知徹底・・・マニュアル改訂・教職員研修

④清掃講演会の実施・・・清掃活動を積極的に行っている企業の担当者を招聘

成果　学校全体で清掃に対する意識が高まっている。自ら考え、動こうとする気持ちが芽生えてきた。

課題　よりきれいにするための取組がこれからの課題である。

（4）豊かな心　プロジェクト

目標　進んで「あいさつ」をする生徒を増やす

主な取組

①あいさつ運動の活性化・あいさつについての生徒の意識向上

②教職員の率先垂範の継続

成果　のぼり旗を使用することで、あいさつ運動の声が大きくなり、活気が出てきた。寸劇や活動宣言を行ったことで、生徒があいさつの大切さを感じていた。

課題　全体として成果を実感するまでに時間を要する。あいさつの大切さを意識させ、皆が進んであいさつをする雰囲気作りを続けていく必要がある。

（5）家庭地域連携　プロジェクト

目標　家庭・地域と連携した学校教育活動の推進

主な取組

①地域清掃の実施

②地域と連携した校外ボランティア、学習支援ボランティアの実施

成果　地域の方への挨拶や異年齢間への支援ボランティアを通して、生徒からの発言が多くなった。生徒主体の活動を行うことで、生徒たちが自主的に取り組む姿が多く見られた。

課題　保護者や地域の方に協力いただき、より家庭・地域と連携した活動を検討していく必要がある。生徒の主体性、社会性の涵養を図ることができるよう、活動内容の充実を図る必要がある。

4　研究の成果と課題

○２年間の学校研究の成果として、各プロジェクトの取組を通して、全教職員によって教科指導の工夫改善及び豊かな心を育むことができた。

○「人の話を聞き、発表する」ことや「自分の考えを説明し伝え合う活動」を中心とした言語活動を重視し、ペアや小グループでの話合い活動を通して、自分の考えを深めることができた。

○洗心無言清掃の深化・発展に向けた取組をはじめとして、あいさつ運動や地域と連携した活動等、「自分で考え、動こうとする」生徒が増えた。

●授業改善を通して、生徒の主体的な活動の場面の充実を図り、自分の言葉で発表し、まとめる力等の表現力のさらなる育成を図っていく。

●学校全体の約９割の生徒が「学校が楽しい」と感じている反面、約３割の生徒が学習についての悩みや心配事を抱えている（「心のアンケート」平成３０年７月４日実施より）実態を踏まえ、家庭学習のさらなる定着やてらりんぴっくにおける教科数の充実を図っていく。

●学校や家庭、地域との結びつきの中で、生徒一人一人が活躍できる場を設定し、生徒の主体性や社会性を育成するため、今後も、生徒が生き生きと学び、地域に期待される学校を目指して、「Ｐ３ Challenge 寺尾」として、日々の研究を継続していく。

研究主題

「授業規律を確立して学習意欲を高め、意欲的に学校生活に取り組む生徒の育成」
～「授業の約束10」を中心とした学校づくり～

川越市立砂中学校

研究のポイント

○本校のこれまでの取組を「体系化・組織化」する事で、継続的な『学校づくり』を目指し「砂中スタンダード」を確立するための研究です。
○「規律」「学力」「自己有用感」というキーワードを基に、様々な実践を行います。
○授業規律の確立を目指した、「授業の約束10」と「授業規律を高める教師心得」は、生徒と教員が共に『目に見える形』で意識するための実践であり、研究の土台です。
○「学習研究部」「心の教育研究部」「伝統創造研究部」の３つの研究部会を組織。

１　研究の概要

（１）研究のねらい

学校における一つ一つの取組が充実し、生徒が積極的に参加して収穫を得ることによって学校生活が充実したものになる。充実した学校生活は、授業や諸活動に参加する生徒の意欲と他者から認められることで得られる「自己有用感」を高め、自信を深めることにつながる。生徒一人一人が砂中学校の生徒であることに誇りを持ち、目指す学校像である「笑顔と活力に満ち溢れ、互いに響き合う学校」づくりを実現することをねらいとしている。

（２）研究主題設定理由

砂中学校は昭和56年４月１日に開校し、本年は開校38年目を迎える学校である。校舎の周囲には田園地帯が広がり、のどかな風景の中で落ち着いて授業や部活動に取り組める環境にある。しかしながら、数年前まで生徒が落ち着かず、問題行動が頻発して、授業規律も定着していない状態であった。

本研究においては、「授業規律」を高めることで生徒の学習意欲を喚起して自己向上意欲を高揚させ、併せて、教育課程や指導方法の工夫改善を図ることによって「学力」を向上させることができると考えた。

（３）研究組織

様々な取組の継続性を考え、「個々の教員の力に依存している状態」や「組織や位置付けがあいまいな状態」などの課題を改善するための組織化・体系化を行い「砂中スタンダード」とした。

学習研究部……主に「授業規律」が確立した中で行われる授業での学力の向上」を記録・分析・授業改善を通して目指した取組。

心の教育研究部…道徳の研究。学校行事のねらいの共通化。生徒の主体的な活動の支援を通して、自己有用感や自尊感情を高めることを目指した取組。

伝統創造研究部…「規律」の確立・ノーチャイム・自主学習・無言清掃・樫童など、砂中の伝統となる取組を通して、砂中に誇りをもてることを目指した取組。

２　研究の内容

（１）学校づくりを支える３つのキーワード

研究主題を設定するために参考にしたものが、国立教政策研究所生徒指導・進路指導研究センターによる**【どのように策定・実施したら、「学校いじめ防止基本方針」が実効性のあるものになるのか？】**（平成28年６月）である。

「2 年間の研究からの、知見！」という項目で「いじめが起きにくい学校づくり」が以下のようにまとめられ、その中のキーワードに『規律・学力・自己有用感』の３つがある。

①いたずらにトラブルが起きたり、放置されたりしないような安心・安全な学校環境をつくること。
・集団生活のルールが明確であること。
・その時々に何を頑張ればよいのかが明確であること。
②子供は単に保護されるだけの受け身的な存在ではなく、自らも良くなりたい、頑張りたいと願う主体的な存在。
・認められた体験のある子供ほど、他の子供のことを認めたり、受け入れたりできる。

【規　　律】
適度な「規律」のある学校は、子供に安心感を与えると同時に安全の確保にもつながる
【学　　力】
学力の保障をすることで「社会的な免疫力」の低下を防ぐ
【自己有用感】
子供の自信となり、少々のトラブルには負けない「社会的な免疫力」となる
［国立教育政策研究所　生徒指導・進路指導研究センター］

（２）学校が目指す「規律」の定義を明確にする

「規律」とは環境づくり

本研究のキーワードにおける「規律」は砂中学校の取組の中心をなすものである。「規律」についての共通理解を図るために、共栄大学准教授（現教育学部長）の若手三喜雄先生を招き理論研修を行った。学習規律のポイントは以下の２点である。

●学習の仕方が分かる環境をつくること
●友達に認められる環境をつくること

つまり子供が安心できる環境をつくることが規律の確立であると捉えた。この学習規律は、小学校・中学校で変わらず共通であることも大切である。

「規律」と「学力」の関係

安心できる環境＝規律が確立された教室では、生徒と教師にとって以下のような効果が現れる。

①規律があると学びやすい ②規律があると学びが楽しくなる ③規律があると成長が実感できる

上記の３点は、まさに規律・学力・自己有用感とリンクするものである。学習規律が確立している環境・教室の中でこそ子供の学力は向上する。砂中学校ではこれまでの「規律」への取組に、このような意味や価値を確認し、教職員で共通理解を図った。

３ 実践事例

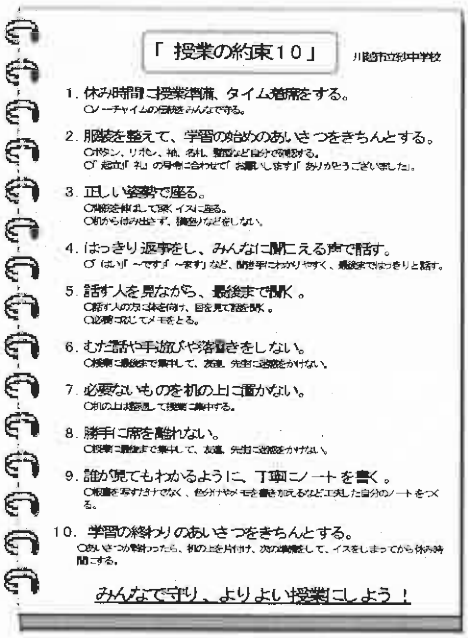
（１）学習規律を確立するための取組

①「見える化」による「共通理解と共通指導」

「授業の約束 10」は平成 26 年度から作成を始めたものである。「高階地区小・中一貫教育学習編」をはじめ、全国の規律への取組資料をＡ案からＧ案までに絞って研究を行った。その結果、「名寄市学習規律（10 項目）をベースにして作成されたものが砂中学校の「授業の約束 10」である。作成の際に工夫したことは、

●すべてのクラスと授業で取り組めること
●生徒も教員も理解し、実行しやすい内容であること

原案は平成 26 年度末に完成し、平成 27 年度から施行した。この取組のポイントは規律の徹底した**「見える化」による「共通理解・共通指導」**である。



「授業の約束１０」　川越市立砂中学校

1. 休み時間に授業準備、タイム着席をする。
○ーチャイムの指示をみんなで守る。
2. 服装を整えて、学習の始めのあいさつをきちんとする。
○ゼッケン、リボン、帽、名札、整髪などはきちんと確認する。
○「起立」「礼」の号令に合わせて「お願いします」「ありがとうございました」。
3. 正しい姿勢で座る。
○背筋を伸ばして深くイスに座る。
○机からはみ出さず、横座りなどをしない。
4. はっきり返事をし、みんなに聞こえる声で話す。
○「はい」「～です」「～ます」など、聞き手にわかりやすく、最後まではっきりと話す。
5. 話す人を見ながら、最後まで聞く。
○話す人の方に体を向け、目を見て話を聞く。
○必要に応じてメモをとる。
6. むだ話や手遊びや落書きをしない。
○授業に最後まで集中して、友達、先生に迷惑をかけない。
7. 必要ないものを机の上に置かない。
○机の上を整理して授業に集中する。
8. 勝手に席を離れない。
○授業に最後まで集中して、友達、先生に迷惑をかけない。
9. 誰が見てもわかるように、丁寧にノートを書く。
○板書を写すだけでなく、ポイントやメモを書き加えるなど工夫した自分のノートをつくる。
10. 学習の終わりのあいさつをきちんとする。
○あいさつが終わったら、机の上を片付け、次の準備をして、イスをしまってから休み時間にする。

みんなで守り、よりよい授業にしよう！

②生徒による自己評価

授業の約束10の生徒自己評価の数値は当初よりかなり高い達成率を示していた。しかし学年毎の達成率を見ると1年生が最も高く、2年・3年と下降する状態であった。

変化が現れたのは平成29年度あたりからであった。達成率の分布が、3年が最も高く、2年・1年が続く形になった。入学時よりも2年生、そして3年生はさらにと、学年が上がることによる成長が数値に現れるようになった。**「できている自分たちを確認できる」**当たり前の項目が並ぶ「授業の約束10」の価値や意義がここにあると考える。

【授業の約束10　H30年度1学期生徒アンケート結果】

③教師が「規律」を意識するために

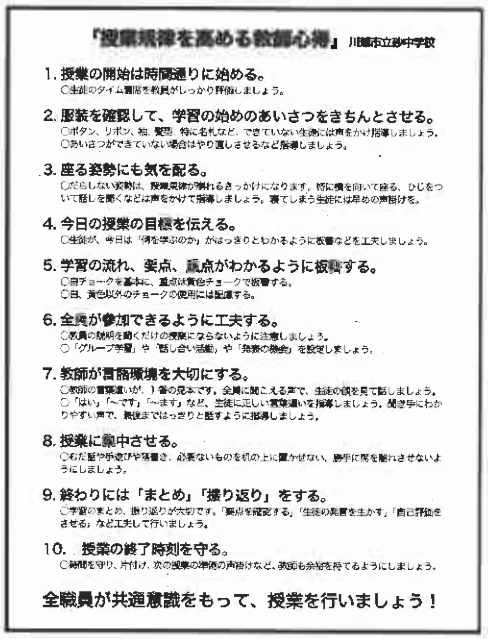
「授業の約束10」と「授業規律を高める教師心得」は表裏一体である。「見える化」「共通理解・共通指導」は、教師が意識して実践することではじめて効果が現れる。

年度当初の職員会議ではこの「教師心得」の確認を全職員で必ず行う。

平成30年度においては、教師心得についても自己評価を行った。10項目の合計値では、92%台の達成率となっている。アンケートでは、記述による授業改善の視点を考え、教科部会などで活用できるようにした。

教員の自己評価は、この記述部分がとても大切である。

砂中学校では、現在「規律」が保たれた環境でどの授業も行うことができる。教師にとって、より魅力ある授業、生徒の学力を高めることができる授業を創るために、**「自分の授業を磨ける学校」**であるということを大切にした。



「授業規律を高める教師心得」 川越市立砂中学校

1. **授業の開始は時間通りに始める。**
○生徒のタイム管理を教員がしっかり評価しましょう。

2. **服装を確認して、学習の始めのあいさつをきちんとさせる。**
○ボタン、リボン、襟、髪型、特に名札など、できていない生徒には声をかけ指導しましょう。
○あいさつができていない場合はやり直しさせるなど指導しましょう。

3. **座る姿勢にも気を配る。**
○だらしない姿勢は、授業規律が崩れるきっかけになります。特に横を向いて座る、ひじをついて話しを聞くなどは声をかけて指導しましょう。寝てしまう生徒には早めの声掛けを。

4. **今日の授業の目標を伝える。**
○生徒が、「何を学ぶのか」がはっきりともわかるように板書などを工夫しましょう。

5. **学習の流れ、要点、重点がわかるように板書する。**
○白チョークを基本に、重点は黄色チョークで板書する。
○白、黄色以外のチョークの使用には配慮する。

6. **全員が参加できるように工夫する。**
○教員の説明を聞くだけの授業にならないように注意しましょう。
○「グループ学習」や「話し合い活動」や「発表の機会」を設定しましょう。

7. **教師が言語環境を大切にする。**
○教師の言葉遣いが、1番の見本です。全員に聞こえる声で、生徒の顔を見て話しましょう。
○「はい」「～です」「～ます」など、生徒に正しい言葉遣いを指導しましょう。聞き手にわかりやすい声で、最後まではっきりと話すように指導しましょう。

8. **授業に集中させる。**
○机上や机内の教科書等、必要ないものを机の上に置かせない、勝手に席を離れさせないようにしましょう。

9. **終わりには「まとめ」「振り返り」をする。**
○学習のまとめ、振り返りが大切です。「要点を確認する」「生徒の発言を生かす」「自己評価をさせる」など工夫して行いましょう。

10. **授業の終了時刻を守る。**
○時間を守り、片付け、次の授業の準備の声掛けなど、教師も余裕を持てるようにしましょう。

全職員が共通意識をもって、授業を行いましょう！

（2）その他の取組

自主学習ノート・自主学習ガイド

全校で統一して取り組む家庭学習。「学習習慣の定着」「学習意欲の向上」を目的に、「ガイドブック」を活用して取り組んでいる。

「一意専心」無言清掃

清掃班長を中心に清掃班を編制し、清掃に専念する自然と生まれる静寂を大切にした、生徒主体の自治的な活動。

よさこい鳴子おどり「樫童」

卒業後も母校に誇りをもてることを目指し、体育祭で全校が演舞するよさこい鳴子おどりを、有志の部員が地域の中で披露する活動。

道徳教科化に向けた研修

平成29年度は、長井正邦先生、宮﨑厚先生、日出間毅先生を招き研究授業を行い、平成30年度は、開智国際大学教育学部准教授の土井雅弘先生を招き「指導と評価」を指導していただいた。

校歌指導の充実に向けた取組

校歌に込められた意味や表現の工夫を学ぶことで、より校歌に誇りをもって歌えるようになってほしいという目的で作曲者：東邦音楽大学教授　荻久保和明先生を招き指導を受けている。

4　研究の成果と課題

（1）成果

研究主題にある「学習意欲」や「意欲的に学校生活に取り組む生徒」という姿を数値で検証するため、図書文化社の「数研式 SET 自己向上支援検査」を実施した。

SET(Self Enhancement-support Test)

学習面と社会生活面について、自己を向上させようとする意志や態度が身についているかを把握し、支援するための手掛かりを得るための検査である。検査は学習領域【①学習意欲 ②学習の仕方 ③効力感】と社会生活領域【④情緒や意志 ⑤社会的体験】から構成されている。

9.9pt
全国平均比（1 年生）

15.4pt
全国平均比（2 年生）

5.9 pt
全国平均比（3 年生）

■学習領域

	課題関与意欲	他律的意欲	自己向上意欲	学習の仕方	学習効力感	学習領域TOTAL
砂中２年	12.5	12.2	13.3	9.3	9.9	57.2
全　国	10.4	9.7	11.2	7.6	8.7	47.6

検査結果を分析すると、総合スコアにおいて全国平均を全ての学年が上回る結果となった。この検査結果から、授業規律が確立した環境の中で、本校の生徒の「学習意欲」は高まり、「意欲的に学校生活に取り組む姿勢」が育まれていると考えることができると思う。

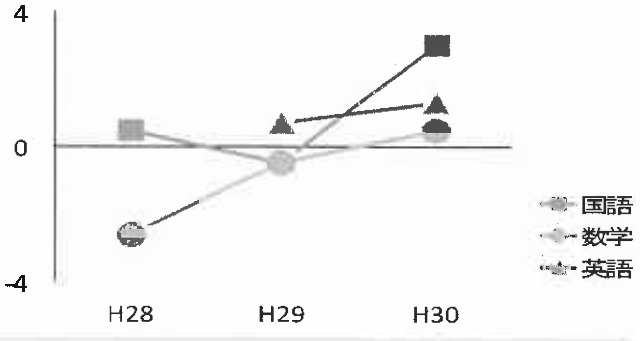
県学力・学習状況調査が経年変化

現 3 年生は、県学力・学習状況調査が経年変化を追う形になってから 3 年目の学年である。その結果、県平均得点に対して、国語科で 2.5 ポイント上昇、数学科で 3.1 ポイント上昇、英語科は 2 年間の推移であるが、0.6 ポイントの上昇が見られた。数学科は 3 年間で安定した上昇が見られ、国語科では、2 年次から 3 年次にかけて 3.5 ポイントという大幅な学力の上昇が見られた。

2.5pt
県平均比（３年国語）

3.1 pt
県平均比（３年数学）

4.8 pt
県平均比（２年数学）



学力調査の推移の検証から、全体の傾向として、「砂中生の学力は、学年が上がるごとに高まっている」ことがわかる。この検証結果は、「規律」「学力」「自己有用感」という本研究のキーワードの有効性を証明しているものと考えている。

(2)課題

私たちが日々、生徒のために取り組んでいることの「意義」はどこにあるのか。その「答え」が本研究の中にあること私たちは見つけた。教職員が、「未来」の砂中学校の創造を目指して取り組んできた「砂中スタンダード」において、授業規律を確立するための「授業の約束 10」は最も大切な要素である。「授業の約束 10」を「不易」とし、そこに立てる柱を「流行」とするならば、ねらいの共有された取組を時代の変化に合わせて取り入れたり、役目を終えた取組を終結させたりすることが、今後の学校づくりの指針となる。

教職員が「生徒一人一人が輝き、成長でき、砂中生であることを誇りに思えるようになってほしい」と願うように、私たち教職員自身が「砂中学校の職員であることを誇りに思える」学校づくりを、これからも進めていく。

研究主題

「個性を伸ばし、創造性を育む学習指導の充実」
～算数科のスタンダードを他教科にひろげて～

川越市立川越第一小学校

研究のポイント

○算数科のスタンダード化を基に、国語科と社会科の授業展開の工夫に取り組む。
○ペア・グループ学習に「主体的・対話的で深い学び」の学習観を取り入れ、児童の思考力・判断力・表現力を伸ばす。

1　研究の概要

(1)　研究のねらい

①日々の授業の中で、自らの経験、体感、既習事項を生かして、新たな考えを作り出す力を育成する。

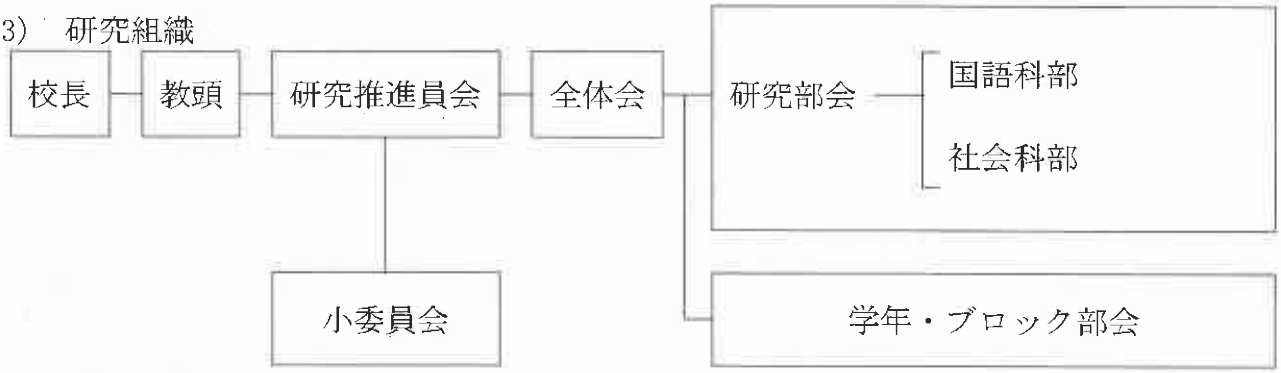
②主体的・協働的に学ぶ学習を積極的に取り入れる授業実践を通し、思考力・判断力・表現力を伸ばせる授業力を高めていく。

(2)　研究主題設定の理由

埼玉県学力・学習状況調査結果を見ると、例年、本校の平均正答率は各学年、県平均を上回っている。さらに算数科よりも国語科の方が高い数値となっている。昨年度末、本校教職員に授業中の児童の様子をアンケート調査したところ「発表する児童が固定化している」「できているのに、自信をもてず発表できない」「多様な考えに広がらない」等の課題が挙げられた。

平成２９・３０年度に行った埼玉県学力・学習状況調査の分析プログラムによる【算数の学力の伸び】と【授業で課題を解決するときに、みんなでいろいろな考えを発表すること】のクロス集計を行った結果、「みんなでいろいろな考えを発表する機会が『よくあった』と感じている児童の方が、学力の伸びが大きい傾向にある」ことが分かった。そこで、他者との学び合いを通して、児童が自らの考えを錬磨し、その上で主体的に発信できるような指導方法を標準化していくことを志し、本校の学校教育目標である「四つのだいじ」の具現化を目指して、研究主題を「個性を伸ばし、創造性を育む学習指導の充実」、副題を「算数科のスタンダードを他教科にひろげて」と設定した。

(3)　研究組織



2　研究の内容

(1)　めざす児童像

①　自分の考えをもつ子
②　自分の考えを発信できる子
③　自分の考えを深められる子

(2)　研究の手立て

①２９年度の埼玉県学力・学習状況調査の結果から学年・学級ごとに学力の伸びを比べ、各担任から授業中の指導で心掛けているポイントを出し合い、校内に広める。

・課題とまとめの整合性を意識した授業

・教材研究をしたテンポのいい授業、学習規律に基づくスピード感のある授業、テンポ×スピード＝ボリューム感のある授業

・学習への必要感をもたせる導入の工夫、視覚にえる教具・掲示物の工夫

②各学年が、年間を通して指導者の方から指導を受けられるようにし、算数科における授業の展開の仕方やペア・グループ学習の他教科への取り入れ方、教具の開発を行う研修に取り組み、指導案の作成だけでなく、一単元全体の教材研究やそれまでに身に付けさせておきたい力についてもご指導をいただくことで校内でのスタンダード化を図る。

3　実践事例

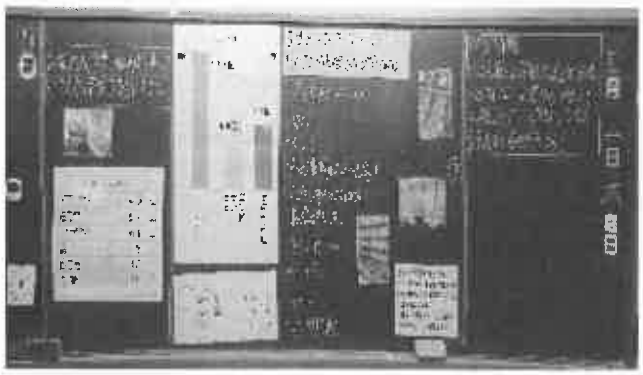
(1)　研究授業の実施

学年	1	2	3	4	5	6
教科 教材名	国語 スイミー	国語 ビーバーの大工事	社会 お店の人たちの仕事	社会 埼玉県の地図を開いて	国語 テレビとの付き合い方	社会 新しい日本、平和な日本へ
授業日	２月21日	10月18日	11月１日	１月31日	２月５日	11月21日

(2)　授業展開の標準化

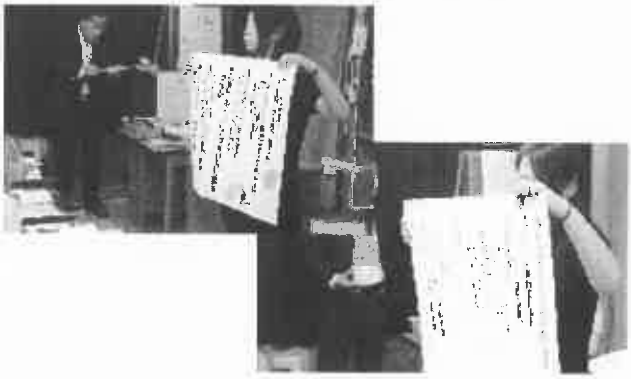
①　授業構成（基本的な流れ）	②　板書の仕方
ア　問題場面をつかむ。 イ　課題を考える。 ウ　自力解決をする。 エ　ペア・グループで学び合う。 オ　考えを発表し、話し合う。 カ　一般化する。 キ　まとめをする。 ク　適用問題を解く。 ケ　振り返る。	ア　三分割 イ　学習略語カードを掲示 ③　既習事項コーナーの設置と活用 ア　単元全体の学習計画を掲示 イ　既習事項の振り返り等で活用 ④　ペア・グループ学習 ア　ペア・グループ学習の系統性 イ　話合いの視点「よ・い・に・わ」の活用 ウ　「ペア・グループ学習のしかた」の活用

③-ア　三分割



④-ア　単元全体の学習計画を掲示

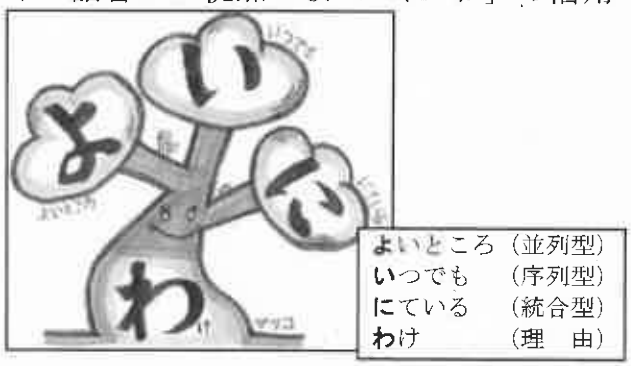
イ　既習事項の振り返り等で活用



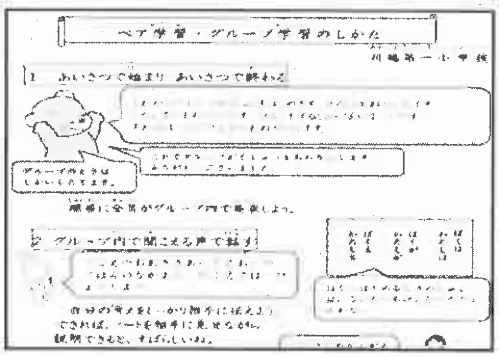
⑤-ア　ペア・グループ学習の系統性

	低学年	中学年	高学年
グループサイズ	2～3人	3～4人	3～4人
めあて	自分の意見を伝え、相手の意見を聞くことができる ※同じか違うか	自分の意見を伝え、相手の意見と比較することができる	自分の意見を伝え、相手の意見を聞き、意見を収束することができる
話合いの方法	ペア学習 伝え合い	ペア・グループ学習 ※ラウンド ミラーリング 派遣	グループ学習 ※ラウンド ミラーリング 派遣
一人ひとりのめあて	自分の考えを持てるようにする 方策 1小集団活動 2ヒントカード	自分の考えを持てるようにする 役割をこなせるようにする（司会、記録、発表など）	自分の考えを持てるようにする 役割をこなせるようにする（司会、記録、発表など）
話合いのスキル 社会的スキル	・相手を見て伝える ・話合いの始めと終わりのあいさつ ・丁寧な言葉遣い ・うなずきながら聞く ・隣に聞こえる声で話す ・わからないことをそのままにしない（聞き直す）	・相手を見て伝える ・話合いの始めと終わりのあいさつ ・丁寧な言葉遣い ・うなずきながら聞く ・班の中に聞こえるぐらいの声で話す ・わからないことをそのままにしない（聞き直す） ・掲示や記録、ノート等を活用して伝える ・考えや意見について、質問したり付け加えたりしながら「つなぐ」ことができる	・相手を見て伝える ・話合いの始めと終わりのあいさつ ・丁寧な言葉遣い ・うなずきながら聞き、大事な所をメモをする ・班の中に聞こえるぐらいの声で話す ・わからないことをそのままにしない（聞き直す） ・掲示や記録、ノート等を活用して伝える ・ホワイトボードを使って班の考えを整理できる ・考えや意見について、質問したり付け加えたりしながら「つなぐ」ことができる。また、よりよい意見を作り出すことができる

⑤-イ　話合いの視点「よ・い・に・わ」の活用



⑤-ウ　「ペア・グループ学習のしかた」の活用



(3)　授業の様子

①-ア　問題場面をつかむ。

・　イ　課題を考える。

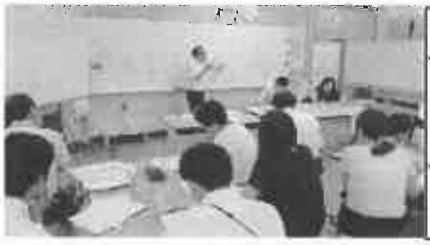
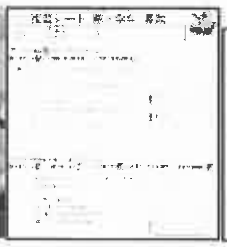
・　ウ　自力解決をする。

①-エ　ペア・グループで学び合う。　・　オ　考えを発表し、話し合う。

①-カ　一般化する。　・　キ　まとめをする。

①-ク　適用問題を解く。　・　ケ　振り返る。

(4)　調査結果の検証(問題作成・学習形態の工夫)

4　研究の成果と課題

(1)　成果

①年間を通して指導者から指導を受けることができ、授業のつながり、単元のつながり、学年のつながりを意識することができた。

②『国語科』『社会科』で話合い活動を取り入れた結果、教員の授業づくりのための視点が豊富になり、様々な教科でも話合い活動を取り入れることができた。

③話合い・学び合いを中心に研究したことで、児童が自分の意見を伝えたり、深めたりできるようになってきた。

(2)　課題

①　単元ごとに身に付けさせる力を、学校内で系統性をもたせる。

②　基礎学力の定着も確実に図れるようにする。

③　話合いの視点を絞り、児童自身が『深い学び』を実感できるようにする。

研究主題

「豊かなかかわり合いの中で、今と未来にいきる」
～教科等横断的な資質・能力を育成する～

学校名　川越市立川越小学校

研究のポイント

○３つの『学び』の授業づくり１１の視点を用いた授業研究と教育課程の工夫・改善
○学習集団（話し合う力）やリーディングスキル（読解力）の育成
○カリキュラム・マネジメントの視点をいかした教科等横断的な単元配列表の作成

１　研究の概要

(1)　研究のねらい

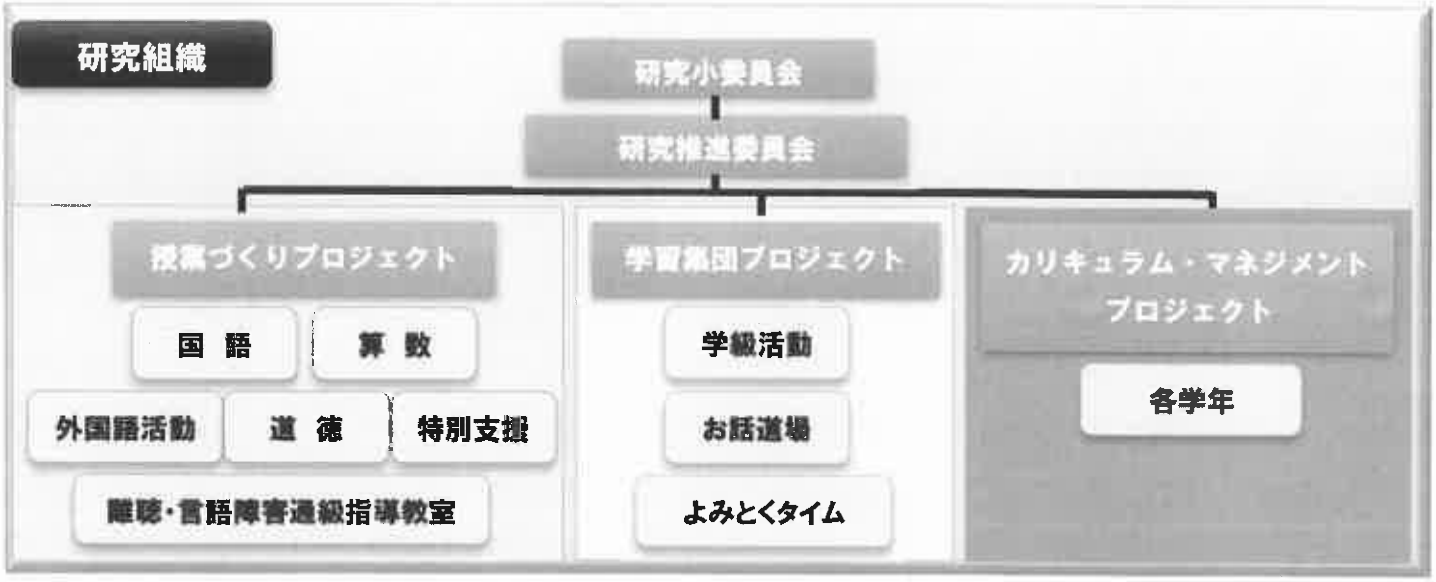
本校では、「豊かなかかわり合いの中で、今と未来にいきる」を研究主題として、主体的・対話的で深い学びを実現するための授業改善と子供たち一人一人の基礎学力の定着、教科等横断的な資質・能力を育成するよう取り組んでいる。「いきる」には、「生きる」と「活きる」の２つの意味があり、学んだことを教科等横断的に活用し、今と未来に活かして生きて抜いていく子供たちを育成することをねらいとしている。本校では、「２１世紀型スキル」を「生きる力」＋「テクノロジー活用力」と捉え、次の９つの力と定義している。

21世紀型スキル	主体性・協働性・創造性	**９つの力**
生きる力	課題設定力・メタ認知・クリティカルシンキング	
テクノロジー活用力	コミュニケーション力・プレゼンテーション力・論理的説明力	

(2)　研究主題設定理由

テクノロジーの急速な進化により予測不能な未来を生き抜く上では、子供たちが「２１世紀型スキル」を身に付けることが必須である。平成２８・２９年度の研究では、「学びの実感」「協働的な学び」「主体的な学び」の３つの『学び』の視点から授業を構築し、子供たちが未来に向けて臨機応変に対応できる能力を育成してきた。それを礎とし、新学習指導要領の実施に向け、豊かなかかわり合いの中で主体的・対話的で深い学びを実現する授業づくりを行うとともに、全教職員が教科等横断的な視点をもって単元を構成することが重要であると考え、本主題を設定した。

(3)　研究組織



2　研究の内容

３つの『学び』と１１の視点をいかした授業研究

本年度は、特別活動、国語科、算数科、外国語活動、道徳科、特別支援教育、ことばきこえの７教科・領域で授業づくりを行った。

教科・領域のテーマを中心に据えた「トライアングル」を作成する。それぞれの目指す子供の姿を基に、「主体的な学び」と「対話的な学び」の工夫改善が「学びの実感」につながるという図となっている。授業づくりの際は、この目指す子供の姿をゴールに授業を構築していく。

【トライアングル】

【川越小学校研究構想図】

【１１の視点】

視点１　学習内容・学習活動を吟味する。	視点６　思考力・判断力・表現力を育むために言語活動を充実させる。
視点２　導入の工夫改善をする。	視点７　個の学びを充実させる。
視点３　発問や言葉がけを想定する。	視点８　学び合い活動の学習形態をくふうする。
視点４　問題意識を高める学習内容、学習課題を設定する。	視点９　学習内容を身近な生活やこれまでの生活経験と関連させる。
視点５　学びを外化し、可視化する。	視点１０学習活動の振り返りを充実させる。
	視点１１学習内容の成果を、これからの生活に活用したり、いかしたりする。

【各教科・領域の３つの『学び』と工夫】

教科等	教科等のテーマ	３つの学びの姿	工夫
特別活動	自分からそして自分たちで活動する子ども	○よりよい自分への変容をめざす姿 ○友達の考えを生かそうとする姿 ○自分の考えを持ち、自分から取り組む姿	●自他の成長に気付き次の活動へ生かそうとする工夫 ●子どもの思考を可視化する工夫 ●実践までの見通しを持ち、主体的に活動する工夫
国語科	自分の言葉で表現することで学び合い、さらに思考を深める子ども	○養った力を日常生活に活用しようとする姿 ○論理的な思考で、意見を伝え合う姿 ○根拠を明確にして思考・表現する姿	●課題解決できた喜びを次の学習につなげる工夫 ●自分の意見を明確化できる言語活動の充実 ●子どもが自ら学ぶ意欲を高める工夫
算数科	数学的な見方や考え方ができる子ども	○算数の学びを活用していく姿 ○より良い解決方法を考え実行していく姿 ○既存の知識を生かし自力解決していく姿	●学びを還元する工夫 ●数理的な処理のよさに迫る工夫 ●多様な考え方を引き出す工夫
外国語活動	積極的にコミュニケーションをとる子ども	○多様な言語や文化のよさを受け止めようとする姿 ○友達とコミュニケーションを図ろうとする姿 ○楽しく英語を使おうとする姿	●細かなステップを踏んだ「話す聞く読む書く」の工夫 ●言いたい思いを伝えるための工夫 ●伝わった喜びを味わわせる工夫

道徳科	自己の生き方を考える子ども	○自己の生き方へ学びを生かそうとする姿 ○話合いを通して友達の考えから学ぼうとする姿 ○自分の考えをもち、道徳的諸価値を理解しようとする姿	●学習活動を通して、自己の生活を振り返る工夫 ●自己の考えを多面的・多角的に考える工夫 ●道徳的諸価値にせまる発問の工夫
特別支援教育	友達の意見を聞いて、自分の考えを深め実践する子ども	○実践したことを振り返り、みんなでできた喜びや、次への活動を期待している姿 ○友達の意見を聞いて、よりよいものを決めようとする姿 ○自分たちで決めて、みんなでやる姿	●実践と振り返りの充実の工夫 ●友達の話を聞き合い、意見をまとめていく言語活動の充実 ●自分の意見を持ち、発表できる工夫
ことばきこえ	肯定的な自己意識をもつ	○自己肯定感が高まり、意欲的に生活できる姿 ○自分にとって楽な話し方で、考えを表現できる姿 ○吃音にとらわれえず楽しく表現できる姿	●ことばの教室と保護者・在籍校との連携 ●グループ学習を通しての多様な経験 ●環境調整や学習内容の工夫

3　実践事例

(1)　ＰＤＣＡサイクル

本校では、授業改善のための「１１の視点」に加えて、「逆向き設計（授業計画シート）」と「OPP シート」を活用し、研究協議会を通したＰＤＣＡサイクルが定着している。

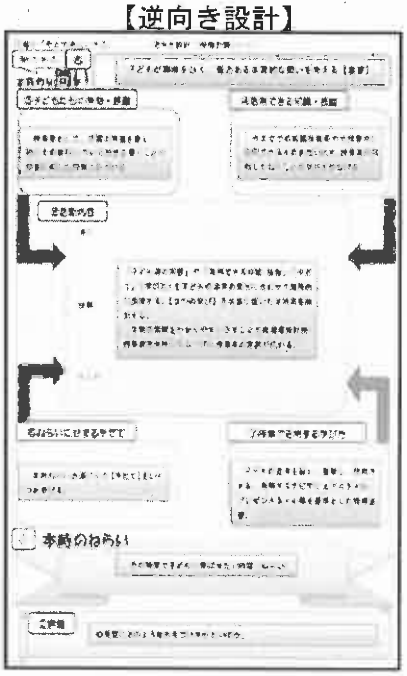
P「逆向き設計」では、「本時のねらい」から単元構成を行うことで、子供たちに付けたい力を軸に授業を構築することができる。Ａ４用紙１枚にコンパクトに作成し、研究授業前にすべての職員に周知している。

D授業参観の視点を明確に示した「授業研究会の流れ」を基に授業を参観する。教師の手立てと児童の活動で授業改善に有効だった手立てを「評価カード」にメモする。

C・A研究協議会は、小グループによる協議をメインに行った。「授業研究会の流れ」に示された役割分担は輪番となっており、司会、説明（担当学年）、記録（発表）を全職員が一度は経験する。３つの『学び』の枠が設けられた白い模造紙に、授業参観時にメモした評価カードを貼り、それを基に授業改善のための方法について話し合った。

【授業研究会の流れ】

【逆向き設計】



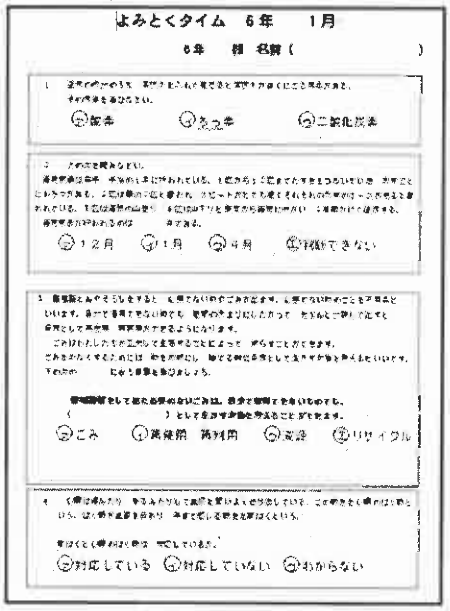
(2)　よみとくタイムの取組

（ＲＳＴの実施）

子供たちの基礎学力育成のため、夏季休業中に学習集団プロジェクトを中心に、全教員で問題作成を行い、９月から毎月１回、業前時間に「よみとくタイム」を開始した。発達段階を考慮して、下表のように問題数と時間、内容は低中高で変えている。

学年	問題数	流れ	留意事項
低学年	５問	①解答（7～10分） ②答え合わせ ③振り返り	・低学年のうちは、話合いは行わず、代わりに振り返りを行う。
中学年 高学年	中：１０問 高：１５問	①解答（7分） ②話合い（2分） ③答え合わせ	・友達と根拠を明確にして話し合う。 ・答えは書き換えてもよい。 ・解いた問題についてのみ話し合う。
特別支援学級	３問	①解答（7分） ②答え合わせ ③振り返り	・３問を丁寧に行う。答え合わせの時間を多く取り、しっかりと解説する。

【よみとくタイム問題用紙】


よみとくタイム　６年　１月

６年　組　名前（　　）

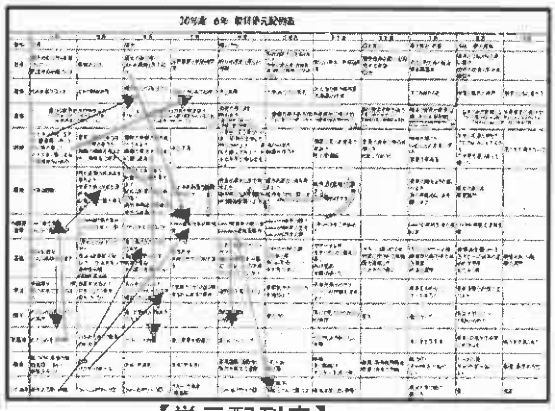
【ＲＳＴ実施の様子】

１２月に、５、６年生対象に国立情報学研究所で開発された読解力のレベルを測る「リーディングスキルテスト（ＲＳＴ）」を実施した。成績は、全国の小学生よりも高かった。

本年度より導入されたタブレットを使ってのテストであったが、よみとくタイムで読解力を問う問題に慣れていたため、集中し取り組むことができた。

(3)　単元配列表の作成

カリキュラム・マネジメントプロジェクトでは、単元配列表を作成した。一つの単元で学習した内容が他教科の単元の学習内容と関連するものを結び付けることで、子供たちの教科等横断的な資質・能力を育成するための教育課程改善につなげる。他にも博物館や地域人材活用についても記入している。



【単元配列表】

4　研究の成果と課題

(1)　成果

・教科等横断的な視点で教育課程改善をしたことで、学習したことを教科の枠を越えて生活に活かそうとする姿が見られ、学びの実感へとつながった。

・授業改善のための手立てにより、子供たちの豊かなかかわり合いが助長され、よりよい考えや深い学びにつながった。

・ねらいを明確にした授業構築や基礎的読解力を高めたことで、子供が主体的に課題に取り組む姿勢が多く見られた。

(2)　課題

・教科・領域それぞれの特性により、必ずしも一つの形式「課題解決型学習」に絞れるとは限らないため、さらに研究・検証を進めていきたい。

研究主題

「よりよい学級・学校生活づくりに主体的に参画する児童の育成」

~児童の主体性、自己指導能力の育成を目指した学級活動の実践~

学校名　川越市立　武蔵野小学校

研究のポイント

○特別活動（１）の研究を通し、児童の自己肯定感の向上をはかる。
○話合い活動の進め方のスタンダード化をはかり、どの学級でも充実した学級会が行われるようにする。

1　研究の概要

（１）研究のねらい

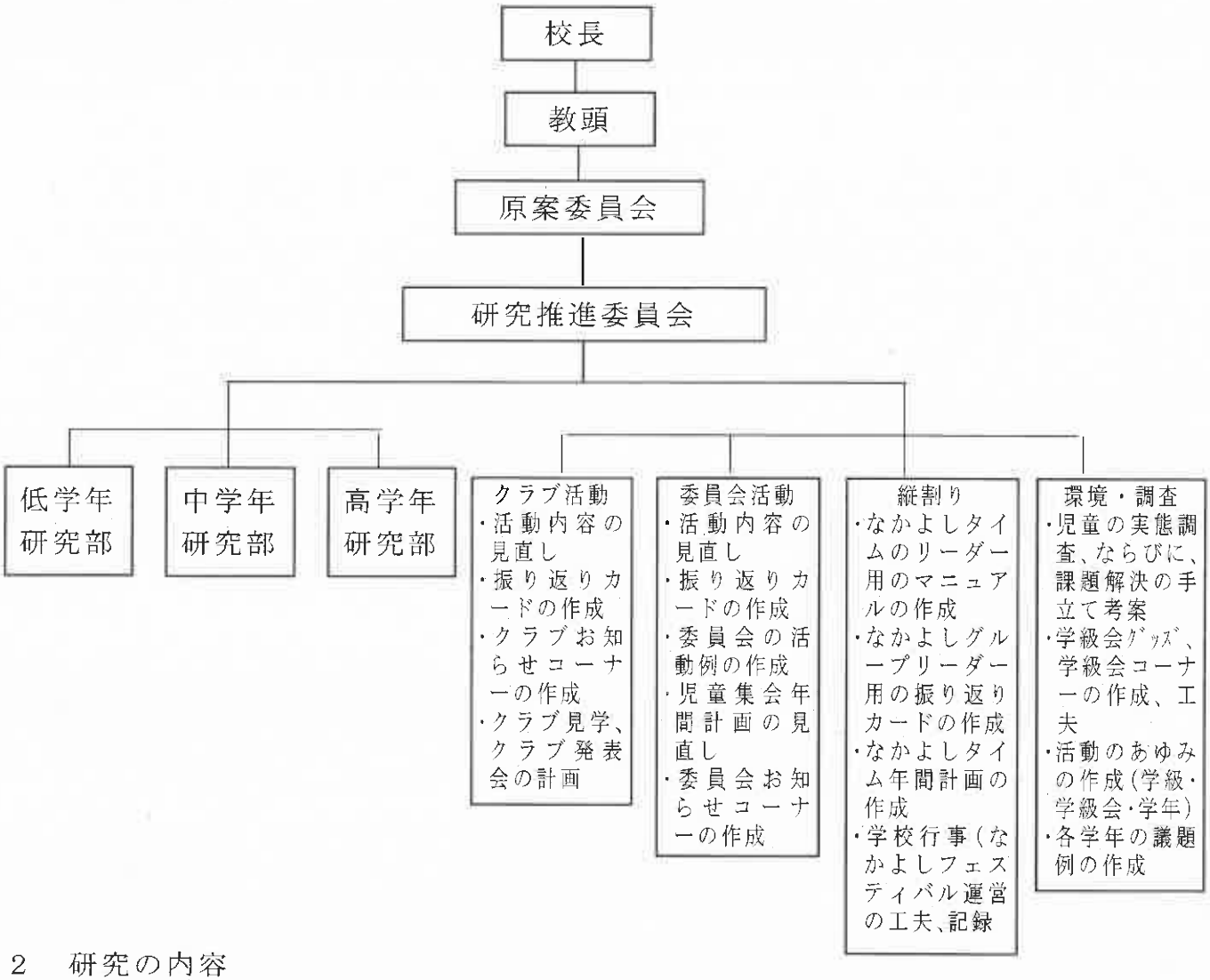
本校では、平成２９年度より、児童の主体性、自己肯定感の向上を目指し、特別活動の研究を進めてきた。自己有用感を育むことや運動好きな児童を育むことに主眼を置いて研究を進めてきた。新体力テストの結果を見ると、総合評価 A＋B＋C に達した児童の割合が向上し、一定の成果が見られた。しかし、埼玉県学力･学習状況調査の質問紙調査では、発表することが好きと答える児童が少なく、児童の自己肯定感に課題があることが分かった。また、自分の考えを通そうとするあまり、友だちの考えを受け入れることを苦手とする児童が多いことも課題として上ってきた。そこで、本校の児童の実態を鑑み、学級活動を通して児童に折り合いをつけることを身につけてほしい、学校から発信できて保護者と一体となって学校を変えていく研修は何かという議論から、今年度から特別活動の研究を進めていく運びとなった。

（２）研究主題設定理由

主題の意味はかなり大きくとらえることができる。そして、主題の先には「学校教育目標」や「教師の願い」がある。また主題を達成するためには、本校の「児童の実態」を踏まえた研究をしなければならない。漠然とした研究とならないように、副題に示した学級活動の充実を中心として、学級会の進め方にしぼって研究を進めることにした。

本校の実態から、児童の主体性や自己肯定感を引き出すことや、児童同士の豊かな人間関係を築くことが必要不可欠である。「自らの意見を持ち、自信を持って相手に伝えられること」、「相手の気持ちを考え、発表できること」を目指した話合い活動が必要であると考え、児童自ら人との関わり方を学ぶための特別活動（学級会）の学校研究に取り組むことにした。児童自ら取り組む活動を推進し、目指す児童像を実現するため、研究主題を「よりよい学級・学校生活作りに主体的に参画する児童の育成」副題を「児童の主体性、自己指導能力の育成を目指した学級活動の実践」と設定した。

（３）研究組織



２　研究の内容

（１）目指す児童像に迫る各ブロックの目標

目指す児童像	友だちの考えのわけを真剣に聞き、互いのよさを認め合う子	自分の意見に見通しを持ち、全体を考えてよりよい集団にするために伝えようとする子	なかまを大切にし、意欲的に活動する子
低学年	友だちの意見を知り、わかり合うことができる。	自分の意見を持ち、発表することができる。	みんなとなかよく助け合って活動することができる。
中学年	話をしている人を見て、自分の考えと比べながら聞くことができる。	理由を明確にして意見を言ったり、異なる考えについてもよく聞いて公平に判断したりして、よりよい結論をまとめる。	決定したことを協力し合って進んで実践する。
高学年	友だちの考えを理解し、共通点や相違点を考えながら聞くことができる。	よりよい学校・学級生活をめざし、友だちの考えから自分の考えを深め、建設的に行動できる。	互いに信頼し、支え合いながらめあてに向かって進んで活動することができる。

（２）研究の視点とテーマに迫るための手立て

互いに高め合う話合い 【指導の工夫】	主体的に活動できる環境 【環境整備】	よりよい学級生活づくりの実践の評価 【工夫・改善】
①年度当初の 学級経営方針 「黄金の三日間」 ②計画委員会の指導 （事前指導、活動計画） ③提案理由の練り上げ ④時間内の合意形成 （決め方、司会の言葉、進め方のパターン） ⑤適切な支援・助言 （学級会ノートの朱書き・先生の話の観点を明記） ⑥話合いの可視可 （板書計画・学級会コーナーのスタンダードの作成）	①学級会グッズの活用 ②学級会コーナー、係コーナーの充実（今までの話合い、今後の話合いが分かるもの。係カードのレイアウトやネーミングの工夫） ③活動時間の確保（係、計画委員、ふれあい、児童集会） ④学級会ファイル（学級会の手引き、学級会ノート感想、提案カード、資料等を保存）	①評価者 ･･･自己評価、教師による評価、相互評価 ②評価の場（対象） ･･･事前活動（計画委員 ･･･話合い、（個々の児童、計画委員、学級集団） ･･･実践（個々の児童、役割の担当者、様々な集団） ③評価方法 ･･･提案カード、学級会ノート、活動の観察、ふり返りカード感想等 ④評価の蓄積 ･･･学級会ノート、ふり返りカード ⑤先生の話の充実 ⑥学級のあゆみ

３　実践事例

（１）話合い活動における教師の助言例

助言の分類	助言例　◇事前　◎話合い前の先生の話　○話合いの中　☆終末の先生の話 ※事後（実践）
【開眼性】 児童に気付かせる	○「まだ発言をしていない人、いいことがいっぱい書いてあったから発表してくださいね。」
【示唆性】 話合いの調整をしたり、方向を示したりする	○「もう一度、めあてや提案理由を見て、発言しましょう。」 ○「他にも合体できる意見が合ったら言ってくださいね。」 ○「他にもいい案の人がいるから指してあげてください。」
【包含性】 子どもたちのがんばりを認める	☆「○○さんの発言が光っていましたね。」 ☆「○○さん、話す人を見て、うなずきながら真剣に聞いていました。」 ☆「提案理由にあった発言が増えたね。」
【臨床性】 一人ひとりの反応を見ながら支援する	○「反対意見が多くなってきたけど、反対意見を改善するためにはどうすればいいとおもいますか。」 ○「発言する人にかたよりがあったので、たくさんの意見が聞きたいです。」

（２）場面ごとに分けた司会原稿

話合いの進め方（いくつかにきめる）　<中>①

役わり	話合いのじゅんじょ	進め方
司会	1 始めの言葉	◎起立！これから、第○回学級会を、始めます。 礼！
司会	2 歌	◎○○○（クラスの歌）を元気に歌いましょう。 （あわったら）着席！ ※司会グループは立ったままでいる。
司会グループ	3 司会グループのじこしょうかい	◎今日のし会の○○です。めあては～です。

今どこを話し合っているか、司会がわかりやすく、話合いを進めやすくする

話合い活動の進め方（いくつかに決める）　<中>③

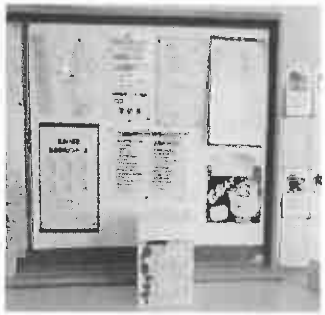
役割	話合いのじゅんじょ	進め方
司会	9 話合い	◎話合いに入ります。始めに、話合うこと①の□□について意見を出してください。 ※【出し合う】の表示を出す。 （意見をたくさん出してもらう。意見がなくなったら次に進む。） ◎今出た意見について、質問はありますか。 ◎それぞれの意見について、さんせい意見、反対意見を発表してください。 【いくつかに決める話合い】 ヒントカードを参考に進める。

（３）掲示物の共通理解

学級のあゆみ

学級会のあゆみ

学級会コーナー



4　研究の成果と課題

（１）成果

①学級会の進め方や準備の仕方を全体で共通理解することができた。

②環境部で作成した学級会のあゆみや学級会コーナーなどのモデルをもとにして、各学級で工夫を凝らした掲示物を作成することができた。

③話し合うための下地作りができ、話合いの仕方が定着してきた。

④児童の学級会に対する意欲が向上し、よりよい学級生活づくりのための話合い活動を繰り広げることができた。

⑤提案理由やめあてに沿った意見だけでなく、友だちの意見と比較した意見を出すことができるようになった。

⑥他教科でも、友だちの意見を生かした話合いが行われ、対話的な学習の場面がよく見られるようになってきた。

（２）課題

①積極的に意見を発表する児童に偏りが見られたり、意見をはきはきと発表することを苦手とする児童がみられたりし、自己肯定感を向上させる手立ての構築が必要である。

②研究のねらいに迫る手立てについて、より深い共通理解が必要である。

③アンケート結果から、本校の課題を分析し、その解決のための手立てを提案することはできたので、より各学級に手立てを浸透させる必要がある。

研究主題

「自ら学び続ける児童の育成」～できる喜びを感じる指導の研究～

川越市立南古谷小学校

研究のポイント

○基礎基本を身に付け、既習事項を活用して課題を解決できる子の育成
○学び合う楽しさを実感し、自分の考えを広げたり、深めたりすることができる子の育成
○自分に自信を持ち、意欲的に学習する子の育成

1　研究の概要

（1）　研究のねらい

本研究のねらいは、全職員が一定レベル以上の授業をすることで、児童の学力向上を図り、自ら学び続ける児童を育成することである。

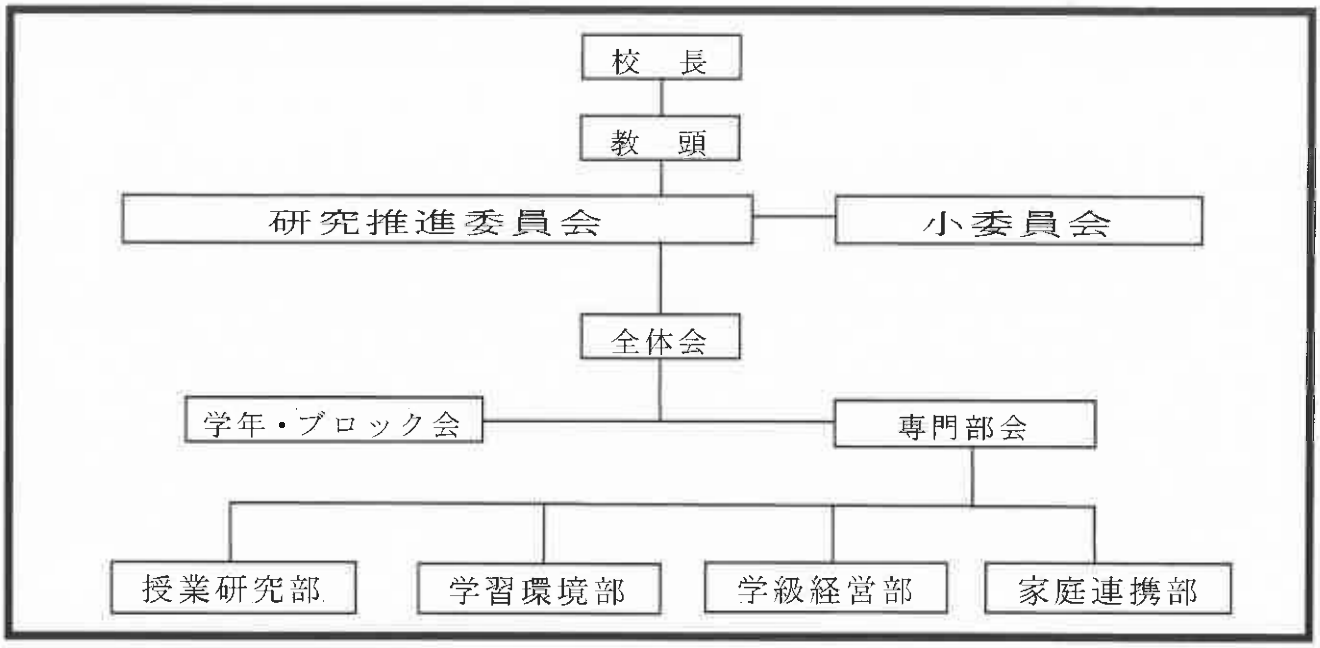
（2）　研究主題設定の理由

本校の児童は、素直で明るく、集団行動も協力してできる。学習面においても意欲的に取り組むことができる。一方で、授業での学習内容の定着や表現力・思考力に課題のある児童が少なくない。児童の実態を踏まえ、保護者アンケートや教職員の協議を経て、本校では、主題を「自ら学び続ける児童の育成」副題を「できる喜びを感じる指導の研究」とし、国語科・算数科教育を中心に研究を進めることにした。

将来の予測が難しい社会においては、自ら課題を発見し未知の状況にも対応できる力が求められる。不断に学び続けることで、自らの学力を高め、人間性を豊かにすることは、将来の選択の幅の広がりにもつながる。そのために必要な資質や能力である「学びに向かう力、人間性の涵養」「知識・技能の習得」「思考力・判断力・表現力の育成」に向けても、本研究は大いに資するものと考える。

ただ、「主体的な学び」といっても学び方が日々の授業の中で身に付いていかなければ、その実現は難しい。すなわち、前提として教師の授業力の向上が不可欠である。本研究を通して、若手からベテランまでの教師が学力向上の方策を共有し、全クラスで一定レベル以上の授業が展開されなければならない。授業を通して、児童が日々「できる喜び」を感じることで学びの主体性の育成に結びつけていきたい。

（３） 研究組織



２　研究の内容

（１） 研究の仮説

仮説１　『基礎的・基本的な内容や既習事項をおさえ、それらをもとに考える指導過程を繰り返していけば、課題解決力が育成されるだろう。』

視点１　課題解決的な授業･･･国語科・算数科の基本的な指導過程と指導の工夫

仮説２　『基礎基本の定着と学ぶ喜びを感じることで、学習意欲も向上するだろう。』

視点２　基礎基本を定着させる学習環境･･･授業以外の学習形態と内容の工夫

仮説３　『互いに助け合う人間関係を構築すれば、自信を持ち、学習意欲も向上するだろう。』

視点３　磨き合い支え合う人間関係づくり･･･学級経営・人間関係づくりの工夫

仮説４　『学校での学びをもとに家庭と連携し、学習習慣を身に付ければ、学習内容の定着が図れるだろう。』

視点４　学びの定着と発展･･･家庭学習・家庭との連携の内容と方法の工夫

（２） 各研究部の取組

①　授業研究部

国語科・算数科の基本的な指導過程と指導の工夫の提案や学力分析を通して学力に関わる実態を共有し、学力向上の手立てを提案したり全職員が一定レベル以上の課題解決型授業ができるようにしたりする目的として活動している。

ア 学力分析　イ 南小漢字検定　ウ ぴかいちノート　エ 音読カードの統一
オ 計算ドリル・漢字ドリルの統一　カ ノートの統一　キ 掲示物の作成

② 学習環境部

学習環境の整備、朝学習や昼休みの時間を利用した学習計画の企画・立案を行い、基礎基本の定着と学習意欲の向上を図ることを目的として活動している。

ア チャレンジタイム　イ まなびタイム　ウ 南小俳句大賞　エ 教室前面統一
オ チャレンジ視写　カ チャレンジコーナー　キ まなびコーナー

③ 学級経営部

磨き合い、支え合う人間関係づくりをキーワードに学級経営・人間関係づくりの工夫を目的として活動している。

ア たからものカード　イ 帰りの会できらり賞　ウ あいさつサポーター

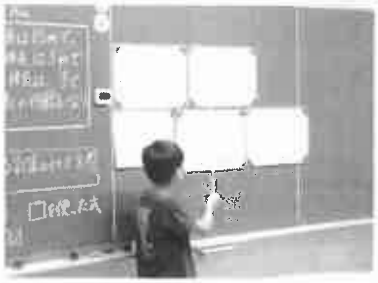
④ 家庭連携部

家庭学習の仕方を児童に学ばせたり、保護者に家庭学習の重要性を知ってもらったりすることを目的として活動している。

ア 学び通信　イ アンケート実施（児童・保護者）　ウ 南小暗唱名人
エ 読書活動の推進　オ 家庭学習の充実

3　実践事例　～授業研究会より～

６月１５日（金）
国語　「筆者の考えをまとめて伝え合おう
『動物の体と気候』」
授業者　５年５組　川田　翔人
指導者　川越市立南古谷中学校長　伊藤　博先生



６月２９日（金）
算数　「わり算のしかたを考えよう」
授業者　４年５組　諸田　智里
指導者　川越市立中央小学校長　小俣　仁司先生

９月２８日（金）
国語　「書き手のくふうを考えよう
『ほけんだよりを読みくらべよう』」
授業者　３年５組　高橋　知子
指導者　川越市立大東西小学校長　吉田　和実先生

１０月３１日（水）
生活単元　「お台場に行こう！」
授業者　くすのき学級１組　高橋　健
指導者　川越市立特別支援学校教頭　遠山　知子先生

１１月１日（木）
算数　「比例をくわしく調べよう」
授業者　６年１組　　関　　勝利
指導者　毛呂山町立毛呂山小学校長　竹内　一博先生

１１月１５日（木）
算数　「ひき算」
授業者　１年２組　　阿部　千香子
指導者　川越市立大塚小学校長　長谷川　郁代先生

１月２４日（木）
国語　「あなはかせになろう『あなのやくわり』」
授業者　２年６組　　窪田　　楓
指導者　川越市立名細小学校長　村上　重仁先生

４　研究の成果と課題

（１）　成果

①授業研究部が中心に作成した「ぴかいちノート」を活用して授業の進め方・板書・ノートの書き方を統一したことによって児童が安心して学習に臨めていることが着実に学習効果の高まりへとつながっている。また、授業研究部の取組の一つである「南小漢字検定」は、学習意欲や漢字の定着につなげられていると判断し、引き続き取り組んでいく。

②学習環境部の取組の一つである「南小俳句大賞」を実施することにより、子どもたち自身が季節感を味わいながら、語彙力や表現力を高めることができている。また、異学年交流の「まなびタイム」では、普段あまり関わることのない異学年の児童同士が関わりを持つことで、コミュニケーション能力の向上や深い学びの実現となっている。

③学級経営部の取組では、意図的な子どもたち同士の関わりを通して、友達から認められて育つ自己有用感となって自信につながっているので引き続き取り組んでいく。

④家庭連携部の取組の一つである「南小暗唱名人」では、学年ごとに暗唱する課題を設定することで、児童が目標をもって取り組み、自分の言葉できちんと伝えられる力が育まれ、授業中の発言や発表にも生かされてきている。

（２）　課題

さらなる授業の充実を目指し、目指す児童の育成を図るために、全職員児童の課題を捉え、同じ意識を持って研究を進めていく。そして、各専門部で取り組んでいる内容については精査を図り、内容を高め、自ら学び続ける児童の育成を図っていく。

研究主題

「心豊かで思いやりのある児童の育成」
～自己の生き方について考えを深めるための道徳教育の推進～

川越市立牛子小学校

研究のポイント

○道徳的課題を児童一人一人に自分自身の課題としてとらえ考えさせる。

○議論する場を設定し、多様な考え方にふれ、自分の考えを深めさせる。

1　研究の概要

（1）研究のねらい

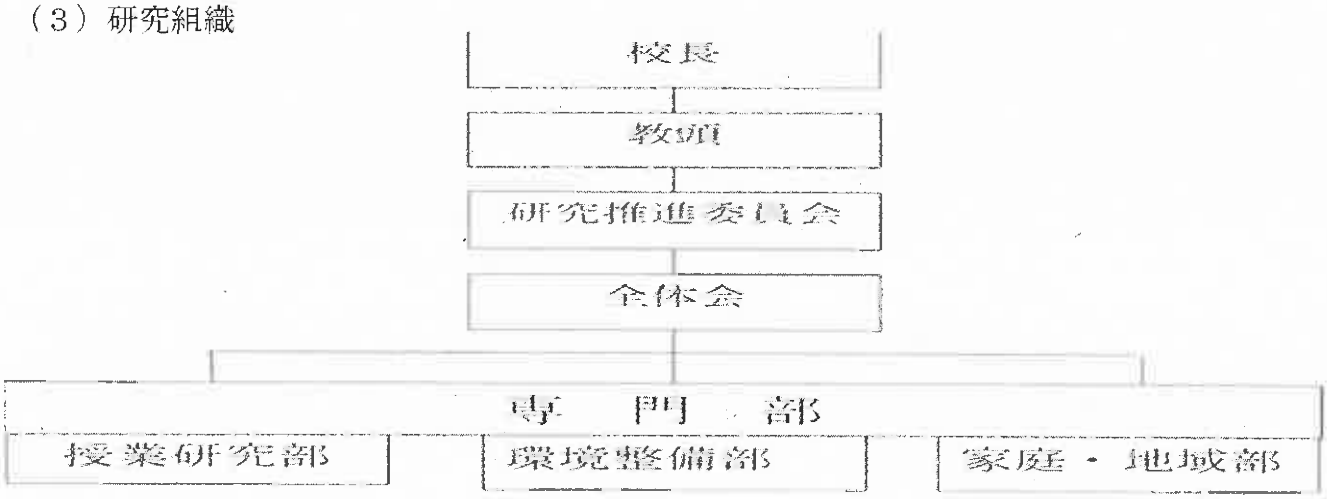
学校教育目標の具現化のため、本校の児童の実態、教師の願い、保護者の願いを明らかにし、特別の教科　道徳を推進し、児童一人一人が問題解決のため道徳的価値の理解を基に、自己を見つめ物事を多面的、多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める授業を行えるよう、全職員が一体となって授業の進め方、環境整備について研究し道徳教育を実践していくことをねらいとした。

（2）研究主題設定理由

価値観の多様化や変化の激しい社会で児童一人一人がたくましく生き抜いていくためには、目の前で起きていることを自分のこととしてとらえ、解決していく力が求められる。そのためには他者と協力することが重要である。他者と協力するためには他者を理解しなければならない。また、自分の考えを相手に伝える力も必要となる。

そのためには自分自身が相手を思いやること、目の前のことに感動したり、感情表現豊かであったりすることが重要であると考えた。そこで道徳の資料における場面と実生活での場面を関連付け、「自分だったら…。」と自分の生き方について深く考えさせることや友達の多様な考えを知ることで新しい考え方に気が付き、よりよい解決方法を導いていくなど、道徳科の授業を通して児童に生きる力を身に付けさせることができると考えた。さらに、いじめ未然防止のために、道徳的諸価値の理解を基に考え・議論し、自己の生き方ついて考える道徳が必要であると考え、研究主題を設定した。

（3）研究組織



2　研究の内容

（1）研究構想

学校教育目標
強く　正しく　美しく

校長の道徳教育の方針
・心の教育の充実
・規律ある態度の育成
・いじめ未然防止

・児童の実態・教師の願い・保護者の願い

【研究主題】
心豊かで思いやりのある児童の育成
～自己の生き方について考えを深めるための道徳教育の推進～

目指す児童像
○お互いを理解し、共によりよく生きようとする子
○自己を見つめ、自己の生き方について考え、実践しようとする子

研究仮説と手立て

仮説１
「道徳授業の充実と実践」
自己の生き方について考えを深めるような学習過程を工夫し、話合いを充実させることによって、心豊かで思いやりのある児童が育つであろう。

手立て
① 教材・教具の工夫
② 発問の精選
③ 話合いの工夫
④ 道徳ファイルの活用
⑤ 評価の工夫

仮説２
「心を育てる環境づくり」
児童の実態を把握し、道徳科における環境の充実を図れば、心豊かで思いやりのある児童が育つであろう。

手立て
① 学校道徳コーナー
② 道徳科教材の準備と整理
③ 児童アンケート
④ 学校経営の充実

仮説３
「学校・家庭・地域での情報の共有と連携」
家庭・地域への道徳教育に関する啓発活動や、地域の活動を知ったり、地域行事に参加したりすることで、心豊かで思いやりのある児童が育つであろう。

手立て
① 道徳だより
② 保護者アンケート
③ 「我が国の道徳」家庭版を活用した道徳教育の啓発
④ 学校公開日における授業公開の計画と実施

3　実践事例

（1）授業研究部

①第１学年　道徳科学習指導案

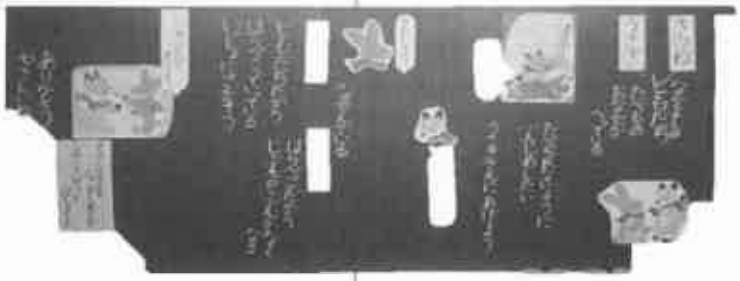
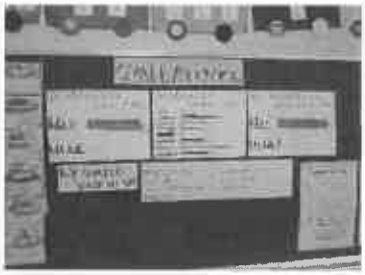
②主題名　こまっているともだちに　【B-9　友情、信頼】

③教材名　「くりのみ」　（出典　「みんなのどうとく」　学研教育みらい）

④ねらい　身近な友だちと仲良く活動し、助け合うことの大切さに気付き、困っているときには互いに助け合おうとする実践意欲を養う。

⑤学習指導過程

段階	学習活動	予想される児童の反応	・指導上の留意点 ☆評価の観点
導入	1　学習課題を設定する。 ・友達に助けてもらったことがあるか思い出す。 ・冬の森の状況を知る。 こまっているともだちがいたら、なぜたすけなければいけないのかな。	・転んだときに、大丈夫と声をかけてくれた。 ・消しゴムを忘れたときに貸してくれた。 ・食べ物がなさそう。	○生活経験を想起することで、ねらいとする道徳的価値について方向付けを行う。 ○物語の背景を押さえることで、教材への興味を高めるとともに、道徳的価値について考えやすくする。
展開	2　「くりのみ」を読んで考え、話し合う。 ①どんぐりをたくさん見つけた時のきつねの気持ちを考える。 ②「なんにもなくて、はらぺこです。」というきつねの言葉を聞いたうさぎの気持ちを考え、その後の行動について考える。	 分けてあげる ・かわいそうだから、くりのみを分けてあげる。 ・友達が困っている。分けてあげよう。 ・仲よく分けっこしよう。 分けてあげない ・おなかが減っているから、分けてあげられない。 ・きつねは自分のことしか考えていないのに、うさぎは友達のことを考えてくれたから。 	○２匹への共感を高めさせるために、教材を紙芝居で提示する。（手立て１） ○冬で食べ物もなかなか見つからないという現実があることを押さえ、一見すると自分勝手な思いは、実は誰でも持ちがちで、自分勝手な行動をしてしまうことをきつねを通して理解させる。（手立て３） ○うさぎにうそをついたきつねの気持ちを考えさせ、命を守る状況にいることにも触れ、きつねに共感させる。 ○きつねに対して、「かわいそう」だと思う、うさぎの気持ちを共通認識としてうさぎの行動を考えていく。（手立て３） ○うさぎがどうするか、２、３人の友達と意見交換をしながら、自分の考えをしっかり持たせる。 ○うさぎがやっと見つけた２つしかないくりを分け与えるかどうか、葛藤している気持ちにも触れる。

	③涙を流したきつねの気持ちを考える。 		○役割演技を通して、うさぎの友情や優しさに触れて涙したきつねの気持ちに迫る。（手立て２） ☆友達と助け合うことの大切さを理解し、考えを深めているか。（観察、発言） ○身近な友達であるうさぎに優しくされたきつねの心境の変化を、板書を整理し視覚的にまとめる。
終 末	3　自分の考えを書いて話合う。 ・きつねに手紙を書く。 4　今後の実践意欲を高める。	・うさぎに謝って、どんぐりをわけっこしよう。 ・うさぎにお礼を言って、これからも仲よくしてね。 ・これからは、助け合って仲よくしてね。 	○友達に優しくされたきつねに宛てて手紙を書かせることで、道徳的価値の具体的なイメージを持つことができる。きつねに話しかけることで、優しく助けられて得られる快い感情に気づいたり、友達と助け合っていこうとする思いを持たせたりしていく。（手立て４） ☆困っている友達を助けたいという思いを深めることができたか。（発言、記述）

⑥　評価

・困っている友達に対して取るべき行動を多面的・多角的に考え、互いに助け合うことの大切さについて理解を深めることができたか。

（物事を多角的・多面的に考えている様子）

・友達と助け合うことの大切さを実感し、困っている友達を進んで助けたいという思いを深めることができたか。

（道徳的価値についての理解を自分との関わりで深めている様子）

4　研究の成果と課題

成果

○心情を追うだけの道徳の授業から、道徳的価値について考え、議論する道徳の授業へ改善が進んだ。

○二分法を取り入れることにより、違う意見もあることに気付かせることができた。

○教材教具の工夫により、児童の主体的な学びにつながった。

○ワークシートを活用することで考えをまとめ、根拠をもって自分の考えを述べることができた。

○道徳だよりを家庭・地域に発信することで学校の取組を知ってもらい、家庭・地域の協力を得ながら道徳教育を推進することができた。

課題

●保護者アンケートの結果や児童の変容などを保護者に発信することでさらに協力を得られると感じたため、発信の仕方を含め、検討していく。

●ワークシートについて保存を次年度へ引き継ぐなど発達段階による変容を評価するなど、研究を継続していく。

●研究成果を「牛子小スタンダード」のような授業の進め方を作成し、どの学年、クラスでも研究成果を生かした授業を行うことができるようにしていく。

研究主題

「自分の考えを持ち、表現できる児童の育成」
～児童も教師も算数の楽しさを味わおう～

川越市立高階南小学校

研究のポイント

○算数の楽しさを味わえる児童の育成をめざす。
◇算数科における「楽しさ」の追求
◇算数科における「味わえる」ことの追求

1　研究の概要

(1)　研究のねらい

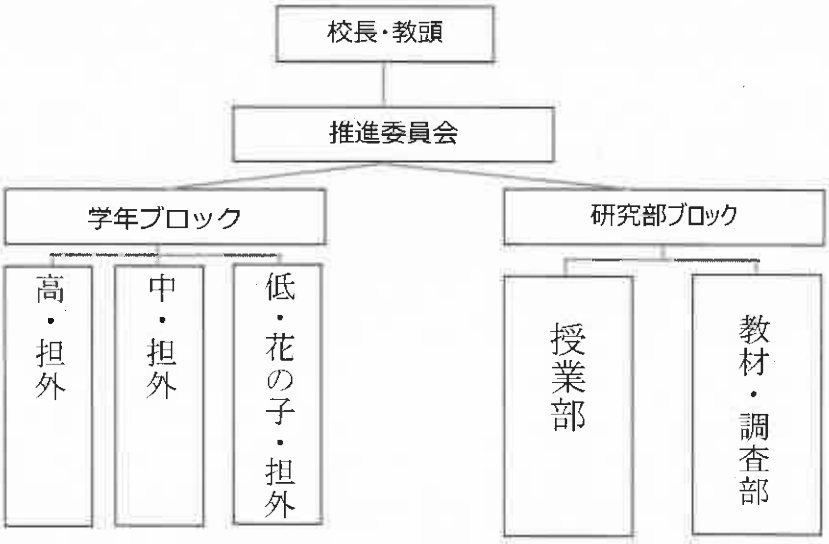
本校は川越市の南の果て、ふじみ野市に隣接し、住宅街の中に畑の散在する地区にある。２・３年生３クラス、他学年が２クラス平行の中規模校である。

算数科においては領域では「図形」、観点では「数学的な考え方」、問題形式別では「記述式」が弱いことが各種の調査によってわかってきた。そこで、学力の向上の取り組みが本校の課題の一つとなっている。また、学力の個人差もあり、指導や支援の方法の工夫改善が必要であると考えられる。そこで、指導方法を工夫改善し、一人一人が算数の楽しさを味わえることができるようにすることが研究のねらいである。

(2)　研究主題設定理由

どの児童も、学習ができるようになりたいという願いを持っている。しかし、低学年からの積み重ねができていなかったり、理解不足があったりと、学力が相応に身についていない児童は多くいる。それは、算数科において多く現れ、その学力の差も大きいことがある。しかし、児童はできるようになりたいのである。その願いに応えるには、我々が指導方法を工夫改善し、分かる児童を多く増やすことが肝要である。「分かる」喜び、「できる」喜びを感じ、身についたことが「生活に活かす」ことができれば、算数科の学習が楽しくなり、ひいては、他の学習にも良い影響を与え、個人の学力の向上が図られると考え本研究主題を決定した。

(3)　研究組織

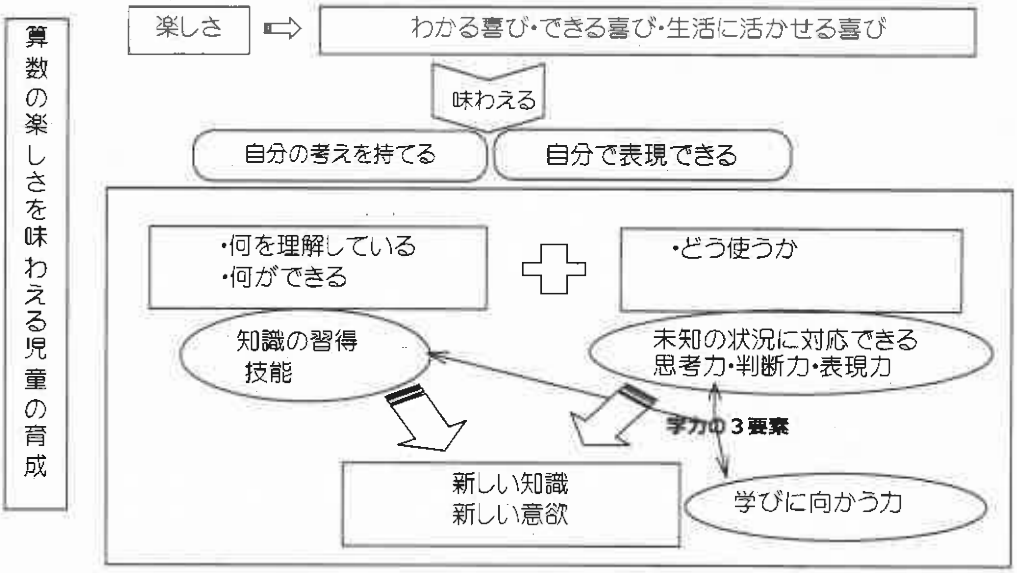


2　研究の内容

(1)　研究仮説

算数科における「楽しさ」とは「わかる喜び・できる喜び・生活に活かせる喜び」と捉え、学習過程の工夫や思考力育成の工夫、表現力育成の工夫を行えば、自分の考えが持て表現できるであろう。

(2)　研究の方向性



(3)　仮説の具現化

仮説の具現化（研究内容）

学習過程の工夫	思考力育成の工夫 表現力育成の工夫	社会に開かれた教育課程 評価方法の工夫
・学習内容の確実な習得を図る活動 ・習得した知識・技能の活用を図る活動 ・新たな疑問や課題を探求する活動 ・教科のねらいを達成するための言語活動の充実		

(4)　年次計画案

１年次	２年次
基盤づくり	深化・充実
○テーマの策定　（研究主題、仮説） ○研究体制の確立　○仮説や視点の理解 ○授業実践　○成果と課題の共有 ○次年度重点の明確化	○新テーマの確定　○研究の重点確認 ○授業協力者を招いた授業実践 ○実践の積み上げ　○成果と課題の共有 ○研究のまとめ ◎実践発表会開催による外部評価

3　実践事例　３年生

（1）　単元名　かけ算の筆算（2）

～前略～

◇研究テーマとの関わり

自分の考えをもち、表現できる児童の育成を目指した算数科の授業展開

①基礎・基本的な知識・技能の定着と足場（今回の内容につながる既習事項）を大切にした思考の過程

「算数スキルタイム」

・・・２週に一度、業前の時間にプリントや計算ドリルを行い学習の定着を図る。

「導入における足場づくり」

・・・授業始めの１～３分間で今回の内容につながる既習事項の確認問題に取り組む。本時では、前時に学習した１２×２０の計算を行う。

「形成プリント並びに計算ドリルの活用」

・・・類題に取り組み学習内容の定着を図る。

この３つの活動を通して、基礎的・基本的な知識や技能を定着させると共に、学習している単元につながる既習事項を確認し、一人一人の自力解決につなげる。

◇問題解決的な学習過程

㋩問題　㋕課題　㋚作戦　㋛実行　㋜まとめ　㋝練習（適応問題）　㋞振り返り

○つかむ ㋩ ㋕	①足場づくり ②問題を知る ③課題をつかむ ④見通す	・今回の内容つながる既習事項を確認する。 ・前時との違いに気付かせる。 ・児童と共に考え課題を決める。 ・既習の知識を使う求め方の見通しをもたせる。
○解決する ㋚　㋛	⑤自力解決をする	・自分の考えをもたせる。 ・個に応じた支援をする。
○検討する ㋛	⑥練り上げる	・ペア学習や小集団学習による対話的な学びを取り入れる。 ・練り上げの視点にそって話し合う。 （1）似ているところを見つける。 （2）よいところを見つける。 （3）いつでも使えるようにする。
○まとめる ㋜㋝㋞	⑦学習のまとめをする ⑧適用問題を解く ⑨学習を振りかえる	・自分の言葉でまとめる。 ・本時の学習の考え方が理解されているか確認する。 ・本時の学習を振り返り、興味・関心を評価する。

毎時間同じような学習過程で授業することで、問題に対する思考の流れを定着させていく。算数を苦手とする児童も見通しをもって問題に取り組むことができる。

②学習過程の確立

「ノートの書き方」・・・学習過程に合わせた型を示し、思考の流れを定着させていく。

「発表の仕方」・・・発表の型を示すことで、苦手な児童でも発表しやすくする。

「学習コーナーの設置」・・・既習事項を基に自力解決に臨めるように今回の内容つながる既習事項を掲示する。

今回は、前時の１２×３０の学習で使用した掲示物と、２学期に学習した２３×３の学習で使用した掲示物を貼る。

～中略～

（２）本時の学習指導（第３／１３時間）

①目標

・２位数×２位数（部分積がみな２桁で繰り上がりなし）の計算の仕方を考え、説明できる。

②評価基準

既習の計算を基に，２位数×２位数の計算の仕方を式や図を用いて考え、説明している。【数学的な考え方】

③展開

	学習活動	主な発問（○）予想される児童の反応（●）	指導上の留意点＊評価
つかむ 8分	1　既習事項の確認をする。	○２０こ買うとしたらどのような式になりますか。 ●１２×２０ ○答えを求めるために、どのように考えればよいですか。ノートに書きましょう。 ●１２×２の１０倍だから２４０ ●１０×２０＝２００ ２×２０＝４０　２００＋４０＝２４０	・前時に学習した計算を活かすために、解き方を確認する「足場づくり」をする。 ・児童の関心を高めるために実際に想定されるような場面の問題とし、実物を用意する。
	2　問題を読み題意を捉える。	○今日はあめを２３こ買うことにします。 ○どのような式になりますか。 ●１２×２３ ○どうしてかけ算になりますか。 ●一つ分の値段は１２円で、それを２３こ買うから。 ●一つ分×いくつ分＝全部だからかけ算でよい。	・わかっていることともとめることを整理して題意を捉えられるようにする。
	3　本時の課題をとらえる。	○前時と違うところはどこでしょうか。 ●一の位が０じゃなくて３になった。 ●何十というちょうどの数じゃない。	・前時までとの違いに着目させて本時の課題を児童の言葉を使って決める。

～後略～

４　研究の成果と課題

【成果】・問題解決的学習の実施を全学年で共通して行い、１時間の学習の流れを決めたことで、児童は先の見通しを持つことができ、落ち着いて学習に取り組めた。

・ノートの使い方の統一し、１時間の学習の流れに対応する形でノートの取り方も統一したことにより、いつでも誰に指導されても同じように学習を進めることができた。

・既習内容が本時の課題解決に活用できるように、教室側面を利用し掲示したり、黒板に掲示したりしたことで、児童が常に既習内容を使って問題に取り組めるようなった。また、本時の授業での思考の「足場」を作るための導入時の問題は効果的であった。

・学年に応じた発表の型を示すことで、苦手な児童でも発表しやすくなり、算数科における言語活動が盛んになった。

【課題】・授業の効率化を図り、十分な練り上げを行うことと共に、類題に取り組めること、振り返りができる授業を展開していくこと。

・真の学習の楽しさを教師と児童が共有でき、共に授業を作っていく姿をめざすこと。

研究主題

「互いを高め合い認め合うことのできる児童生徒の育成」

～小中９年間の学びと育ちの連続性を重視した教育―『道徳教育』を中心に～

川越市立福原小学校

研究のポイント

○小中一貫教育に向け、共通の学校研究課題を設定し、９年間の連続性を重視した具体的な取組の実践
○二分法等を用いた議論する道徳授業の展開と自他の考えを高め合い認め合う指導の工夫
○小中合同の研究組織の構築と道徳の協働授業の実践

1　研究の概要

（1）研究のねらい

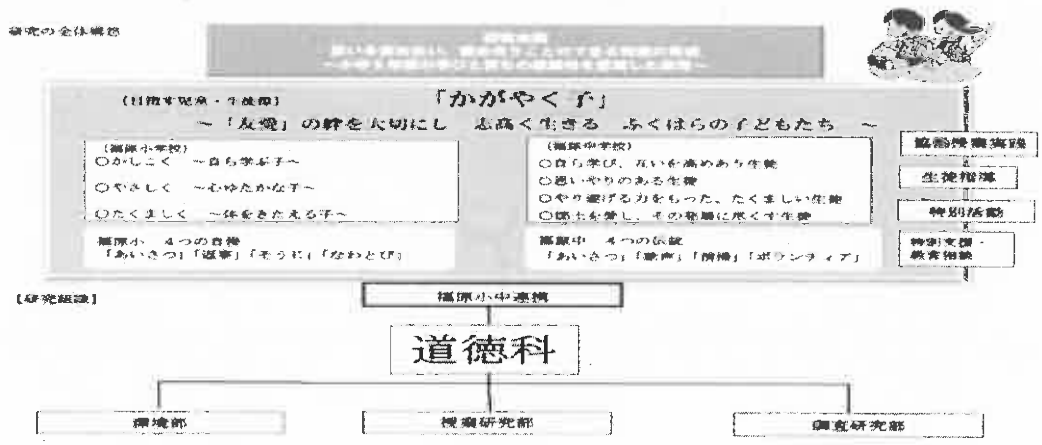
福原小学校の児童のほとんどは福原中学校へ進学することから、抱える学校教育課題は、共通している面が多い。そこで、これまで培った小中連携の基盤をもとに、今までの取組を検証することで、「小中一貫教育」に向けて、さらに歩みを進める。

本研究では、小中学校共通の目指す児童像・生徒像である「かがやく子」の具現化に向けて、９年間を通して豊かな心を身に付けていくために「特別の教科　道徳」の研究に取り組む。具体的には、小中共通の授業の進め方(福原ベーシック)や議論する活動、視覚的な教材の工夫などに小中合同の研究組織で取り組んでいきたい。

（2）研究主題設定理由

福原地区では、古くからの歴史があり、小学校、中学校ともにおらが村の「福原学校」として地元の期待が大きい。そこで、地域に根ざした愛される学校像を小中学校が共有し、教職員が連携して、より豊かな人間性を目指す一貫した教育活動を行う必要があると考え、研究主題「自ら学び、互いを高め合うことのできる児童・生徒の育成～小中９年間の学びと育ちの連続性を重視した教育―『道徳教育』を中心に～」を設定した。

（3）研究組織



2　研究の内容

（1）　仮説と手立て

①〈仮説１〉二分法等を使い議論する道徳科の授業を行っていけば、一人一人が進んで自分の考えを発表し、より考えを深めることができるであろう。

〈手立て〉

・授業の進め方の工夫　　・二分法の活用

・発問(切り返し)の工夫

②〈仮説２〉視覚的に役立つ教材を取り入れることで、より効果的に友達に考えを伝えたり、友達の考えを知ったりすることができるであろう。

〈手立て〉

・表情カード　　・４つの価値

・何でもシート

③〈仮説３〉授業の終末で自己を振り返り思いや考えをまとめることで、道徳的実践力を高めることができるであろう。

〈手立て〉

・ワークシートの活用　　・効果的な終末の工夫

3　実践事例

（1）　授業研究部

①　児童一人一人が進んで自分の意見を発表し、考えを深める指導の工夫

・指導案形式の統一(福原ベーシック)

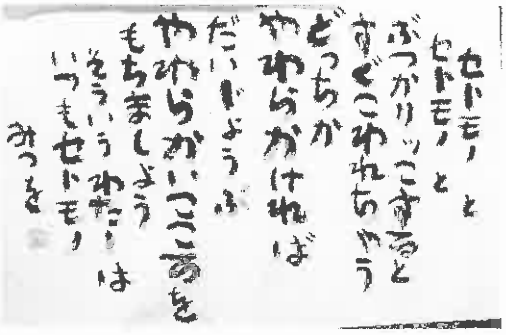
・授業の進め方の工夫

・導入の工夫(短く、課題の提示等)

・話し合いの進め方の工夫

(二分法ヒント集、時間配分)

・効果的な終末の工夫



②　児童生徒の道徳的実践力を高める学習活動の工夫

・ワークシートの活用

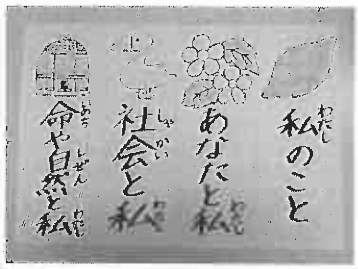
③ 協働授業
(福原中学校で道徳の授業)

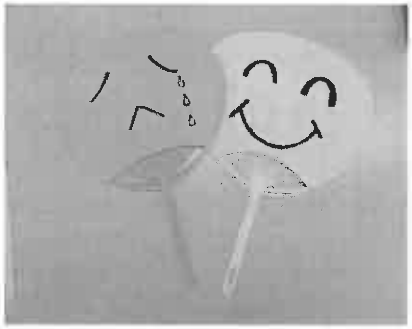
教材名「カーテンの向こう」
中学２年

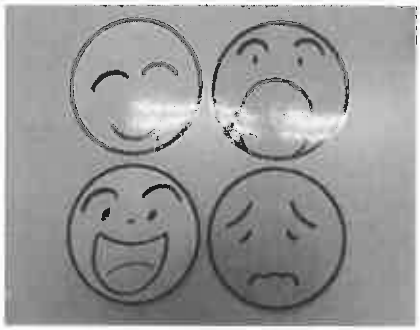
小学校６年時の担任がＴ２として範読等で授業に加わった。

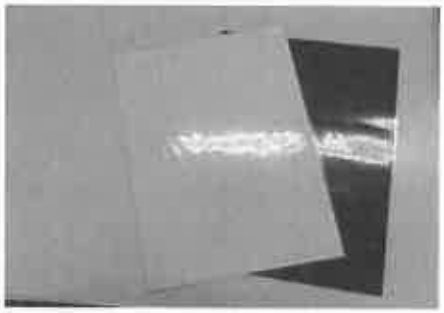
（2） 環境整備部(授業に活かせるユニバーサルデザイン・校内環境の整備等)
児童が自ら考えを伝えたり、友達の考えを知ったりすることができる教材・教具の工夫

① 授業に活かせるユニバーサルデザイン
・表情カード、心情円盤、感情うちわ
・４つの価値(黒板掲示用)
・何でもシート

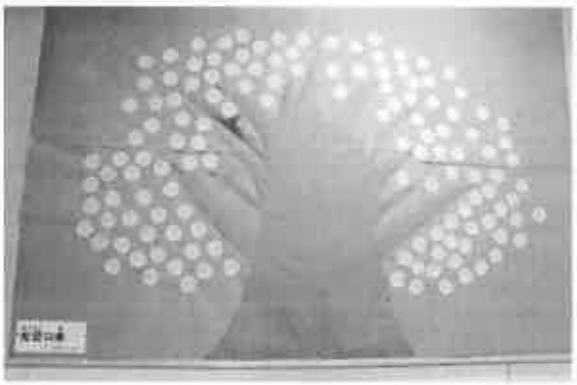








② 校内環境の整備等
・各教室・廊下掲示・学年掲示板の工夫、道徳コーナーの設置(友愛の木等)

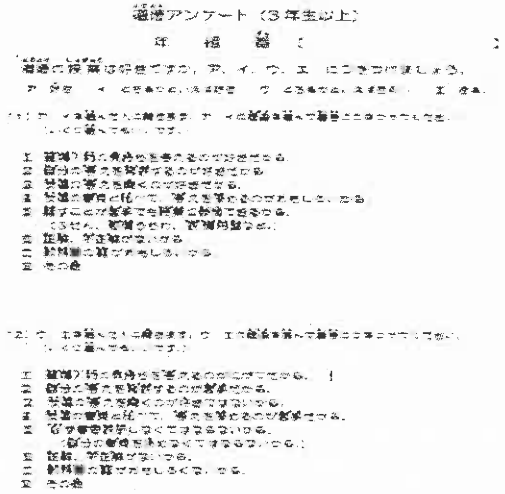


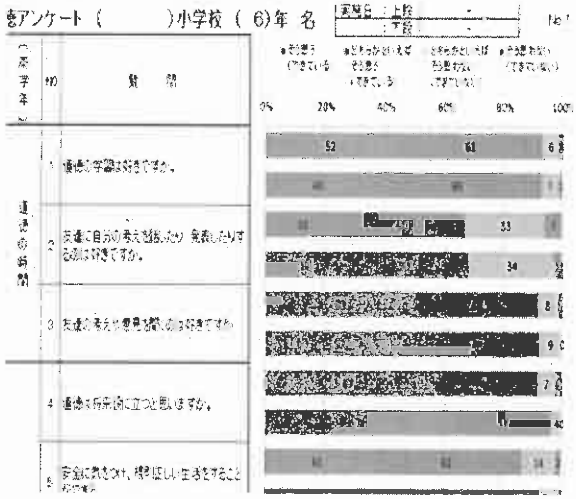
（3） 調査研究部(児童生徒の実態把握、成果の検証等)

アンケートの結果

・小学校…発表、考えを深めることが苦手　どちらかに決めるのが苦手(二分法)

・中学校…自己肯定感が低い　社会・地域への関心が低い





4　研究の成果と課題

（1）成果

① 学校全体で二分法等の研究を進めたことで、指導法についての理解を深めることができた。二分法等を活用した「考え、議論する道徳」の足がかりをつかむことができた。

② 道徳科の研究を通して小中連携を図り、小・中教職員の指導力(授業力)が向上した。

③ 中学校の道徳の授業に小学校教諭(元６年担任)がＴ２として加わり協働授業を行った。

④ 小中で同一のアンケートを行うことにより両校の実態が把握できた。

（2）課題

① 二分法を活用した話し合いを活性化させるための工夫

② 視覚教材の活用の仕方

③ アンケートを活かした研究の取組

研究主題

「互いを高め合い認め合うことのできる児童生徒の育成」

～小中９年間の学びと育ちの連続性を重視した教育―『道徳教育』を中心に～

川越市立福原中学校

研究のポイント

○小中一貫教育に向け、共通の学校研究課題を設定し、９年間の連続性を重視した具体的な取組の実践

○二分法等を用いた議論する道徳授業の展開と自他の考えを高め合い認め合う指導の工夫

○小中合同の研究組織の構築と道徳の協働授業の実践

1　研究の概要

（1）研究のねらい

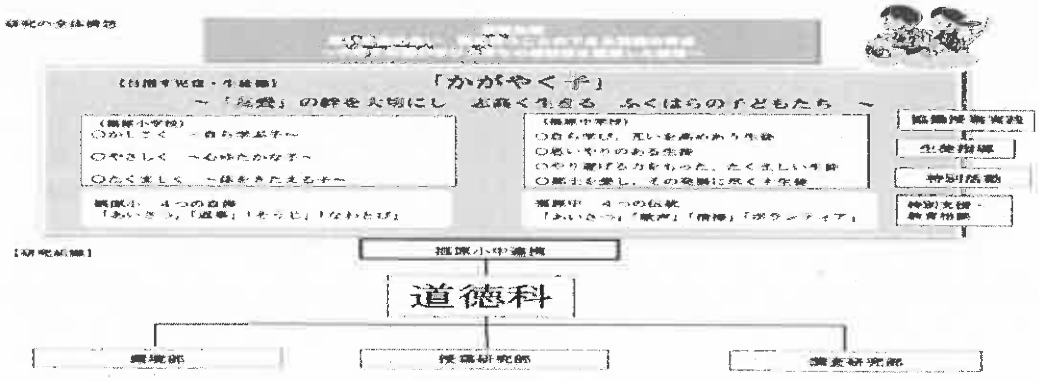
福原小学校の児童のほとんどが福原中学校へ進学することから、抱える学校教育課題は、共通している面が多い。そこで、これまで培った小中連携の基盤をもとに、今までの取組を検証することで、「小中一貫教育」に向けて、さらに歩みを進める。

本研究では、小中学校共通の目指す児童像・生徒像である「かがやく子」の具現化に向けて、９年間を通して豊かな心を身に付けていくために「特別の教科　道徳」の研究に取り組む。具体的には、小中共通の授業の進め方(福原ベーシック)や議論する活動、視覚的な教材の工夫などに小中合同の研究組織で取り組んでいきたい。

（2）研究主題設定理由

福原地区では、古くからの歴史があり、小学校、中学校ともにおらが村の「福原学校」として地元の期待が大きい。そこで、地域に根ざした愛される学校像を小中学校が共有し、教職員が連携して、より豊かな人間性を目指す一貫した教育活動を行う必要があると考え、研究主題「自ら学び、互いを高め合うことのできる児童・生徒の育成～小中９年間の学びと育ちの連続性を重視した教育―『道徳教育』を中心に～」を設定した。

（3）研究組織



2　研究の内容

（1）仮説と手立て

①〈仮説１〉二分法等を使い議論する道徳科の授業を行っていけば、一人一人が進んで自分の考えを発表し、より考えを深めることができるであろう。

〈手立て〉

・授業の進め方の工夫　　・二分法の活用

・発問(切り返し)の工夫

②〈仮説２〉視覚的に役立つ教材を取り入れることで、より効果的に友達に考えを伝えたり、友達の考えを知ったりすることができるであろう。

〈手立て〉

・表情カード　　・４つの価値

・何でもシート

③〈仮説３〉授業の終末で自己を振り返り思いや考えをまとめることで、道徳的実践力を高めることができるであろう。

〈手立て〉

・ワークシートの活用　　・効果的な終末の工夫

3　実践事例

（1）授業研究部

① 児童生徒一人一人が進んで自分の意見を発表し、考えを深める指導の工夫

・指導案形式の統一(福原ベーシック)

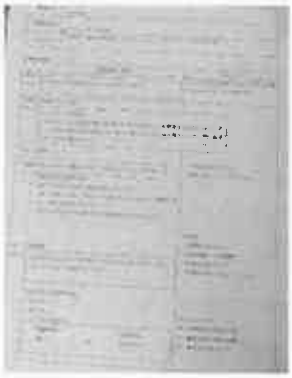
・授業の進め方の工夫

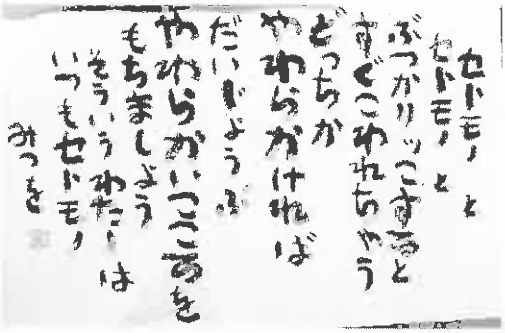
・導入の工夫(短く、課題の提示等)

・話し合いの進め方の工夫

(二分法ヒント集、時間配分)

・効果的な終末の工夫





② 児童生徒の道徳的実践力を高める学習活動の工夫

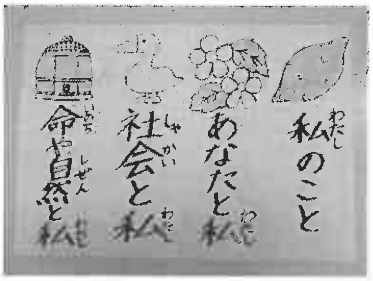
・ワークシートの活用

③ 協働授業
(福原中学校で道徳の授業)

教材名「カーテンの向こう」
(中学２年)
小学校６年時の担任がＴ２として範読や発言を促す指導等で授業に加わった。

（２） 環境整備部(授業に活かせるユニバーサルデザイン・校内環境の整備等)
児童生徒が自ら考えを伝えたり、友達の考えを知ったりすることができる教材・教具の工夫

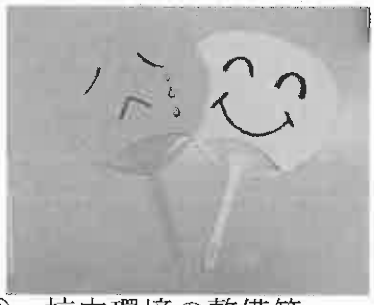
① 授業に活かせるユニバーサルデザイン
・表情カード、心情円盤、感情うちわ
・４つの価値(黒板掲示用)

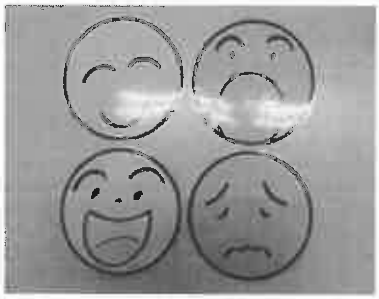


中学校では１年生のフロアに掲示

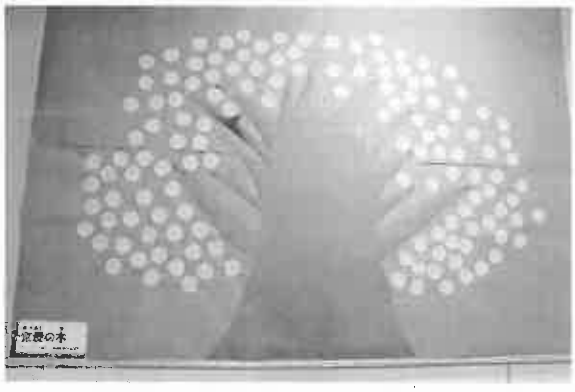
・何でもシート

② 日常的に視覚に響く掲示の作成

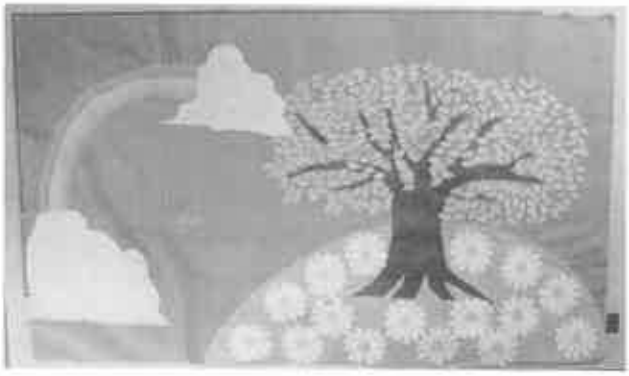




③ 校内環境の整備等
・各教室・廊下掲示・学年掲示板の工夫、道徳コーナーの設置(友愛の木等)



小学校　道徳コーナー(友愛の木等)



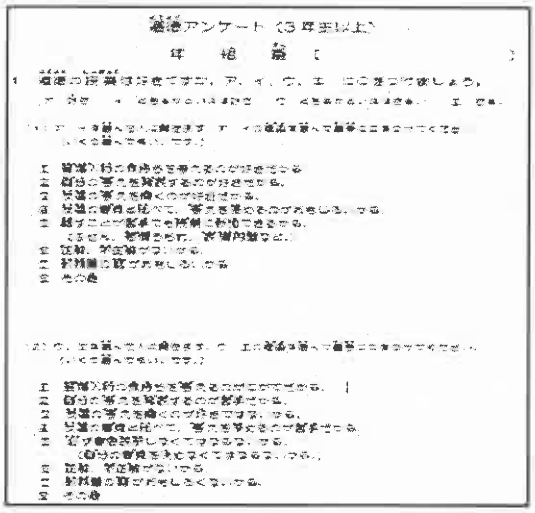
中学校生徒会いじめ撲滅運動（調和の樹）

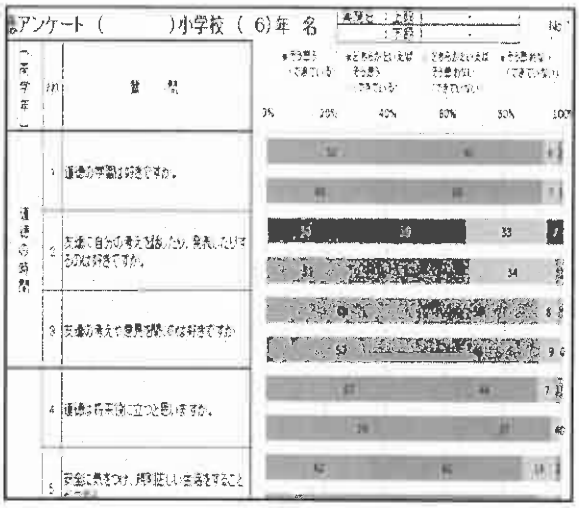
（3） 調査研究部(児童生徒の実態把握、成果の検証等)

アンケートの結果

・小学校…発表、考えを深めることが苦手　どちらかに決めるのが苦手(二分法)

・中学校…自己肯定感が低い　社会・地域への関心が低い





4　研究の成果と課題

（1）成果

① 学校全体で二分法等の研究を進めたことで、指導法についての理解を深めることができた。二分法等を活用した「考え、議論する道徳」の足がかりをつかむことができた。

② 道徳科の研究を通して小中連携を図り、小・中教職員の指導力(授業力)が向上した。

③ 中学校の道徳の授業に小学校教諭(元６年担任)がＴ２として加わり協働授業を行った。

④ 小中で同一のアンケートを行うことにより両校の実態が把握できた。

（2）課題

① 二分法を活用した話し合いを活性化させるための工夫

② 視覚教材の活用の仕方

③ アンケートを活かした研究の取組

研究主題

「地域と学校が一体となった開かれた学校づくり」

川越市立南古谷中学校

研究のポイント
○学校運営支援者協議会制度を導入する。 ○学校教育目標を地域と共有し、地域人材を活用した授業や、地域と連携した活動を取り入れた教育課程を編成する。

1　研究の概要

（1）研究のねらい

学校運営支援者協議会制度を導入するとともに、地域の人材や教育環境を活用した教育課程を編成し、目標を学校と地域が共有することで、地域と学校が一体となった開かれた学校づくりを推進し、地域とともに「気づき　考え　話し合い　実行する生徒」をはぐくむ体制の確立を図る。

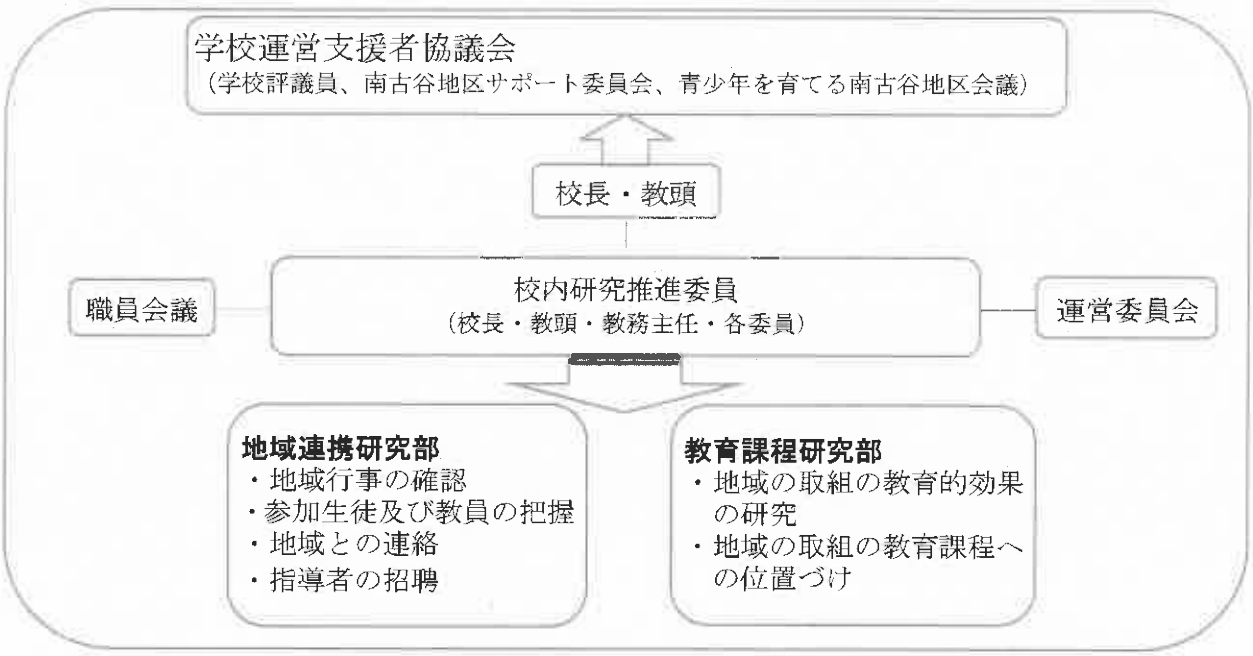
（2）研究主題設定理由

現代の子供たちを取り巻く教育環境は、地域社会のつながりや支え合いの希薄化、家庭の孤立化など様々な課題に直面しているとともに、学校を巡る課題も複雑化・困難化している状況にある。学校においては、子供の学びの場のみならず、地域コミュニティの核としての役割を果たすことが求められている。そのような中、次期学習指導要領において、「社会に開かれた教育課程」が掲げられ、学校教育を校内だけに閉じず、地域と学校が目標やビジョンを共有し、協働しながら子どもたちの豊かな成長を支え、「地域とともにある学校づくり」を進める事が重要であると示された。

本校は、今年で開校３６年を迎えた川越市内の中でも比較的新しい学校ではあるが、南古谷地区旧来からの農村型自治活動が盛んに行われていた経緯もあり、多くの地域の団体等と連携した取組が数多くある。

そこで、本校の特色である地域との連携を通して、地域と学校が一体となった開かれた学校づくりを推進し、「気づき　考え　話し合い　実行する生徒」を地域とともに育てていきたいと考え、本研究主題を設定した。

（３）研究組織



２　研究の内容

（１）　学校運営支援者協議会制度の導入

・本校では、地域の自治会長、ＰＴＡ顧問、民生児童委員等を構成員として学校評議員会を組織している。学校評議員会を中心とし、南古谷地区子どもサポート委員会や青少年健全育成連絡協議会会長等、さらには生徒代表を加えた学校運営支援者協議会を組織する。

・各学期１回、学校運営支援者協議会を開催し、学校運営方針、教育課程の進捗状況、生徒指導等について協議を行う。

・年度末に、学校評価の分析結果を踏まえ、次年度の学校運営方針について協議を行う。

（２）　地域の人材や教育環境を活用した教育課程の編成

・南古谷地区サポート委員会、青少年健全育成連絡協議会等が主催する様々な取組の教育的効果を明確にするとともに、教育課程に位置づける。

・「総合的な学習の時間」で実施している農業体験や「ふれあいタイム」等の文化体験的学習に加え、その他の教科においても地域人材を講師として積極的に招聘する。

３　実践事例

（１）平成３０年度の目標

①＜地域連携研究部＞

○地域行事への参加や、地域人材の指導者への招聘を管理する。

②＜教育課程研究部＞

○地域との取組の教育的効果について研究する。

○地域との取組を教育課程に位置づける。

（２）平成３０年度の取組

①地域との取組の教育的効果について

本校は、学校教育目標として「気づき　考え　話し合い　実行する生徒」を掲げている。地域と学校が一体となった開かれた学校づくりを推進するためには、この学校教育目標を地域とともに共有し、その具現化に向けて連携・協力することが求められる。そこで、学校教育目標を以下のように具体的な身につけさせたい能力として示すことで、それぞれの取組における教育的効果を明確にし、その視点に基づいた連携・協力を図ることにより目標の具現化につなげていきたい。

南古谷中学校　学校教育目標

「気づき　考え　話し合い　実行する生徒」

＜身につけさせたい資質・能力＞

気づき・・・道徳心

考え・・・・学力

話し合い・・コミュニケーション力

実行する・・課題解決力

＜地域との取組で期待される教育的効果＞

研究の進め方であるが、本年度は、本校教職員対象にアンケート調査を行うとともに、「道徳心」については道徳教育担当、学力については学力向上委員会、「コミュニケーション力」については国語科及び英語科担当、「課題解決力」については総合的な学習の時間担当がそれぞれの取組における教育的効果について協議を行った。

研究の結果、それぞれの取組からは上記のような教育的効果があることが明らかとなった。実際、多くの地域の方々と触れ合う地域の行事は、「コミュニケーション力」の向上が大いに期待できるところであり、様々な分野における体験的な活動は子どもたちの「課題解決能力」の育成にとって効果的である。また、生徒のボランティアによる活動や「おもてなしの心」を学ぶことができる活動は、周りの人を思いやる心や奉仕の精神などの「道徳心」、自己肯定感や自尊感情を向上させる良い機会である。さらに、近隣の高等学校と連携した取組である「みふるや寺子屋塾」や「川女リトル先生」などは、子どもたちの「学力」向上を明確な目的とした取組である。

このように、現在、南古谷中学校で実践されている地域と連携した取組には、多くの教育的効果を期待することができる。このような取組を、学校と地域が一体となって推進していくことは、単に学校教育目標の具現化につながるだけでなく、将来的には、ここ南古谷地区自体の街づくりにもつながると考えられる。そのためにも、学校教育目標や様々な取組おける教育的効果について学校と地域が情報を共有し、ともに理解を深めた上で連携を図ることが重要であると考える。

②教育課程への位置づけ

上記のとおり、地域との取組については、教育的効果が認められたため、次に、教育課程への位置づけについて研究を進めた。具体的には、本校教育活動の領域に「地域との連携」の項目を設け、それぞれの取組への参加形態、活動内容、評価を明確に示した年間指導計画を作成することとした。

＜地域との取組の年間指導計画＞

本年度は、教育課程研究部において、地域との取組における年間指導計画を作成するにあたり、それぞれの取組における実施時期、参加形態、評価方法について協議を行った。実施時期及び参加形態については、例年の活動状況を踏まえた形になっているが、評価については、それぞれの活動における子どもの取組を記録することとした。その意義としては、参加した活動に対する記録を残すことで、子どもたちに対し、個々の取組が教育課程の一環であることを意識させるとともに、自らの活動姿勢を振り返らせ、よりよい取組につなげるためである。具体的な評価方法については、教職員の負担軽減も考慮し、それぞれ参加した活動についての通知表及び要録への所見のみとした。

4　成果と課題

（1）成果

＜地域連携研究部＞

平成３０年度の目標

○地域行事への参加及び地域人材の活用の管理

・地域行事の確認
・参加生徒及び教員の把握
・地域との連絡
・指導者の招聘

＜教育課程研究部＞

平成３０年度の目標

○地域との取組の教育的効果についての研究

・各取組の教育的効果の確認

○地域との取組の教育課程への位置づけ

・地域との取組の年間指導計画の作成

（2）課題

①学校運営支援者協議会による共有目標の検討

学校運営支援者協議会において、学校評価等から、学校・家庭・地域で共有できる目標を検討する。

②地域の取組への参加における効果的な評価の工夫

生徒が意欲的に取り組めるような具体的な評価の工夫をする。

研究主題

「霞ケ関小学校、霞ケ関南小学校との小中一貫教育を見据えて」

川越市立霞ケ関小学校・霞ケ関南小学校・霞ケ関中学校

研究のポイント

○教育課程上の連携を推進するために、「９年間を見通したカリキュラム」を編成し、新学習指導要領全面実施に向け、試行する。
○スムーズな小中連携のために、協働授業や児童生徒・教職員の交流行事など多岐に渡った連携行事を行う。

1　研究の概要

(1)　研究主題設定理由

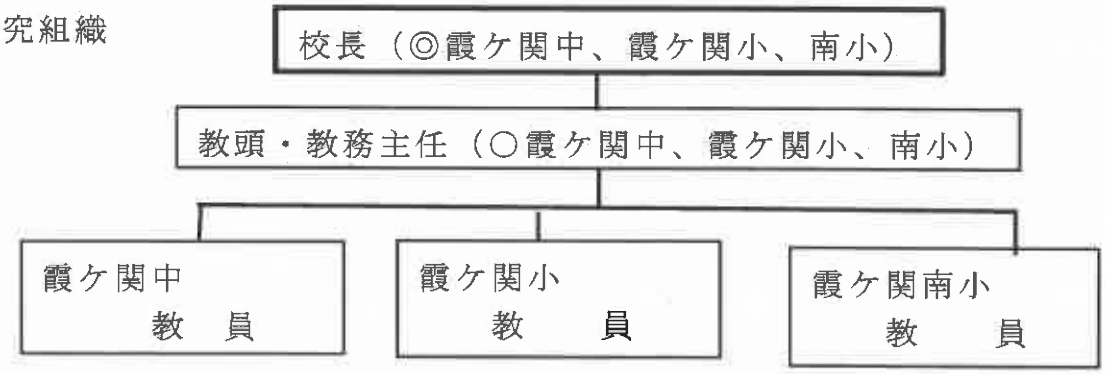
本校の大きな課題として、学力の向上と学校不適応の解消の二つが挙げられる。その要因の一つとなっているのが、小学校と中学校の指導の違いによって生み出される「中１ギャップ」であり、学力不振や学校不適応に関係している場合が多い。子どもたちが安心して登校し、充実した学校生活を送れるようにするためには、中１ギャップを解消する必要がある。そのためには小中の教員が９年間の学びと育ちの連続性を重視し、一貫した学力観や授業観のもとに指導にあたるという意識が重要である。とりわけ「教育課程上での連携」が９年間の連続性・系統性をもたせるための必要条件ととらえ、本研究のテーマとした。

(2)　研究の重点目標

本研究の重点目標として次の４点を設定した。

① 県学調の前年度比が、国語・数学ともに県より１０ポイント上回る
② 小中全教科で、学校毎の「学習定着度目標」を達成する
③ 不登校児童生徒の８０％以上解消
④ 「将来の夢、志を持っている」と回答する児童生徒を９０％以上とする

(3) 研究組織



2　研究の内容

今年度、小中連携の取組として４つの柱を立てて、実践を行った。

(1) 教育課程上の連携
(2) 授業における連携
(3) 児童生徒の交流
(4) 教職員の交流

単元配列表（数学）

単元系統表（理科）

3　研究の実践事例

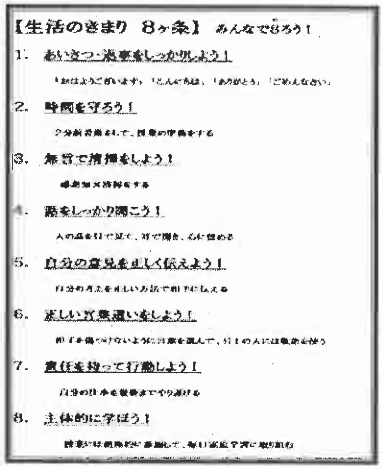
(1) 研究の柱１「教育課程上の連携」

①　９年間を見通した年間指導計画の作成

「小中一貫を見据えて」とは、とりもなおさず「教育課程上での連携」を表しており、それは小学校と中学校の教育課程に系統性を持たせるということである。そこで三校の教育課程上の連携を目指し、今年度、各教科で小中接続形式による９年間を見通した年間指導計画の作成に取り組んだ。まず９年間の指導の連続性・系統性を把握するために、教科毎に単元配列表と単元系統表を作成した。さらに全体計画の中に、①９年間で育てたい力と②協働授業計画、③小中共通の指導法を盛り込んだ。①については、９年間を基礎期（小１～小４）、拡充期（小５～中１）、発展期（中２～中３）の３段階に分け、それぞれの段階別、項目（領域）別に分けて作成した。②は中学校から小学校へ出向くのを基本とするが、可能な限りで小学校からも中学校に来てもらうように計画を作成した。

来年度は本指導計画を３校で試行し、つなぎ教材を作成しつつ、９年間の指導計画完全版を作成し、３年後には霞ケ関地区５校で実施していきたい。

②　共通生徒指導項目（「かすみＢＡＳＩＣ」）の作成


【生活のきまり ８ヶ条】 みんなで目ざろう！
1. あいさつ・挨拶をしっかりしよう！
2. 時間を守ろう！
3. 無言で清掃をしよう！
4. 話をしっかり聞こう！
5. 自分の意見を正しく伝えよう！
6. 正しい言葉遣いをしよう！
7. 責任を持って行動しよう！
8. 主体的に学ぼう！

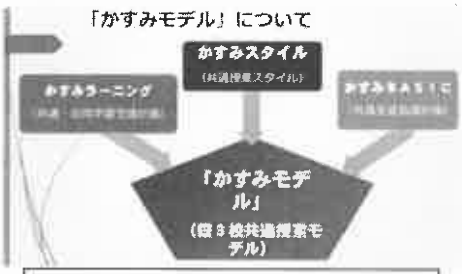
すでに授業規律の８ヶ条を作成し、小中で共通して指導しているが、これを基に生徒指導におけるきまりを、小学校低学年・中学年・高学年・中学と発達段階に応じて作成した。来年度、「かすみＢＡＳＩＣ」として小中の全教室に掲示し、統一して生徒指導を行っていく。中学校の生徒指導部会には小学校の生徒指導主任が毎週出席しており、日頃から連携する体制ができているので、今後も児童生徒の現状に応じて「かすみＢＡＳＩＣ」の検討・改良を適宜行っていく必要がある。

(2) 研究の柱２「授業における連携」

・「かすみスタイル」の作成

板書カードの活用（理科）

小中の学習面でのギャップをできるだけ少なくするためには、小中一貫した指導法や指導スタイルが重要となる。そのために小中合同の教科部会を行い、板書やノートの取り方、発表や話し合いの仕方など、各教科で統一して指導すべき事項を確認し、年間指導計画の全体計画に盛り込んだ。例えば、理科では「つかむ」「深める」など共通の板書カードを作成し、板書をする際に活用した。本カードの活用により、授業の流れも一定となり児童生徒にとってもわかりやすい授業となる。また社会では、話し合い活動の際の役割分担や進め方などを統一して、話し合い活動の指導を行っている。



「かすみモデル」

この共通指導法である「かすみスタイル」と「かすみＢＡＳＩＣ」（共通生徒指導事項）、「かすみラーニング」（共通学習支援計画）を統合し、「かすみモデル」として来年度３校で実施していく。いずれは霞ケ関地区五校で実施する予定である。

(3) 研究の柱３「児童生徒の交流」

① 小中交流（合同）授業

今年度、児童生徒の交流授業として家庭科や特別支援学級で実施した。家庭科では中学生によるミニティーチャーとして小学生にミシンの使い方を指導した。また２月の新入生体験入学では、毎年６年生が音楽と体育の体験授業を受けている。音楽では生徒会本部が中学の校歌を模範演奏し、小学生に歌い方の助言等を行った。体育では中学校で身につけるべき集団行動の基礎を体験した。

ミニティーチャー（家庭科）

新入生体験授業（音楽）

② 小中交流行事体験

今年度は児童が中学校の生徒総会やキャリア教育講演会に参加した。また中学校の生徒会本部と生活委員がそれぞれの小学校に出向いて、合同あいさつ運動を実施した。

合同あいさつ運動

（４）　研究の柱４「教職員の交流」

①　小中合同研修会の実施

年間に３回小中合同研修会を実施している。昨年より８月の研修会は５校が集まって実施している。６月と２月には相互に授業参観を行い、教科部会では、協働授業の計画や共通指導法の確認等を行い、カリキュラム上の連携に向けた協議を進めている。

合同教科部会（保体）

②　協働授業の実施

中学校の教員が小学校に出向き協働授業を実施している。今年度は国語、社会、数学、理科、英語、家庭科で実施した。小中ぞれぞれの指導法や指導内容の確認をすることで、９年間の指導の系統性を把握し、それぞれの授業改善に役立てることが目的である。

協働授業（外国語活動）

4　研究の成果と課題

(1) 成果

① 県学調の昨年度からの伸びにおいて、数学は１ポイント、英語は２ポイント県平均を上回った。

② 不登校生徒数が昨年度同時期の１１名から７名に減少した。

③ 今年度の職員学校評価において、「小学校の教育活動に触れる機会が持てた」と答えた教員は８５％であった。

④ 協働授業や合同教科部会の実施により、小中それぞれの指導法や指導内容に触れる機会が増え、相互の理解が深まった。

⑤ 合同教科部会を経て、全体計画や単元系統表の作成を行うことで、小中互いのカリキュラムの系統性や連続性を意識することができた。

(2) 課題

① 小中の目指す児童生徒像の策定は来年度の課題である。

② 小学校との連携は、物理的な距離が近い霞ケ関小に偏りがちなので、南小とのバランスをとる必要がある。

③ 研究の進め方がややトップダウン式であったので、小中合同の推進チームによる主体的な研究推進体制の構築が必要である。

④ いじめ対策の推進については小中が個々に進めているので、それぞれの生徒指導部・教育相談部を中心に共同歩調を取る必要がある。

研究主題

「外国語活動及び外国語科の効果的な指導方法について」

～自信を持って外国語活動・外国語科の授業を行うために～

川越市立山田小学校

研究のポイント

○新学習指導要領完全実施に向け、指導方法を学び、自信を持って授業を行えるように準備を進める。

○教師が外国語活動指導に対する自信を深めることで、児童が英語に慣れ親しみ、コミュニケーションを図る素地と基礎を養えるという考え方で校内研修を進める。

○AET との連携や、英語ボランティアの活用の仕方を工夫していく。

○英語ルームをはじめ、校内の環境整備を進める。

1　研究の概要

（1）研究のねらい

平成３２年４月の新学習指導要領完全実施に向けて、研修の充実や英語に関する指導方法を多くの教員が身に付けていくことが急がれている。

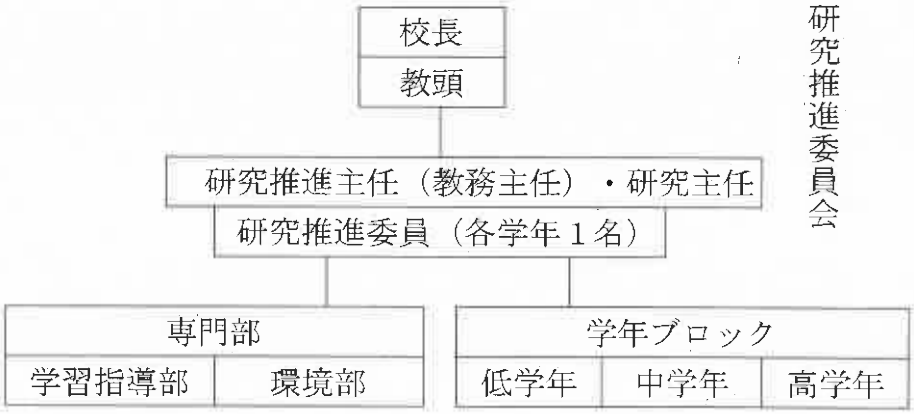
そうした中、本校では３０年度より２年間、川越市教育委員会から「外国語活動及び外国語科の効果的な指導方法について」の研究指定を受け、外国語活動・外国語科のモデル授業を提案するために校内研修を進めることとなった。

本研究は、外国語活動・外国語科の効果的な指導方法についての研究・研修・授業実践を通して自信を持って指導に当たれるようにすること、川越市内の先生方に研究・研修の成果を広めることを目的に取り組んでいる。

（2）研究主題設定理由

本校ではこれまでも高学年の「外国語活動」で担任が ATE と協力して授業を進めてきた。しかし、新学習指導要領により、中学年では外国語活動、高学年では外国語科が実施されるとより多くの教員が外国語の授業を行うことになり、研修の充実が急務であると考える。そこで、「指導方法の研究」に特化して校内研修に取り組むことを決定し、本研究主題を設定した。

（3）研究組織



2　研究の内容

（1）構想　**～先生方が自信を持って外国語活動の授業を行えるために～**

指導法が明確になり、自信をもって授業を行える　（教師）

↓

楽しみながら活動に参加でき、コミュニケーションを図る素地と基礎が養われる　（児童）

研究のための研究
研究発表のための研究　・・・・　学校 ⇔ 教育センター
過度な負担

＜協力・連携＞

今できること・・・　★指導方法の研修（授業）
★環境整備
★先進校の取組を参考にする

※児童の実態からスタートし、研究仮説を立てる一般的な研修のスタートではなく、教師の指導力向上を中心に据えて研修を進めた。

（2）専門部の取組

①　学習指導部

ア　授業の始まり方、終わり方などのルーティーンをつくる。

イ　HRT と AET の役割分担（AET との打ち合わせ）

ウ　学習指導案の形式

エ　学習支援ボラティアの活用の仕方

オ　英語ルームの活用の仕方（PC・TV・ホワイトボードの設置場所や活用）

②　環境部部

ア　掲示物を作成する（天気・あいさつ・曜日・月・数　等）

・大判プリンターで拡大し、英語ルームに掲示

イ　単元毎に絵カード等のファイリングを進める

ウ　３年生以上のクラスに日付（月・日・曜日）の黒板掲示を配布する

（３）研究主任による研修と校内研修

①模擬授業

②ショート研修

（月曜日放課後の職集後、５～１５分）

・Classroom English , Teacher Talk , Chant , etc

③ロング研修

（木曜日の研修日、３０分～１時間）

・模擬授業、展開の仕方、部会等

３　実践事例

（１）校内研修全体授業研究会（H30.5.31）

・授業公開　６年　Unit3「He is famous. She is great . 」　福島修嗣　教諭

・グループワークによる研究協議会

・指導講評　川越市立教育センター

吉田　一彦　様

（２）校内夏季研修・講演会（H30.8.21）

・埼玉大学教育学部教授　及川　賢　様

「小学校における英語指導で大切なこと」

（３）校内研修ブロック別授業研究会（H30.11.8）

・授業公開

２年「色で遊ぼう What color？　鎌倉　聖悟　教諭

４年 Unit5「Do you have a pen？」　吉岡　李英子　教諭

・指導講評　川越市立教育センター　稲葉　知己　様

吉田　一彦　様

（４）校内研修全体授業研究会（H30.12.8）

・授業公開

５年　Unit8「What would you like ?」

片塩　俊一郎　教諭

・指導講評

埼玉大学教育学部教授　及川　賢　様

（5）川越市教育委員会指定学校研究・川越市学力向上研究委員会授業研究会

・授業公開　3年　Unit8「What's this？」　栗原　苑美　教諭

6年　Unit9「Junior High school life.」　福島　修嗣　教諭

・指導講評及び講演会　「小学校の外国語指導で大切なこと」

埼玉大学教育学部教授　及川　賢　様

（6）授業研究会後の授業者へのフィードバック

研究授業を行う上で、授業者をはじめ、学年の先生方は当日まで準備のために多くの時間を割いている。しかし、研究授業後にそれ以上の成果が返ってこないようでは、授業者の先生方に申し訳ない。そこで、研究授業用のフィードバック用紙を作成し、授業を見る先生方が記入し、授業者に渡すようにした。研究協議以外にも、自身の授業の細かい点について知ることができる機会となった。

4　研究の成果と課題

（1）成果

① ショートやロングなどの可能な範囲での研修を継続することで、今までよりも自信を持って授業に挑めるようになったことが、教師の意識調査にも表れていた。また、授業の基本の流れの確認や統一を図ることができた。

② 英語ルームや各学級内の掲示物を作成することができ、英語を学ぶ環境が整ってきている。

③ クラスルームイングリッシュを使おうとする意識が高まり、授業の中に取り入れながら担任主導で授業を進めるという意識が更に高まった。また、AET や英語ボランティアの活用方法が分かってきた。

④ 児童も抵抗なく授業に参加できるようになってきており、AET や担任、友達との交流を楽しんでいる様子が見られた。

（2）課題

① AET との打ち合わせの持ち方（担当者の負担が大きい。時間の確保）

② 正しい発音で話せている自信を持てず、不安を抱えている教員もいる。さらに、英語を積極的に使っていこうとする姿勢を持つことができるよう、研修を重ねたい。

③ 児童が苦手意識を持たず、主体的に取り組むための指導方法の工夫について、研究を深めたい。

④ 書くことの指導について、授業の中に効果的・効率的に組み込んでいく工夫をしていきたい。

研究主題

「児童が自らの命を守る力を育てる安全教育（防災）の推進」

川越市立仙波小学校

研究のポイント

○児童の命を守るための安全教育(防災)の指導方法や教育手法等の研究を行う。
○教員、児童、保護者の防災意識を高める。
○様々な状況に応じた自分の身を守る対応力を身に付けさせる。

1　研究の概要

(1)　研究のねらい

児童の命を守るための安全教育（防災）の指導方法や教育手法等の研究を行うために、慶應義塾大学准教授、大木聖子氏を招聘し、安全教育（主に防災教育）の今後のあり方について考える。

(2)　研究主題設定の理由

多くの学校がこれまで行ってきた「緊急地震速報が鳴り、机の下にもぐり、“おかしもち”を守って、校庭に避難し、話を聞く。」という訓練が非現実的な面もあった。そこで、より現実的な訓練になるよう「ショート訓練」を実施したり、防災週間を設定し防災に対する意識を高めたりしながら、児童が自分の身は自分で守る力の育成を目指した。

2　研究の内容および実践事例

(1)　仙波小防災教育スケジュール

日時	内容・場所	時間	対象	○取組　★指導事項
5月19日	引き渡し訓練(地震→火災を想定)	45分	児童 教員・ 保護者	★地震時の動き、 避難の方法、“おかしもち”
5月21日	大木聖子氏によるショート訓練についての授業(6年児童) 校内研修(ショート訓練について)	45分 90分	児童 教員	★ダンゴムシ、サルのポーズ ○ショート訓練の行い方、 指導ポイントの共通理解
6月 1週目	ショート訓練についての解説 ＋ ショート訓練実施(教室など) (2，3，4，5年が保護者会で実施) ※1年生については各クラスで実施	30分 ～ 45分	児童 保護者	★ダンゴムシ・サル・ あらいぐまのポーズ ★3つの「ない」の確認 落ちてこない・倒れてこない・移動してこない ★大きな危険・小さな危険
2週目	教室以外の場所で ショート訓練　･･･告知あり	10分	児童	★大きな危険・小さな危険
3週目	そうじ (給食・休み時間等)　･･･告知あり	10分	児童	★大きな危険・小さな危険
4週目	クラスの実態に合わせた場所で ･･･告知なし	10分	児童	★大きな危険・小さな危険
7月2日	校内研修(防災小説) 大木聖子氏による指導・助言	90分	教員	○防災小説、緊急時の対応についてシミュレーション
7月17日	放送が使えないことを想定したショート訓練～余震が多発～	15分	児童 教員	○連絡手段の確認 ★余震が続くときの対応

2学期	7月の訓練を生かした不審者対応訓練	20分	児童 教員	○連絡手段の確認 ★身を守るための方法 バリケード
1月11日	事前予告をしない避難訓練	20分	児童	○子ども達の判断で避難
1月11日 ～18日	仙波小学校防災週間		児童	○防災標語の募集 防災バック展示 防災クイズ、アンケート

(2)　「ショート訓練」

ショート訓練は、初回を除いて５～１０分程度で行うことができる。初回は、ダンゴムシのポーズやサルのポーズ（大木聖子氏が推奨する災害時にとるべきポーズ）といった身を守る行動等についてレクチャーする。ショート訓練は、継続して集中してやる方が効果的という指導を受け、緊急地震速報の音源を各クラスに配布し、６月の間に教室だけでなく様々な場所で短期間に集中して行った。その後も、余震が多発することを想定したショート訓練を行ったり、３学期には防災週間の中でショート訓練を行ったりすることで、防災意識を高めていった。

(3)　「３つのない」

教職員の共通理解のもと、児童が自分の身を守る視点として「３つのない」を指導した。地震の揺れの際に起こる現象を映像で確認し、時計が落ちてきたり、棚が倒れてきたり、机が移動してきたりすることに気付かせた。そこから、地震の揺れから命を守る「３つのない」として、「落ちてこない、倒れてこない、移動してこない」を指導した。

(4)　「大きい危険、小さい危険」

上記の「３つのない」とともに共通指導事項として、大きい危険と小さい危険の視点で判断して行動できるように指導した。児童が活動している様々な場所には、多くの危険が隠れている。例えば、教室であればテレビ、蛍光灯、窓、掲示物など様々である。その中で、様々な危険を比較させることで、より危険なものから身を守ることの大切さに気付かせ、訓練の際にはこの視点でも振り返りの活動を行った。

(5)　様々な場所・場面での「ショート訓練」

児童が即座に判断して行動できる力を身ににに付けられるよう、場所については教室だけでなく体育館、理科室、図書室、コンピュータ室で行った。場面については、授業中、掃除の時間、朝の縦割り遊びの時間、休み時間などに「ショート訓練」を行った。

(6)　放送が使えないことを想定した余震多発訓練

本部	教師	児童	備考
１０時２５分地震発生 避難訓練開始 ◎震度５の地震 【緊急地震速報】 ↓	授業 身を守る行動ができていない児童に指示	授業 ダンゴムシ・サルのポーズ	・保健室にて、寝ている児童が居た場合の考慮。
１０時２７分 ◎余震① 【緊急地震速報】 ↓	身を守る基本行動	身を守る行動継続	・「３つのない」「大きい危険、小さい危険の視点で」児童を観察。
１０時２９分 ↓	児童に指示(より安全な場所に移動) フロアごとに対応相談	静かに待つ 窓をあける	
１０時３１分 ↓	校庭避難を判断→指示 後ろに並ばせる	後方に静かに並ぶ (防災頭巾をかぶる)	
１０時３２分 ◎余震② 【緊急地震速報】 ↓	身を守る基本行動 余震が続いているのでフロアごとに教室待機を判断→指示 (より安全な場所に移動)	教室でいつでも身を守る行動ができるように準備する。	
１０時３５分 ◎管理職が拡声器を使い、フロアを回る。 【安全の確認とその場に待機を指示】	児童を落ち着かせる。 教務主任　･･･南校舎２階、北校舎２階　→　１階 教頭　･･･南校舎１階、３階、４階		
全体を回り安全確認ができしだい、放送を流し終了。各クラス、振り返りを行う。			

(7)　実際に起こった場合を想定

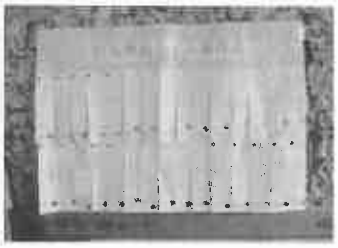
校内研修において、地震発生時、自分のクラスで想定される児童の動きや配慮事項をシミュレーションし、担任同士が伝え合う時間を設けた。日頃の訓練に臨む姿勢が教員側も変わるきっかけになった。訓練後には、必ず学年ごとに「こんな時はどうすればよいか。今日の訓練のここは実際に意味があるのか。」という視点を持ち、意味ある訓練にしていこうと改善検討しながら取り組んだ。

(8)　防災週間の取組

防災意識を高めるために、３学期初め１週間を防災週間として取組を行った。行った内容は、避難訓練、ショート訓練、防災標語、防災クイズ、防災グッズコーナー、防災アンケート、防災体験コーナー、防災の木である。

①　防災標語

避難訓練時に安全部の話で募集を呼びかけた所、募集期間が短かったにも関わらず、200 以上の標語が集まった。



② 防災クイズ

お昼の放送で、学校の防災設備に関するクイズを行い、日頃の学校生活でも目が向くような紹介をした。

③ 防災グッズコーナー

いざという時にあると便利な防災バックを展示した。学校の備蓄庫の写真も一緒に展示したことで、児童が足を止め確認する姿が見られた。

④ 防災アンケート

街角インタビュー方式で児童に「防災ポーチの中に入れるとよいと言われている心がほっとするもの、あなたなら何を入れますか？」と質問し、シールを貼っていくことで考えを可視化した。600人以上の児童が参加した。

⑤ 防災体験コーナー

ヘルメットコーナーと手回し発電コーナーを設けた。ヘルメットがあることで頭がしっかり守れることを体感させ、普段はないのでダンゴムシのポーズをとることの必要性に気付かせる声かけをした。

⑥ 防災の木

避難訓練や①～⑤の取組を踏まえて児童が感じたことを自由に書いてもらうコーナーを設けた。

3 成果と課題

(1) 成果

① 児童が教師の指示がなくても、状況に応じて考え、判断し、行動できるようになった。

② 教師の防災意識が高まり、より実践的な避難訓練(防災)について考えるようになった。

③ 児童の日常生活における防災意識が高まった。

④ 訓練を重ねたことで、どのような支援が必要なのか明確になった。
(例：職員室のAEDなど、保健室の病人が複数、けが人など)

(2) 課題

① 地震はいつ、どこで、起こるかわからないことを認識しているものの、今後の意識の低下が懸念される。継続して取り組む計画が大切である。

② 家庭の防災意識を高めるような取組を考え、学校から発信していく必要がある。

③ 何が最適な方法かは、季節によっても変わる。様々な想定のもとに訓練を行っていくことが必要である。

研究主題

「確かな読みの力を育む国語科教育のあり方」

～『言葉』を大切にした指導を通して～

川越市立大塚小学校

研究のポイント

○ 文章を正確に読み取り、内容を理解しようとする児童の育成を目指す。
○ 友達の読みに触れることで自分の読みを広げられる児童の育成を目指す。

1　研究の概要

(1) 研究のねらい

本校は、学校教育目標『大らかに、つよく、かしこく』のもと、主体的・創造的に生きていくことのできる児童の育成を目指し、豊かな心を育て、自立していくための資質を養い、たくましく歩む力を培うことをめあてに教育を進めている。その中でも、主体的・創造的に生きていく力の育成については、特に重点をおいて具体的な指導方法を考えていかなければならない課題の一つである。

また、本校児童は、アンケート集計結果から、国語が好きと答えている割合が、学年が上がるにつれて減っていく傾向が見られる。さらに、入間地区国語学力調査では、各学年でつまずきの見られる傾向がほぼ同じであり、もっと深く読み取る力を各学年で身に付ける必要がある。教師へのアンケートでは、毎日の国語科の授業をいかに魅力あふれる学習にしていくためにはどんな授業に取り組むべきか、児童の興味・関心を高める授業を研究したいという意向が強くあることが分かった。

これらのことから、平成30年度、国語科の指導法の研究を通して確かな読みがどの子もできるよう学校研究に取り組むことを考えた。

(2) 研究主題設定理由

文章がすらすら読める、声に出して読める、文章に書いてある内容について理解できるなどは、学習の成果を自他共に実感できるもので、国語科教育はもとより、生活していくための言語活動の根幹を担う力となる。まず、どの子にも確実にその力を身に付けさせ、さらにグループ活動を授業の中に取り入れ、人と関わる力を高めていくために本主題を設定した。言葉の力を伸ばし、豊かな心を育てる国語科学習を目指して、自分の思いや考えを伝え合うことができる児童の育成を図る。

2　研究の内容

研究の全体構想図

学校教育目標

大らかに
つよく
かしこく

研究主題

確かな読みの力を育む国語科学習指導のあり方

～「言葉」を大切にした指導を通して～

目指す児童像

- **文章を正確に読み取り、内容を理解しようとする児童**
- **友達の読みに触れることで自分の読みを広げられる児童**

研究仮説（１）

読みの技能を身に付けさせれば、文章を正確に読み取り、内容を理解しようとする児童が育つであろう。

読みの技能とは･･･
比喩・副詞・描写・時間を表す言葉・心内語・会話文などに着目して読めることと定義する。

手立て

- キーワードを探す
- ワークシートの工夫
- サイドライン
- ペープサート
- 板書の工夫
- 切り返しで比較
- 話し合いの仕方

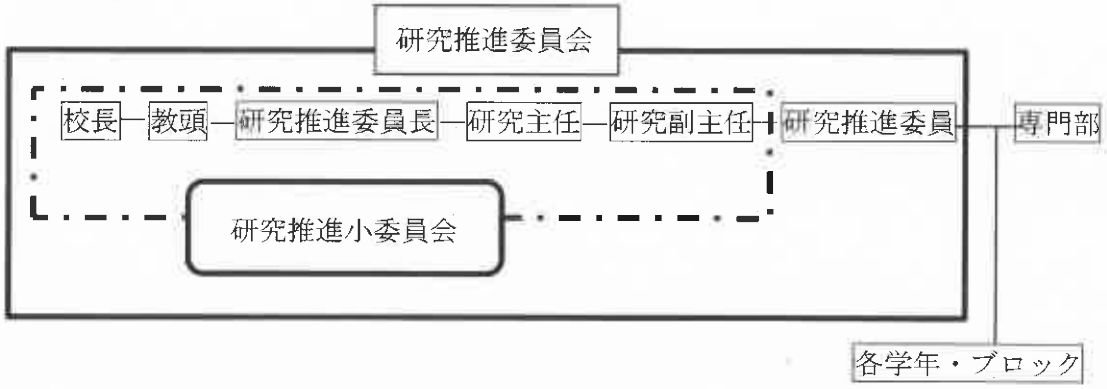
研究仮説（２）

毎時間、統一した流れを意識した授業をすれば、児童の読みの力が育つであろう。

手立て

- 授業の流れの統一
  - 音読
  - 前時の振り返り
  - 課題
  - 手立てを確認
  - 一人読み
  - 交流（一斉・グループ）
  - まとめ
  - ふりかえり
- 時間配分の工夫
- 座席の配置の工夫

研究組織



3　実践

○　夏季休業中　指導案検討

	13:00～	14:00～	15:00～	16:00～
8/28	２年	６年	５年	４年
8/29	３年	なかよし	１年	

○　研究授業の日程

日にち	研究授業	学年	単元名・教材名
９月１０日（月）	全体	な	説明文 『動物園の獣医さん』
１０月　１日（月）	ブロック	5	物語　物語の良さを解説しよう 『注文の多い料理店』
１０月１２日（金）	ブロック	2	物語　声や動きであらわそう 『名前を見てちょうだい』
１０月２２日（月）	全体	3	物語　感想を伝え合おう 『サーカスのライオン』
１１月　５日（月）	全体	1	説明文　のりもののことをしらべよう 『いろいろなふね』
１１月１２日（月）	ブロック	4	説明文　くらしの中にある「和」と「洋」を調べよう 『くらしの中の和と洋』
１１月１９日（月）	全体	6	説明文　町の未来をえがこう 『町の幸福論』

○　授業風景

4　研究の成果と課題

○話し合いの仕方や板書、ワークシートや学習活動の工夫により、児童同士のグループ活動が活発になった。

○各学年の国語科の授業を公開することにより、すべての教師が国語科授業の進め方を身に付けることができた。

○さらに研究を深め、児童の表現力を高め、人とのコミュニケーション能力を高めていくことが必要である。

研究主題

「意欲を高め、主体的に学ぶ児童の育成」

川越市立高階西小学校

研究のポイント
○学び方の基本を理解し、意欲的に学べるための工夫（授業のパターン化）
○児童が主体的に学べる学習環境の整備
○ペア・グループ・全員での話合いを取り入れた授業の工夫

1　研究の概要

(1)　研究のねらい

「分かる喜び」「勉強の楽しさ」を味わえれば、意欲的に授業に取り組み、主体的に学ぶ姿が見られるようになり、学力の向上につながると考え、３つの仮説を設定する。

① 学び方を理解し、課題解決のパターンが身に付けば、意欲的に学習に取り組めるであろう。

② 学ぶための教材や教具などが工夫されれば、それらを活用し、主体的に学べるだろう。

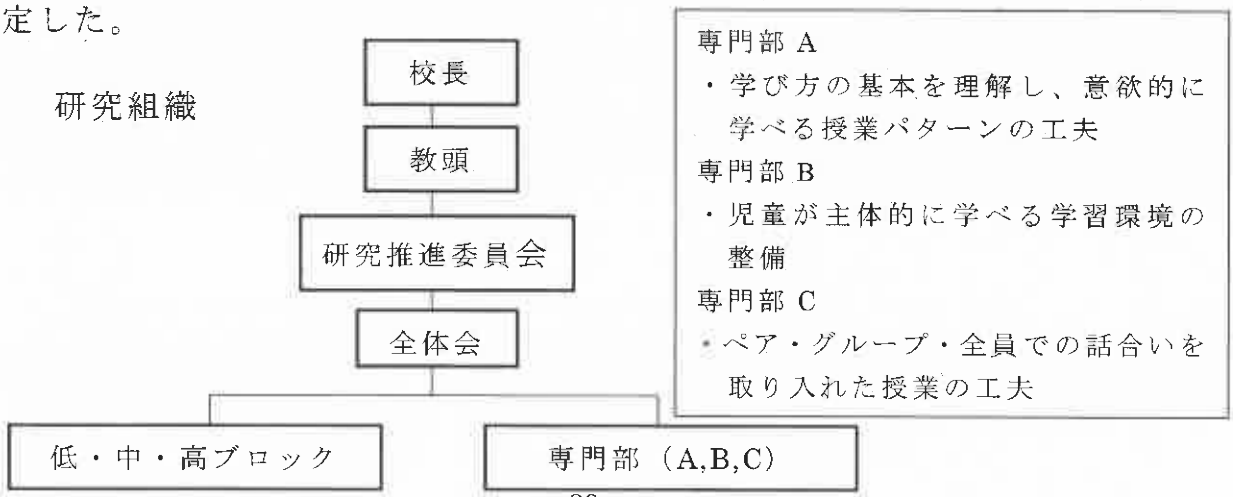
③ グループでの学び合いの中で、思考ツールが効果的に活用できれば、主体的に話し合えるだろう。

(2)　研究主題設定理由

本校の児童の実態として、「勉強が好きではない」「分からないからやる気にならない」という児童が複数名いる。「やりたくないのにやらされている」という状態では、学習が身に付きにくい。「やらされている勉強」から「やりたい勉強」「楽しい勉強」になるよう工夫することで、少しでも「わかる喜び」「勉強の楽しさ」を味わえれば、意欲的に授業に取り組み、主体的に学ぶ姿が見られるようになり、学力の向上に繋がると考える。

また、基礎学力を高めるためには、学び方を身に付ける必要がある。昨年度の算数科の研究では、授業展開をパターン化することで児童一人一人の発達段階や学習定着度に応じた学びを可能にし、基本を身に付けることができた児童が増えた。今年度は、他の教科領域等においても、授業の進め方をある程度パターン化するとともに、ユニバーサルデザインの考え方も取り入れ、より分かりやすくすることも大切であると考え、本主題を設定した。

(3)　研究組織



2　研究の内容

学校教育目標　　力を高め　みんななかよく　さあ、やるぞ

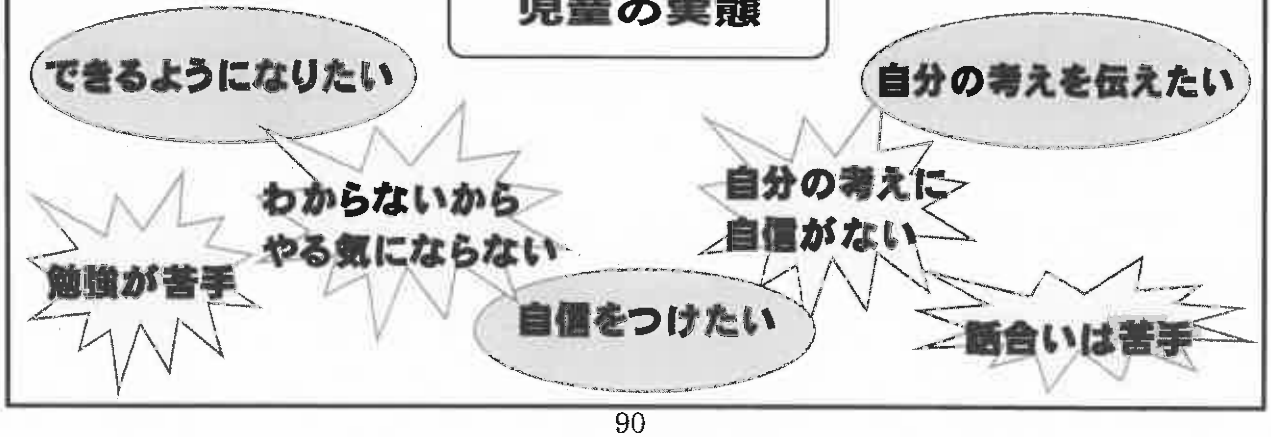
Ｈ３０年度研究主題
意欲を高め、主体的に学ぶ児童の育成

目指す児童像

目指す児童像	学び方を知り、自ら課題を見つけ、解決に向けて学ぶ子	自分の思いや考えをもち、伝えようとする子	友達の考えを聞き、認め合い、協力しながら活動する子
高学年	学び方を理解し自ら、よりよい解決策を見出し、解決することができる。	よりよい課題解決を目指し、友達の考えも取り入れながら、自分の考えを伝えることができる。	お互いのよさを認め合い、めあてに向かって活動できる。
中学年	学び方を身につけ、自ら課題を見つけ、解決方法を模索しながら、解決しようとすることができる。	よりよい解決を目指し、自分の考えと友達の考えを関連付けて、意欲的に発表することができる。	友達の考えを聞きながら、自分の役割を意識して、友達と協力して活動できる。
低学年	基本の学び方を知り、進んで解決しようとする。	自分の意見を発表することができる。	友達と仲良く、話合いや学習活動ができる。

【仮説１】
学び方を理解し、課題解決のパターンが身に付けば、意欲的に学習に取り組めるであろう。
【仮説２】
学ぶための教材や教具などが工夫されれば、それらを活用し、主体的に学べるだろう。
【仮説３】
グループでの学び合いの中で、思考ツールが効果的に活用できれば、主体的に話し合えるだろう。

児童の実態



3　実践事例

＜専門部Ａの取組（パターン化できる展開や学び方の工夫）＞

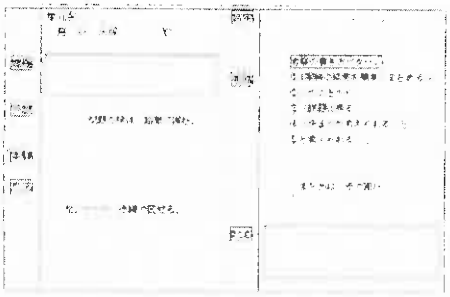
○「理科のスタンダードとノートの使い方」をつくる

①理科のスタンダードの授業展開

「問題」→「予想」→「実験」→「方法」→「結果」→「考察」→「まとめ」

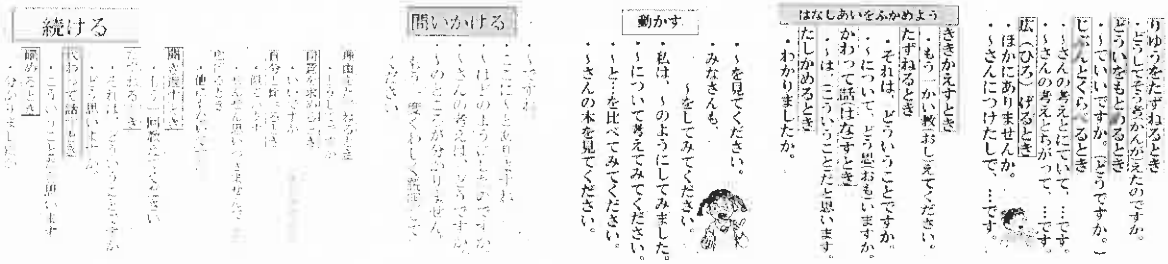
②理科のノートの使い方【基本】

・１つの課題（問題）に対して見開き１ページを基本に使う。



＜専門部Ｂの取組（グッズや掲示物の作成）＞

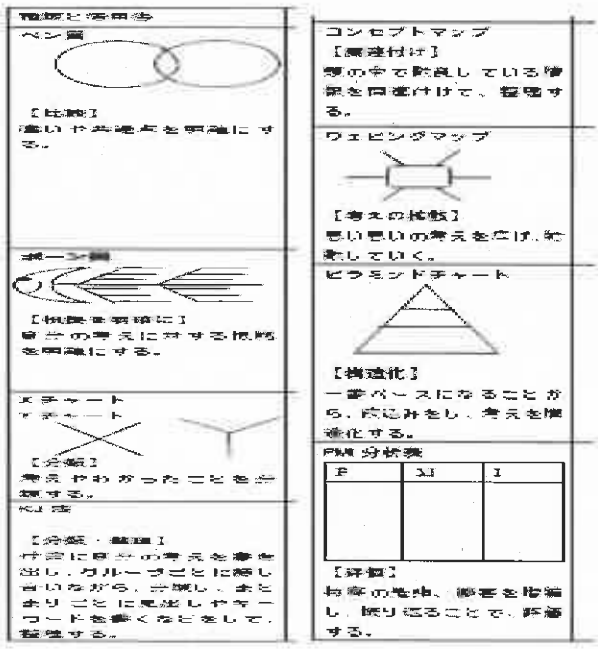
○お話名人（話型）～掲示物と手元資料～



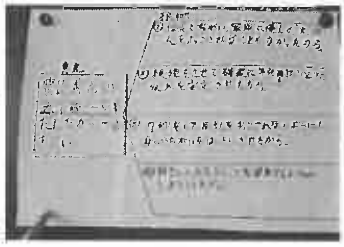
手元資料→

＜専門部Ｃの取組（思考ツールを利用した授業展開）＞

○種類と活用法

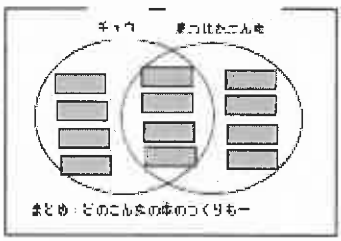


６年「社会」の例

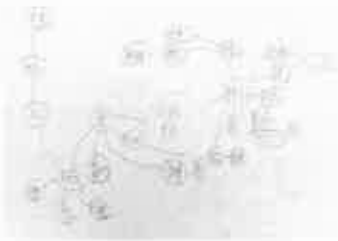


４年「国語」の例

３年「理科」の例



６年「総合」の例



4　研究の成果と課題

【埼玉県学力学習状況調査結果から】

学年	教科	領域	西小正答率	市正答率	県正答率
5	国語	全体	56.1	56.2	58.6
		レベルH29	5－C	5－A	5－C
		レベルH30	5－B	5－B	5－A
		話す・聞く	52.0	50.2	52.8
		書く	12.9	14.8	25.9
		読む	50.3	50.6	53.2
		言語	54.8	54.7	56.0

学年	教科	領域	西小正答率	市正答率	県正答率
6	国語	全体	58.0	63.9	64.9
		レベルH28	5－C	5－A	5－C
		レベルH29	6－B	6－A	6－A
		レベルH30	6－A	7－B	7－B
		話す・聞く	61.8	75.1	76.6
		書く	38.9	48.3	49.0
		読む	54.2	65.0	66.6
		言語	56.6	63.3	64.4

学年	教科	領域	西小正答率	市正答率	県正答率
5	算数	全体	52.6	56.1	56.8
		レベルH29	5－C	5－B	5－B
		レベルH30	5－A	5－C	5－C
		数と計算	57.1	60.6	61.5
		量と測定	46.1	49.9	51.6
		図形	62.7	68.7	67.5
		数量関係	42.7	48.7	44.8

学年	教科	領域	西小正答率	市正答率	県正答率
6	算数	全体	50.0	55.6	55.2
		レベルH28	5－C	5－B	5－B
		レベルH29	5－B	5－C	5－C
		レベルH30	5－B	5－A	5－A
		数と計算	64.0	68.9	70.0
		量と測定	48.9	57.8	59.0
		図形	48.5	61.6	61.7
		数量関係	36.0	53.0	53.9

＜　成　果　＞

○正答率を比較すると、県や市の正答率を下回っているが、レベルの比較からは、２～３段階 UP している事がわかる。これは、児童が問題に対してじっくりと思考する力を身に付けているためではないかと考える。

○教材教具の工夫や課題解決のパターン化、思考ツールの活用等により、全ての児童が「わかる喜び」や「勉強の楽しさ」を味わうことができ、見通しを持ちながら安心して授業に取り組めるようになってきた。

○自分の考えや意見を、全体に向けて発表することが苦手な児童が、ペアやグループ等の少人数学習では積極的に自分の考えや意見を発言出来た。これは、意図的に幅広い発表の機会を設定することによって、学習に対する意欲が向上し、主体的に学ぼうとする姿がみられるようになってきた成果と考える。

＜　今後の方向性　＞

●学力向上に繋げるために、「課題解決のパターン化」「教材教具の工夫」「思考ツールの活用」に取り組んできたが、各々に改善の余地が残されている。今後は、今年度の研究の検証及び来年度に向けての方向性を明確にし、さらに学力向上に向けて取り組んでいきたい。

●今年度に作成した授業パターンや思考ツール、教材教具を活用した授業実践を積み重ね、学力向上の実現を図りたい。

●次年度の県学調の結果の検証によって今年度の取組の成果と課題を明確に捉え、さらに児童一人一人の伸びにつながる指導法の研究を図りたい。

研究主題

「生徒が自らの命を守る力を育てる安全教育（防災）の推進」

川越市立川越第一中学校

研究のポイント

○生徒の命を守るための安全教育(防災)の指導方法や教育手法等の研究を行う。
○慶應義塾大学准教授・大木聖子氏と連携した校内研修や、様々な想定で行う防災訓練を通し、教職員の防災に関する知識や意識改革を図る。
○避難所設営を考える授業や災害から自他の命を守ることを想定した訓練を通し、生徒の防災意識を高めると共に人権意識を養う。

1　研究の概要

(1)　研究のねらい

日本は豊かな自然の恩恵を受けながら生活しているが、東日本大震災などの大地震、豪雨や猛暑など、我々はその脅威にさらされながら生活をしている。甚大な被害をもたらす自然災害が多発する昨今、学校教育における防災教育のあり方はその重要度が増している。

そこで、本校は川越市教育委員会の指定を受け川越市立教育センター墨谷悦史指導主事の指導の下、慶應義塾大学准教授・大木聖子氏を招聘し研究を進めた。大木氏による校内研修、避難所設営をテーマとした出前授業を実施した。そして、校内研修で得た知識や考え方をもとに安全教育担当が中心となって今まで行ってきた避難訓練の見直し、様々な想定を意識した防災訓練を実施した。

避難所設営をテーマとした出前授業や見直された防災訓練を行うことにより、災害から自らの命を自分で守るために主体的に判断し行動できる生徒の育成、そして自分だけでなく周囲の人たちに対する思いやりの心を育む生徒の育成をねらいとした。また。有事における教職員の役割、責任はとても重大である。教師の言葉一つで、生死が分かれることも大いにあり得ることである。よって教職員の防災教育に対する意識改革を図ることも大きなねらいとした。

同じ研究を本校校区の仙波小学校でも行っている。小中における良い連携教育としていくこともねらいの一つとしたい。

(2)　研究主題設定理由

本校では、例年火災や地震を想定した避難訓練の他、竜巻を想定した訓練をしてきているが、自分の命を守るために、主体的に判断し行動できる生徒を育てるために指導方法や教育手法等を研究し、安全教育の一層の推進を図るため、この題目を設定した。

(3)　校内組織

校長―教頭―教務主任・研究主任・安全教育主任
安全教育部会
上記を除く全職職員

2　研究の内容

期　　日	事　業　内　容	場　所	対　象
4月19日 4月20日 6月22日	研究推進委員会（研究計画、研究組織） 第1回防災訓練 校内研修 講師　慶応義塾大学准教授　大木聖子氏 （防災小説を用いた効果的な避難訓練の研究）	校長室 校庭 視聴覚室	推進委員 全教職員 全教職員 校区小学校教職員
7月13日	出前授業（第2学年） 講師　慶応義塾大学准教授　大木聖子氏 （補助：大学生） （避難所設営のための4コマ漫画を用いた授業を行い、生徒が主体的に判断し、行動できるようにする）	体育館	全教職員 第2学年生徒 保護者
9月4日	第2回防災訓練及び防災集会（1学期の校内研修、出前授業を活かして）	体育館	全教職員 全校生徒
1月8日	第3回防災訓練（1学期の校内研修、出前授業を活かして）	校庭	全職職員 全校生徒
2月～3月	本校ホームページ等での研究成果発表		

3　実践事例

(1)　校内研修

日時　　平成３０年６月２２日（金）１５：００～１６：００
講師　　慶應義塾大学准教授　大木　聖子　氏
対象　　本校教職員、地域の小学校教員
内容及びねらい
演題「これからの防災教育　～人を育む・未来をつくる～　」
内容「防災小説について」
ねらい　・自校の避難訓練について振り返る。
・効果的な避難訓練について考える。
①大地震による破滅的な状況を知る。

②減災・防災できると知る。
③地震と向き合う。自分で描いたより良い「防災小説」により、自分にとっての「今」や「周囲」の存在の意味を見出す。
④目指すべき自分像がわかる。かけがえのない「今」を生きる。
⑤他の人の綴った「防災小説」を聞くことで、想定外に対峙する力がつく。

校内研修の様子

出前授業の様子

(2)　出前授業

日時　　平成３０年７月１３日（金）
　　第６校時（１４：３５～１５：２５）
　　於：本校体育館
講師　　慶應義塾大学准教授　大木　聖子　氏　（補助：大学生８名）
対象　　第２学年　全クラス合同
内容及びねらい
　テーマ「避難所設営・運営のための４コマ漫画」
　内容　①避難所設営・運営に係る５班（食料物資班・庶務班・情報班・衛生班・学校再開準備班）を想定し、各クラスに割り振る。
　　②各班の４コマ目の吹き出しをグループごとに考える。
　　③各班の数事例を全体で発表。全体で意見を共有する。
　　④講師の大木先生より講評。
　ねらい　正解を求める教材ではない。決断や登場人物のセリフを埋める中で、災害時の場面を自分にも降りかかることとしてリアルにイメージしてもらうことを目的としている。
　生徒の感想
　・いつでも大きな地震に備えておかなくてはいけないなと思いました。また、地震などが起きてしまったときは、落ち着いて命を守り、避難所に行ったときは、自分が率先して動けるようにしたいです。
　・災害が発生して避難者が増えると、いろいろな問題が増えてその調整も難しくなることが分かった。実際に災害が起こった時は冷静に避難するのはもちろんのこと、避難所での生活も他の避難者と協力して、臨機応変に行動する必要があると思った。

(3)　防災訓練

日時　　平成３１年１月８日（火）＜今年度第３回＞
（帰りの会前の時間：生徒には伝えずに）

想定及びねらい

地震の発生後

①防火扉が閉まり、通常の避難経路が使用できなくなった場合でも安全に避難できるようにする。（教師が誘導する）

②避難困難になった生徒の対応を教員・生徒が連携して行う。

③２学期までの防災訓練の知識の定着を図る。

生徒の感想

・前の階段が閉まっていたけれど、あわてず指示に従って安全に避難することができた。訓練通りに避難できない状況でも指示に従って、または臨機応変に対応することが必要だとわかった。

・腰を抜かしてしまった友達のサポートもできたので、良い訓練だったと思います。今回のように、実際の地震が起きたときに考えられるハプニングに対応することが命を守るために重要だと改めて思いました。

4　研究の成果と課題

「避難訓練にかかった時間を計測して、『避難にかかった時間が短縮されて、今回の避難訓練は良かったですね。』こんな避難訓練をやっていませんか？こんな訓練は時代遅れです。」という大木聖子氏の言葉はとても衝撃的だった。

防災教育の研究を進めていくにつれて、生徒の変容とともに、教師の意識の変容が多く見られた。防災教育を展開していくことは、「未来の災害から自らの命を守るため」という目的以外に、避難所開設・運営を考えていく中で、周囲の方々への思いやり、心配りを考える生徒の増加に繋がったと言える。また、生徒の安全を確認する上で、生徒の所在確認はどうすべきか、そのためには教員はどう動くべきか、自分たちの役割・動きはどうすべきか、防災訓練ごとに教師側の意識も大きく変化した。つまり本校が共に進めている人権教育にも関わり、「思いやりの心を育む」「命の大切さを知る」「自分が人に大切に思われていることを知る」教育、自己有用感を育む教育につながっていると実感できた。

同じ研究を進めている仙波小学校でも、同様な成果が上がっていると思われる。「命を大切にできる」という意識が生徒に深まっていくことで、人権意識も育まれ「心豊かな」生徒の育成につながる。そうした生徒がいずれ地域に貢献できる存在となっていくことに期待したい。

今回の研究は、校種間連携教育を進める上でもとても価値ある研究になった。今後もこの取組を継続し、将来の地域に貢献できる、また将来の日本を担う、そして世界に羽ばたく生徒たちを育てるために努力していきたいと思う。

研究主題

「　学力の向上を図る教育活動の充実　」
～授業の質の向上を目指して～

川越市立霞ケ関中学校

研究のポイント

○ 小中一貫教育を見据えた「授業の約束」の更なる徹底
○ 家庭学習の定着と補習授業（Ｋゼミ）の充実
○ 生徒の習熟度に応じた個別支援についての研究

１　研究の概要

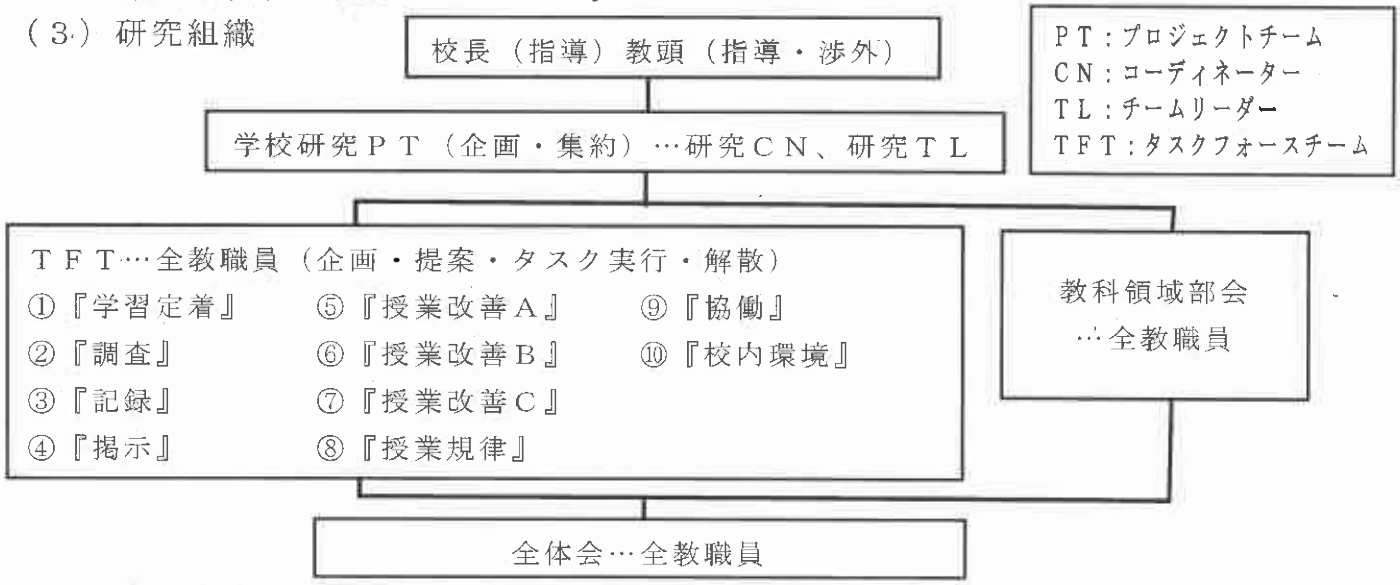
（１）研究のねらい

平成２８，２９年度の２年間の学力向上委嘱研究を踏まえ、既存の取組を一層推進しながら平成３０年度は、補習授業や個別支援についての研究を加えて行い、学校教育目標の具現化を図る。

（２）研究主題設定理由

学校評価アンケートから生徒たちに学習意欲、学習習慣、基礎学力に課題があることや保護者は「わかりやすい授業を子供たちにしてほしい」という願いをもっていることが分かった。そこで、この研究主題をもとに学校教育目標の具現化を図ることとした。

（３）研究組織

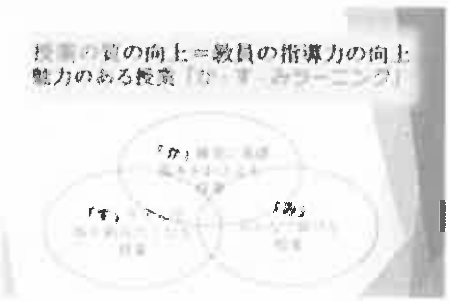


２　研究の内容

（１）学校研究ＰＴが組織、研究の方針・重点・計画を検討して立案する。

（２）各教科領域部会で、実態把握・研究テーマと仮説・具体策を検討し、「か・す・みラーニング」を授業の中で実践する。

（３）ＰＤＣＡサイクルによる途中評価から、成果と課題を抽出し、改善策を月に一回研修会で報告（マンスリー・レポート）を行う。



（４）各ＴＦＴによる検討と提案を受け、実行する。

（５）小中協働教科部会・授業を実施し９年間の学びの積み重ねにおける課題を抽出する。

（６）本年度のまとめと次年度につなげるＴＦＴの編成と実行を行う。

３　実践内容

（１）研究授業の実施

「か・す・みラーニング」に基づき各教科等で年間２回以上指導者を招聘して研究授業を実施した。

（２）家庭学習の取組

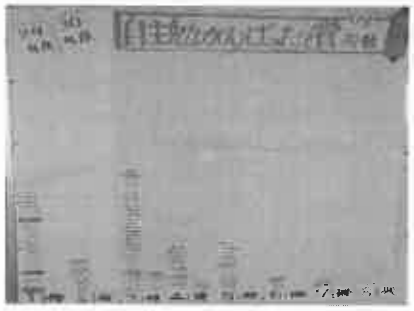
昨年度までの課題から「生徒が主体的に学ぶ」ということを今年度の重点に決めた。生徒が「自分で課題を見つけること」「学習方法を自分で考えること」という視点で研究を進めた。

①一冊終わるごとに名前を貼っていく掲示物を作った。

②活動班に自主学習ノートのチェック係を設けて生徒側からも提出に向けた声かけができるようにした。

③生徒のノートの良い例を、印刷して配布したり、掲示したりすることで模範を示した。

④学期末に自主学習ノートが一冊終わった生徒の表彰を行った。



（３）補習授業（Ｋゼミ）の充実

①定期テストに向けた補習授業と質問会をテスト前の２日間実施した。また、夏季休業中は全学年冬季休業中は第１学年が取り組んだ。

②生徒が質問をすぐできるようにするために、１校時目から３校時目まで各フロアの配膳室に机とイスを用意し各教科の担当の教員に質問できるようにした。

③長期休業中にＫゼミ（50分×２コマ～３コマ）を実施した。

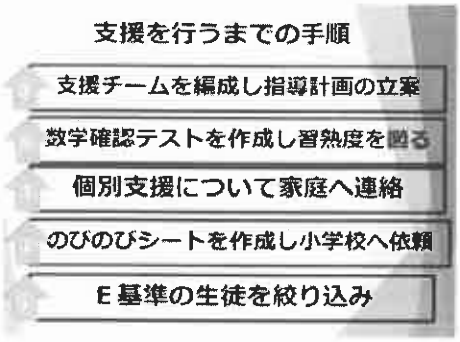
第１学年	７月２５日、７月２７日、８月２８日、２９日、３０日
第２学年	７月２４日、２５日、２７日、３０日、８月２８日、２９日、３０日
第３学年	７月２５日、２６日、３０日、８月２８日、２９日、３０日
第１学年	１２月２６日、２７日、２８日

④３年生を対象に、月、水、金曜日の７時４５分から８時０５分まで、朝ゼミを行った。教室を開放し、自主学習スタイルと英語の速読問題に分かれ学習した。自主学習スタイルでは、教科担当の曜日を決め、解き方の質問ができるようにした。

（４）個別支援策の研究

学力向上策の一つとして生徒の学習の習熟度に応じた個別支援についての研究を行った。今年度は、個別支援の方策を探るために第１学年の数学に絞り、全職員が分担しながら取り組んだ。

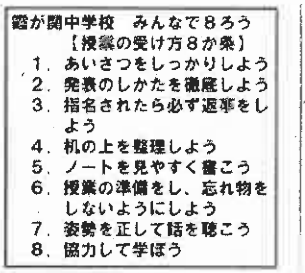
①Ｅ基準の生徒を絞り込んだ。
②絞り込んだ生徒について「コバトンのびのびシート」を作成し、小学校の教頭から今までの支援方法を記入していただいた。
③個別支援を行うことを家庭に連絡し了承を得たところで支援を始めた。
④数学科で今後の支援に生かすことができる確認テストを作成した。

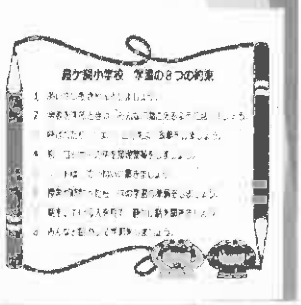


⑤確認テストをもとに習熟度を確認し具体的な支援策を各チーム毎に立てた。
⑥毎週（火）（金）の放課後２５分間で行った。部活動は、体育科の教員が中心になって体力づくりを運動部に行い指導できる教員を生み出した。

（５）「授業の約束」の取組

昨年度に引き続き、意識調査、委員会との連携、板書のカードやガイドライン作成などによる授業の一本化に取り組み、授業規律「みんなで８ろう」の浸透を図った。さらに９年間の小中一貫を見据えた「みんなで８ろう」について取り組み、霞地区５校での共有を目指した。


霞が関中学校　みんなで８ろう
【授業の受け方８か条】
1．あいさつをしっかりしよう
2．発表のしかたを徹底しよう
3．指名されたら必ず返事をしよう
4．机の上を整理しよう
5．ノートを見やすく書こう
6．授業の準備をし、忘れ物をしないようにしよう
7．姿勢を正して話を聴こう
8．協力して学ぼう



授業の充実をねらいとし、生徒に「授業の約束（みんなでやろう）」、教員に「授業の進め方（やるべし）」を立て意識調査を行いながら、全校で共通理解のもと、更なる指導推進を行った。

①掲示物を作って視覚化し、常に生徒たちが意識・確認できるようにした。本校の中央階段と東階段の２箇所に右の写真のように８か条を掲示し、毎日、目にするようにした。また、８か条の縮小版を机上にも貼り付けて、いつでも確認ができるようにした。
②９年間を見据えた小中一貫教育の一つとして、小学校の教員と霞地区「みんなで８ろう」を作成した。教室の前面と職員室の側面に掲示した。
③より生徒たちの中に浸透させるために、体育委員会・生活委員会と連携した取組を実施した。体育委員会では、「始業・就業の挨拶の徹底」を目指した活動を行った。生活委員会では、１１月を強化月間として毎日１つずつ意識させる取り組みを行った。

４　研究の成果と課題

（１）成果

Ⅰ　教師の授業力の向上

①保護者アンケートでは、「教員はわかりやすい授業の改善をしている」の質問に「とても思う」と答えた保護者の割合が、２２％から２９％に上昇した。年に３回、小中合同連絡会を実施することで、小学校教諭と中学校教諭の相互理解を深められた。

②板書やノートの統一を図ることで、協働授業で得た小学校での授業の板書方法や小中合同研修会で検討した指導法を基に、各教科に応じて学習のスモールステップを意図的に準備することができた。

９年間を見通した授業実践を行えたことで、、指導力を向上させることができた。

③先生は、熱意をもって教えてくれるか」の質問に「よく教えてくれる」と答えた生徒が、２６％から３４％に増加した。

④小中協働授業の実施が教員同士の研修の場となり指導技術の向上を図ることができた。

⑤小学校での取組を基本とした板書計画とノート指導を各教科で統一することにより、教師が学習内容を明確化することができ、授業の質の向上につなげることができた。

Ⅱ　生徒の学習意欲の向上

①「将来の夢を持っている」の質問に「よくあてはまる」と答えた生徒が４１％から４５％に増加した。

②「挙手や発言などで積極的に授業へ参加している」の質問に「よくあてはまる」と答えた生徒が 41%から 45%へ増加した

③予習復習をする生徒がＨ２９年度４３％からＨ３０年度５５％へ増加した。

④１日の家庭学習の時間が「２時間以上」と答えた生徒がＨ２９年度６％からＨ３０年度３４％へ増加するとともに「やっていない」と答えた生徒の割合も１４％から４％へ減少した。

⑤「授業の振り返りができた」と答えた生徒が 54.6%から 80.3% へ増加した。

⑥わからない点や疑問点を解決するために、進んでＫゼミに参加する生徒が増加した。

⑦授業改善や生徒の学習意欲の向上により生徒の学力がどのように変化したかを検証するために、埼玉県学力学習状況調査の結果を分析した。研究を始めた昨年度に比べて、伸び率が数学では３ポイント、英語では６ポイントと大幅に伸びた。

平成30年度埼玉県学力学習状況

	H29中	H29中	H30中
	1	2	3
国語	7-A	8-C	8-B
数学	7-C	7-B	8-B
英語		8-B	10-B

Ⅲ　学習環境の向上

①９年間を見通した授業規律を確立するための指標確認と策定を実施できた。

②掲示をきっかけにして廊下で学習の話をする生徒が増加した。

③自分の作品や結果が掲示されることを目標にし、学習する生徒が増加した。

（２）課題

①９年間を見通した系統性のある授業を目指した小中教職員間の相互理解の向上。

②望ましい人間関係の醸成や潤いのある学級・学年経営の実現に向けた生活規律や学習規律を霞地区５校での共有。

③家庭学習の向上をねらいとしたより細かい実態把握と指導方法の研究推進。

④コバトンのびのびシートを活用した個に応じた支援方法の更なる探究。

研究主題

「豊かな心と健やかな身体の育成」
～オリンピック・パラリンピック教育の実践と充実を通して～

川越市立鯨井中学校

研究のポイント

○２０２０年の東京オリンピック・パラリンピックにおける本市の取組を踏まえ、本校生徒に「オリンピック・パラリンピック」への興味・関心を高める。
○東京オリンピック・パラリンピックに向けた「オリンピック教室」におけるオリンピアンの授業を通した学習
○人権教育の充実により、生徒の人権意識を高め、様々な人権問題を主体的に解決しようとする生徒の育成

1　研究の概要

(1)　研究のねらい

中学校学習指導要領「保健体育体育分野H体育理論」において、「オリンピックや国際的なスポーツ大会などは、国際親善や世界平和に大きな役割を果たしていること」とオリンピックの意義が明示されている。パラリンピックにおいても同様であると考えられる。川越市は、2020年の東京オリンピック・パラリンピックにおいて、会場となることが確定している。身近な地域で世界の祭典が開催されることは、本校生徒一人一人の記憶に深く刻まれる「貴重な経験」となるに違いない。本校においてもオリンピック事業に合わせて学校全体で様々な視点からの参画を目指し、スポーツを通しての生徒の健全育成、地域へ貢献できる生徒の育成を目指していく実践的な行動力を身に付けることを研究のねらいとした。

特に「人権教育」「道徳教育」を充実させることで、自らの道を切り拓く生徒を育成する。

(2)　研究主題設定理由

２０２０年の東京オリンピック･パラリンピックの開催時には、生徒は１０代後半の青年期にあたる。将来に向けて自らの意思と能力で自らの道を切り拓くことができる生徒を育成するため、特に「人権教育」「道徳教育」に視点をあてることとした。また、校内研修、授業研究会、小中連絡会を通して、自ら考えて行動できる生徒の育成を目指していく。

２年後に開催される東京オリンピック・パラリンピックにおいて、本市がオリンピック会場になることは、生徒たちにとって歴史の１ページを身近に感じることができる貴重な出来事である。

今年度は、他者を尊重しこれと協同する精神や、公正さと規律を尊ぶ態度や克己心を育む一助とするために本研究の主題を設定し、「オリンピック教室」での学習を行うとともに、オリンピック・パラリンピックに関連した学習を展開した。

(3)　研究組織

校長 ―教頭 ―教務主任・研究主任－全教職員

2　研究の内容

期　日	事　業　内　容	場　所	対　象
５月	人権作文の指導と取組	教室	全学年
６月	社会：地理的分野 過去のオリンピック・パラリンピック開催国の調査を通して、参加国に対する理解を深める。	教室	１学年
６月	ロードサポート（３年） 通学路の清掃活動を通して環境保全とボランティアの精神を養う	鯨井中周辺	３学年
７月	ひいらぎ祭（体験活動） 「地域ふれあい体験講座」を実施し、日本の伝統文化に触れる。	体育館、教室	全学年
	いのちの出前講座（３年）	体育館、教室	３学年
８月	５校１公民館合同人権教育研修会	名細市民センター	全教員
８月	小中合同特別支援教育研修会	名細市民センター	全教員
１０月	ロードサポート（２年）	鯨井中周辺道路	２学年
１０月	「オリンピック教室」２学年総合的な学習 夢に向かって努力したり困難を克服したりする意欲を培う。	体育館・教室	２学年
１１月	小江戸ハーフマラソン応援ボランティア		全学年
１１月	キャリア教育講演会（全学年） 田中　玲子様（ソプラノ歌手）を講師とした講話と歌の演奏	鯨井中周辺道路 体育館	全学年
１１月	授業研究会（人権教育）		１学年
１月	ＰＴＡ家庭教育学級（人権教育）		１学年
２月	ロードサポート（１年） 研究のまとめ成果と課題の確認及び来年度の検討	教室 教室 鯨井中周辺道路	保護者

3　実践事例

(1)　職員の研修

①　合同研修会

名細５校１公民館合同人権教育研修会（講演会）

日時　８月２２日（水）　於：名細市民センター

内容　講演会テーマ「学校における人権教育」

講師　川越市少年指導センター指導員　松本英之　氏

② 人権教育授業研究会

日時　１１月２８日（水）

内容　人権作文集「あけぼの」を活用した授業実践 本校教諭 阿部紘平

(2) 生徒への指導

① 「オリンピック教室」

日時　平成３０年１１月２０日（火）第１・２・３・４校時

対象　２学年

場所　体育館、教室

講師　野村智宏先生

オリンピアン（オリンピック出場経験アスリート）が教師役となり、オリンピアン自身の様々な経験を通して「オリンピズム」や「オリンピックの価値」等を伝えると同時に、この価値はオリンピアンだけのものではなく、多くの人々が共有し、日常の生活にも活かすことのできるものであることを、授業を通して学習することができた。

② いのちの出前講座（３年生）

ＮＰＯ法人川越子育てネットワークの方々の指導による妊婦体験と赤ちゃんゲストとのふれあい体験を通じ、妊婦さんへの配慮、親の思い、自己と他者の心と体を大事にすること、生まれてくることの奇跡などを深く理解し、感じ取ることができた。

③ 人権教室

日時　１１月７日（水）

演題　「インターネットによる人権侵害」

講師　川越人権擁護委員連合会、ＮＴＴドコモ担当者

インターネットの普及により、様々な人権問題が発生していることや、個人の名誉やプライバシー保護の重要性が理解できた。

④　キャリア教育講演会

日時　１１月１５日（木）

演題「目が見えない　これが私の個性です」講師　声楽家　田中玲子　氏

心に残る感動的な話と演奏を通して、困難を乗り越え夢を実現する生き方について考える機会となり、豊かな心の醸成につながった。

⑤　生徒会活動

生徒朝会等において、生徒の立場から安全で安心な学校づくりを訴え、集団の意識の向上が図れた。

生徒会本部・学級委員を中心に朝の登校生徒に挨拶運動を行い、他者を思いやりお互いを認め合う活動を行った。

(3)　保護者・地域との連携

①　あいさつ運動

定期テスト前２日間、教師、生徒会本部・学級委員・保護者により朝の登校生徒にあいさつ運動を行い、他者を思いやりお互いを認め合う活動を行った。

②　ＰＴＡ家庭教育学級における人権教育の推進

日時　１２月８日（土）

講話　人権感覚を磨こう

講師　本校教頭　加藤裕幸

4　研究の成果と課題

(1)　成　果

オリンピック教室で学習した「エクセレンス」や「フェアプレー」、「他者への敬意」といった、オリンピック・パラリンピックの価値及びオリンピック・パラリンピック精神、他者を尊重しこれと協同する精神、公正さと規律を尊ぶ態度、克己心を培い実践的な思考力、判断力を育成するためには、体験的な活動や実体験を踏まえた講演会を実施することが重要である。これは生徒の感想や講演会の受講態度から十分判断することができた。また、今回の「キャリア教育講演会」を通して、障害のある方にどのような配慮と行動をするべきかを考えさせる一助にすることができた。

(2)　課　題

体験学習や実体験を踏まえた講演会の重要性は十分認識することはできたが、来年度以降、上記の取組を実施するにあたり、どのような体験学習を実施するか、年間指導計画のどの部分へ位置づけるか、講演会に招く講師の人選はどうするか、などの課題を解決する必要がある。

来年度は、上記に記載した課題を解決しつつ、本研究の成果を踏まえて、体験活動を取り入れた学習や人権教育に視点を当てた教育活動を展開していく。また、生徒・保護者・教職員・地域が一体となってチーム学校の具現化を推進し、本校のさらなる飛躍に努めていくことが重要である。